

不遇な朝田詩乃に寄り
添いたい

ヤン詩乃ちゃん(_´ω`)_

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ソードアート・オンライン第5・6巻を見て、朝田詩乃が不遇だと思った主人公。どうにか出来ないものかと思ったら、神の様な老人に転生を言い渡される。もちろん行先はSAOの世界。

……主人公は、朝田詩乃に寄り添えるのでしょうか。
私も不安です。

2017/5/2 日間ランキング初1位になりました。ありがとうございます

(3)

2017/9/5 私事でございますが、今年高校受験を控えた受験生で、大幅な

更新の遅れが出てしまっています。必ず更新は致しますので、これからも当作品をよろしくお願い致します。

2017/11/12

活動報告にリクエストBOX的な物を出しました (ω、)

やるかは未定ですが、出来たら要望にお答えしたいです (ω、)

2022/8/14

R18ver. を投稿しました。

成人済みの方どうぞ。 ← ←

<https://syosetu.org/novel/295067/>

目次

設定	1
番外編・i f 的なもの	
朝田詩乃を祝いたい	10
朝田詩乃とクリスマス	i f
18	
柊出雲と子作りがしたい	i f
36	
朝田詩乃とお正月	i f
42	
小学校編	
朝田詩乃と知り合いたい	55
朝田詩乃と仲良くなりたい	62
1	
朝田詩乃と友達になりたい	75
朝田詩乃と寝てみたい	81
朝田詩乃が最近おかしい	88
柊出雲は今日も恰好いい	96
朝田詩乃とプールへ行こう	105
朝田詩乃と流されたい	112
朝田詩乃を守りたい	121
柊出雲を助けない	129
朝田詩乃に寄り添いた……かった	136
柊出雲を愛している	147
高校生編	
朝田詩乃と暮らそう	158

朝田詩乃とアミユスファイア	168	朝田詩乃とB. o. B 予選第3回戦	240
朝田詩乃とゲームをしよう	177	「墓地」	
朝田詩乃とGGOの生活	186	朝田詩乃とB. o. B 予選第4回戦	240
朝田詩乃とベヒモス	194	「砂漠」	
朝田詩乃と999本の薔薇	199	朝田詩乃とB. o. B 予選第5回戦	253
第3回B. o. B編		「原子力発電所」	
朝田詩乃と原作主人公	205	朝田詩乃とB. o. B 予選決勝戦「大陸間高速道」	265
朝田詩乃とB. o. Bに出たい	215	陸間高速道	274
朝田詩乃とB. o. B 予選第1回戦	222	柊出雲とレン	290
「森」		朝田詩乃と本戦の始まり	295
朝田詩乃とB. o. B 予選第2回戦	230	朝田詩乃とB. o. B 本戦 Part 1	305
「刑務所」		朝田詩乃と観客	314

朝田詩乃とB.	朝田詩乃とB.
o.	o.
B本戦	B本戦
P	P
a	a
r	r
t	t
3	2
337	323

設定

【名前】 柊 ひいらぎ 出雲 いずも

【性別】 男

【誕生日】 1 / 1

【今作のポジション】 オリジナル主人公

【好きな食べ物】 カレー・肉じゃが

【嫌いな食べ物】 セロリ

【詩乃の呼び方】

【リアル】 朝田さん↓詩乃ちゃん

【心の中】 詩乃ちゃん

【備考】

【小学校編】本作のオリジナル主人公。前世では大学入試合格直後、つまり19歳前後で神から「死亡」の刻印を押され、SAOの世界へと転生した。それに関しては、「願った事だし、後悔はない」と思っている。

ヤンデレ詩乃ちゃん略して「ヤン詩乃ちゃん」に物凄いい好かれているが、本人はまだ

気付いていない模様。様子がおかしいとは思いついてはいるようだが、深く勘繰っている訳では無く、良くいえば現状維持、悪くいえば放置している。

声変わり前なのか、声だけ聞けば女の子のようにも感じる、とは詩乃談である。

【事件後】

第11話「朝田詩乃に寄り添いた……かった」の病室シーンにて、詩乃ちゃんが病んでいる事に気づき、その気持ちを無視する事も出来ず、毎日対処に手を焼いている。

右頬に小さな銃痕が残ったが、友達が詩乃ちゃん以外に居ない出雲には全く問題なかった。

【GGOの名前】 シュウ

【GGOのポジション】 前衛

【二つ名】 狂人・審判者
きやうじん ジャッジメント

【名前】 朝田 あさだ 詩乃 しの

【性別】 女

【誕生日】 8/21

【今作のポジション】 ヤンデレ系メインヒロイン

【好きな人】 柊 出雲

【嫌いな人種】力任せな人

【出雲の呼び方】

【リアル】終君↓出雲

【心の中】彼

【備考】

【小学校編】終 出雲と出会い、一目惚れで好きになる。魂の本質が【ヤンデレ】であり、この頃はまだ「好き」で「病んでいる」状態で、まだ「ヤンデレ末期」にはなっていない。

出雲の学力に迫いつくため勉強したり、難しい本や辞書を読みふけているので、小学5年生にしては頭が良く、精神も発達している。しかし、時々子供らしい一面を見せることがある。

基本的には自分からグイグイ攻めていくのだが、攻められるのには弱い。

原作では、父の死により、精神年齢が10歳前後にまでなってしまった母を守る事に、強い義務感を感じていたが、この作品ではその義務感は、オリジナル主人公への愛に変わっている。

【事件後】

一時は「出雲に嫌われた」と思い込み、考える事を放棄していたが、出雲自身の言葉

と行動により精神が回復。普段はツンデレのように振る舞うが、欲望や「好き」という気持ち爆発すると、半ば強引に出雲を押し倒しキスをする。頻繁に起こる訳では無いが、何か嫌な事があつたり、ストレスの溜まる事があるとよく爆発する。

最近では、出雲に論され、表面上は他者と少しづつ絡むようになってきた。

【補足】 オープンスケベと化した女神。サキュバス並に行為をせがんでくる。

【GGOの名前】 シノン

【GGOのポジション】 後衛・スナイパー

【二つ名】 氷の狙撃手・審判者
こおり そげきしゆ ジャッジメント

【名前】 詩乃しのはは母

【性別】 女

【誕生日】 2 / 4

【ポジション】 ヤンデレ系メインヒロインの母親

【備考】

【小学校編】 子供っぽい、天然な母親。詩乃ととても仲が良く、いつも笑っている。

詩乃が2歳の頃、旦那を事故で亡くし、その時に精神が壊れそうになったが、まだ幼い詩乃を抱きしめ、精神崩壊を免れた。これは、原作との違いである。

【事件後】

原作とは違い、詩乃ちゃんに一定の理解を示している。

詩乃ちゃんが療養している間にも、何度かお見舞いに来ていたが、考える事を放棄していた詩乃ちゃんの頭には届かず、療養中に会話はなかった。

【名前】 出雲父いずもちち

【性別】 男

【誕生日】 9 / 4

【ポジション】 オリジナル主人公の父親

【備考】

【小学校編】優秀な仕事人で、結構稼いでいるやり手のサラリーマンである。平日は毎日朝早くから出勤するが、その分早く帰って来て、1日1時間は「家族の時間」を作っている、理想の父親。

休みの日はプールに家族や詩乃を連れて行ったり、近所さんと呼んでバーベキューに行ったりと、近所付き合いも上手い。

【事件後】

出雲の事や詩乃ちゃんの事をとても気にかけており、最近はずくに仕事から帰ってきて

て出雲達と遊ぶようにしている。自分に出来る事、やれる事は全てやるつもりだ、と言っていた。

【名前】 出雲母いずもはは

【誕生日】 12 / 27

【性別】 女

【ポジション】 オリジナル主人公の母親

【備考】

【小学校編】普通の主婦。朝早くに起きお弁当を作り、家事をして昼間休み、また午後には家事をやるのルーティーンを繰り返している。毎日の「家族の時間」と休日を楽しみで、最近では裁縫にハマっているらしく、出雲の服や詩乃の服、ハンカチ etc を大量生産している。ご近所にもお裾分けしていて、中々評判も高い。

【事件後】

あまり「事件」については触れず、いつも通り振る舞うようにしている。特別優しくする事もなく、勿論厳しくする事も無く。

今まで過ごしていた「日常」を、また過ごさせてあげようという、出雲母なりの優しさである。

原作との違い

1. オリジナル主人公の存在
2. 詩乃母の精神安定
3. 詩乃ちゃんヤンデレ化（そしてそれに伴う大きなキャラ崩壊）
4. 詩乃ちゃんのPTSD未発症

GGOの《結婚》システムについて

メリット

どちらかが経験値を得ると、パートナーは経験値の2割が貰える（片方は10割、パートナーは2割で、その分経験値が減る訳では無い）

アイテム・資金が完全共有化され、プレイヤーに倒された場合のドロップ確率が減少する。

《結婚》している者限定のクエストやアイテムを手に入れる事が出来る。

《論理コード解除》が可能になる。

パートナーの位置が常にマップ上に映し出され、把握できる様になる。

デメリット

《結婚》した瞬間からアイテム・資金の完全共有が始まり、アイテムや資金に《鍵》をかけることが出来なくなる。

それに伴い、どちらかが他プレイヤーにキルされた時にドロップするアイテムがパートナーの物の場合もある。

別々のスコードロンに入る事が不可になる（片方がスコードロンに入った場合、そのパートナーがそのスコードロン入らなければいけない訳では無い）。別々のパーティーへの参加は可。

パートナーをキルしてしまった場合（故意かどうかは問わず）、共有資金の3割と共有アイテム5つが《消滅》する。（《消滅》とは、ゲームそのものからの消滅を指し、ゲーム内に個数制限のある武器又は防具が消滅した場合、サーバー上から削除され2度と手に入らなくなる）

異性との2人パーティーが組めなくなる。

尚、《結婚》システムは、1アカウントにつき2回まで行えます。

GGOの《離婚》システムについて

結婚している状態で

メニュー↓ヘルプ↓その他↓結婚
の順で行くと、

現在○○と《結婚》状態です。

と表示されます。そこで右上にあるヘルプへ行き、一番下へスクロールすると《離婚》の文字があります。その文字をタップすると、《離婚申請をしますか？ yes / no》と表示され、yes を押した場合、パートナーに《○○から離婚申請が来ました。承諾しますか？ yes / no》と出ます。そこでパートナーが yes を押した場合のみ、《離婚》が決定します。

資金は完全に折半ですが、アイテムのみ一時的に《共有ストレージ》と《ストレージ》の2つが現れ、自分のアイテムを移すことが出来ます。《共有ストレージ》は発生から24時間中でのアイテムごと消滅します。

番外編・i f 的なもの

朝田詩乃を祝いたい

皆さん、明日は大イベントだ。

明日は8/21日、そう！詩乃ちゃんの誕生日なのだ！

なので、今日は詩乃ちゃんの誕生日プレゼントを買おうと思う。何を買うかは決めてないが、とりあえず近くになんでも揃ってそうな「いかにも！」って感じのシヨツピングモールがあったので、そこに来てみた。こんなのあったつけ。

もちろんの事だが、詩乃ちゃんは付いてきていない。今は夏休みだが、そんな事お構い無しに毎朝6時に起こしてくる。自分で言うのもなんだが、朝が絶望的にダメな僕は、もちろん6時前に起きて来るなんて不可能である。

ので、徹夜した。物凄く眠い。でも詩乃ちゃんの為ならばとがんばりました。まる。しつかし、何を買おうか。原作詩乃ちゃんが付けてたような髪飾りは、既にあげてしまったし。「事件」の年ではあの髪飾りは付けていなかったが、今の年でもとても似合っていた。やはりあげて正解だったな。

……話が脱線してしまったな。何をあげればいいか、だったか……この際、詩乃ちゃ

んが何が欲しいかを考えるのはやめにしよう。考えたってわからない。原作詩乃ちゃんにはGGOと読書を抜けばほぼ無趣味だったからな……本でもあげればいいのか？いや、それはなんか嫌だ。それに僕程度が「面白そう」なんて思った本は、既に読んでるだろうし。

あー。スマホ持っていればなー。すぐに調べたのに……僕持っていないよちくしょー。嘆いていても仕方ない。まずはショッピングモールを回って、いいものが見つかったら、それを買おうとしよう。

ない！

僕の所持金で買えて、尚且つ詩乃ちゃんが喜びそうなものか！服もアクセサリーも高いよ！いつかは買ってあげたいけど、今は所持金が……うう、小学生辛い……

「……ん？」

そこで僕の目に止まったのが、とある花屋。ショッピングモールの出入口にある、小さな。

……花。花か……花つて結構高いんだよなあ……でも、もうこれくらいしかないか
な？流石に大きな花束なんかは買えないが、2本か3本くらいのなら……？

「あの、すみません」

「はい？」

店員のお姉さんが、こちらを向く。うん、可愛いけど、詩乃ちゃんには及ばないな。

店員に、いくつか花を見繕ってくれるように頼むと、

「彼女さんにプレゼントですか？」

と聞かれたので、少し悩んだが、はい。と答えておいた。そしたら、3本の、それぞれ別の花を見繕ってくれた。とても綺麗だが、何の花かは知らない。

「あの、この花はなんですか？」

「ああく……恋人さんにあげるのに、最適のお花ですよ」

と言つて、教えてくれなかったが、まあいいだろう。明日、これを渡せばいい。

その後家に帰り、花をバレないように保管する。切り花は長持ちしないと云うが、1日程度ならば大丈夫らしい。しっかりと世話をすれば、長持ちするとも言っていたな。

明日が楽しみだ。

翌日の朝、詩乃ちゃんよりも早く起きて逆に詩乃ちゃんの部屋に突撃……出来たら良かったのだが、生憎6時起きの詩乃ちゃんよりも早く起きれるわけがなく……

今日も今日とて詩乃ちゃんに突撃されました。

「……今日はもう起きてるのね」

なぜだか残念そうな顔で部屋に入ってくる詩乃ちゃん。気にせず、僕は隠しておいた花を取る。午後からは、普通に遊んだり、家族団欒したりあるだろうし。

「詩乃ちゃん」

「何？」

「誕生日、おめでとうー！」

さっと、後ろに隠していた花束(3本だけけど)を出す。驚いたような顔をして、そのまま固まる詩乃ちゃん。

何も問題ないよね？大丈夫だよ？何も喋らないから不安なんだけど……

「……これ、私、に？」

「う、うん。そうだけど……誕生日でしょ？」

「そう……そう……」

泣き出した。どうしよう……はっ！な、泣かせるつもりは無かったんだ！許してくれ！やっぱり僕なんか、花束なんて物をあげちゃダメだったって事かな……!?

「えつと……大丈夫かな？」

「大丈夫……嬉しくて……ありがとう、大事にするね……！」

ああ……喜んでくれて良かった。

さっきのが喜びの涙だと知った僕は安堵し、胸を撫で下ろす。詩乃ちゃんが、その手に持つ花束を折らないように、優しく持ちながら僕を真正面から抱き締める。

いつもなら力強く抱き締めてくるのだが、今回は優しく抱き締まった。力強くすると花が折れちゃうからね。仕方がないね。やっぱり僕は優しく抱き締められる方が好きかな。

その後、抱き締めるのをやめた詩乃ちゃんは、足早に自宅へ帰っていった。切り花は管理が大事って事を知っていたようだけど……小学生にしては博識だよなあ……

8 / 21、今日は私の誕生日……私は変わらず彼を起こしに行く。だが、今日は珍しく彼が既に起きていた。彼の寝顔を拝めないのは残念だが、まあいい。その分長く彼と会話出来るから。

……？何をこそこそしているのだろう。

「詩乃ちゃん」

満面の笑みで私の顔を見る彼のその姿に、私の胸が高鳴るが、もう表に出す事は無い。帰ってからが大変だが。

「何？」

「誕生日、おめでとうー！」

……言葉も出ない。ただ私は嬉しくて、涙が流れた。今まで、彼には色々な物を貰った。目に見える物から、目に見えない物まで……毎回毎回、何かを貰う度に、私は堪らない程嬉しくなる。

「……これ、私、に？」

「う、うん。そうだけど……誕生日でしょ？」

「そう……そう……」

思わず問いかけるが、やはりこれは私への誕生日プレゼントで間違いないようだ。も

う嗚咽でまともに喋る事も出来ない。

「えつと……大丈夫？」

心配そうな顔を向けてくるので、花を受け取って彼を抱き締めて安心させる。

「大丈夫……嬉しくて……ありがとう、大事にするね……！」

お礼も忘れずに。

そのまま数分抱き締め、名残惜しいが離れて急いで家へと帰る。早く花瓶にささなければ……

貰った花は、白いカーネーション、赤い薔薇、アイビーの3本。花言葉は、左から「純粋な愛」「愛情」「永遠の愛」……恐らくだけど、知ってて選んだのではないだろう。彼は花言葉で告白するようなロマンチストではない……

翌日、私はガマズミとアジサイとイカリソウをあげた。彼は喜んでくれたようで、私も嬉しくなった。

「誕生日にあげたのに翌日お返しを貰うなんて、変だね」

「あげたくてあげたのよ、気にしないで」

「うん……それで、なんでこの3本なの？」

「……なんとなくよ。綺麗でしょ？」

「うん、そうだね。本当にありがとう、詩乃ちゃん！」

朝田詩乃とクリスマス

i f

く〜リスツマツスがっ♪今っ年もやつて来たあ〜♪悲しかったっ♪出来事も♪消し去るよ〜をに〜♪

さあ〜パジャマを脱いだら♪

「ヤリましょう!」

犯されます。

パジャマを脱いだら犯されます。嫌です。その手を離してください。クリスマスの朝ですよ。なんで全裸で靴下だけ履いてるんですか。「今年のクリスマスプレゼントは、この☆わ☆た☆し☆」とでも言うつもりですか。上手くねえんだよお!

「離っ……やめ……ヤメロー!」

こんな時間からなにしてんのさあ!寒いでしょそれ!クリスマスの朝は冷え込むよ!外見なよ!ホワイトクリスマスだよ!☆ホ☆ワ☆イ☆ト☆ク☆り☆ス☆マ☆ス☆!」

「こんな時でも心配してくれるのね……優しいわ」

「ラノベの定番ウイスキーボンボンでも食べた!」

「今日はクリスマスだからヤリましょう」「今日は寒いからヤリましょう」「今日はハロ

ワインだからやりましょう」「特に理由はないけどやりましょう」と、「あの日」以来なにかと理由を付けて僕の体を求めるようになった詩乃ちゃん。最初は1ヶ月もすれば元に戻るだろうと思ってた。今までもそうだったし。

なのに何故か戻らない。そのせいで僕は朝に強くなりました。悲しいかな。

朝ご飯食べたら普通の詩乃ちゃんに戻るんだけどなあ……

取っ組み合いの結果、ボクが詩乃ちゃんを果てさせておしまい。

いつもの攻略ルートだね。布団洗わなきや。

「ねえ、出雲。今日この後って予定はある?」

「ん?んー……特に無いけど……何処か行くのかい?」

何かしらの誘いはあるかなと考えていたが、結局イヴ当日まで誘いがなかったもんで大人しくする気かと思っただが……そうじゃなきやそうだな。

「実はね。前々から行きかけた遊園地があるの。一緒に行きましよう?」

「ん、良いよ。いつ行くんだい?」

「今」

デジャブを感じるよ？

苦笑いしながら頷き、着替えを始める。僕はさっさと着替え終わったが、詩乃ちゃんは下着姿のまま「あの服がいいかな」「この服がいいかな」と悩みに悩んでいる。

口出しをしても「貴方の横に立つ相応しい格好をしなきゃいけないの」と言つてやめないの、もう諦めた。ギリギリな事もあるが、ちゃんと時間は守ってくれるので別にいいし、詩乃ちゃんの下着姿も眼福なのでこのままでいい。やっぱり止めなくていいや。

服が決まり、電車に乗って詩乃ちゃんが気になっていたという遊園地へと向かう。原作キリトくんみたいに、バイクでカッコよく参上したりしたかった……んだけど一緒に暮らしてるしこんな寒い日にバイクとか考えられないね。

右隣にいる詩乃ちゃんを横目で見てみると、何やら窓の方を向いている。

「……………」

気になって首を右隣の方に向けると、手袋を外した詩乃ちゃんが、窓の結露に細指を這わせ何かを描いていく。

「……………」

少し頬を赤く染め、空いている方の手で僕の手を握りながらスラスラと書いていく。窓の方に目を向けると……鈴、いや、ベルだろうか？チャペル等にありそうなベルを描いており、書き終わったと思つたらボーっとそのベルを見つめていた。

「ベルかい？上手いね」

「そ、そう？なんでもないわ」

チラツとこちらを見て、焦つたように暖かい吐息を窓に当てて描いたベルを薄くする。何だろうと思つたが、それを聞く前に詩乃ちゃんが結露に指を這わせた事によつて濡れた左手の指先を、そのまま手袋の中に入れようとしているのを見て、慌てて手を掴む。

「そのまま手を入れたら手袋の中が濡れてしまう」

そう言つて、僕の右手で詩乃ちゃんの左手を包み込む。

「今日は寒いからね。一緒に温まろうか」

普通なら小つ恥ずかしい事も、ここ数年で口からスラスラと出るようになってきた。別に僕が女つたらしな訳じゃないからね。言えるのは詩乃ちゃんと2人きりの時ぐらいさ。

「あり………がとう………」

顔を赤く染め、そつぽを向いてしまう。しかし握られた左手は固く閉じられ、じんわ

りと2人の手の温度が混ざり合い心地よくなって行く。

詩乃ちゃんは性愛や独占愛なんでものは難なくこなすが、ただ一つ、「純愛」という物に弱い。

AVや映画の濡れシーンなんかを見ても顔を赤らめる事は無いが、普通のラブストーリーや王道の恋愛ドラマなんかの、特にキスシーンとかとなると顔を赤く染めチラチラとしか見なくなる。

今まで「純愛」という物を体験せず、「独占愛」なんて物しか知らずに育った弊害とも言えるか。歪んだ心を持っている者に、真っ直ぐな物は合わないのだ。

『次は○○○○○○○○』

「あ、う、ううううよー！」

「うん?」

ちよつとイントネーションがおかしかった気もするが、まあ、気のせいだろう。詩乃ちゃんに手を引かれるまま電車を降り、改札を出てバスに乗る。

中々大きい遊園地らしく、直通のバスまであった。

「ね、詩乃ちゃん。着くまで暇だし、何かゲームでもしないかい?」

「ゲーム?……そうねえ……そう言うには、何かあるんでしょうね」

「えーつと……ねー……」

「分かったわ。もういい」

思い付きで発言するような男でごめんね。

でも暇なんでもん。アミュスファイア持つてくる訳にも行かんし、だからつて各々携帯で好きなの見て、なんてやだし。

「あ、そうだ！ならさ。詩乃ちゃんの昔の事聞かせてよ」

「昔の事……つて言つても、私の一番古い記憶にも貴方がいるのだけど？」

「でも、その時の詩乃ちゃんやんが僕の事どう思つてたかとか、わかんないでしょ？だから教えて欲しいなつて。いつ好きになつたのかも教えて貰えると嬉しいよ」

うゝん。恥ずかしいなこれは。キザな台詞を吐く方がまだ気が楽だよ。「僕の事いつ好きになつたの？」「こ、去年ですわね」なんて簡単に聞けるわけ……え？アレ？なにい（r
y

「……そんなに聞きたいの？」

その言葉に僕は「聞きたい！」と念押しする。少し赤くなり、顔をポリポリと人差し指でかき「仕方ないわね」と過去の事を振り返り教えてくれた。

「事件」の話に入った時に「辛いなら無理して話さなくていいんだよ？」と言つたが、「私にとつては大事な事なの」と言い、話してくれた。少し所ではなく猛烈に恥ずかしくなり、繋いでいない方の左手で顔を隠しながら反対方向を向く。今絶対顔真っ赤だと思

う。クスクス笑う声が聞こえるけど、逆の方が多いつて事忘れるなよ！ 仕返しするからな！

「ジェットコースター楽しかったわね！……大丈夫？」

「だっ、大丈夫……大丈夫……」

何を隠そう僕はジェットコースターが苦手なのだ！……とでも言い出しそうな場面だが、全くそんな事は無い。得意ではないが苦手でもない部類だ。ちなみに苦手なのはメリーゴーランド。僕が幼少期に行った所だけなのは知らないが、とても股が痛くなる。上下運動（下ネタにあらず）が激しいんだよ！

話が脱線したが、まあ、僕がこうなってるのは簡単に説明すれば詩乃ちゃんのせいなのである。全部。紛うことなき、全てが、だ。

「普通7回も乗るかい……」

「この遊園地の目玉よジェットコースターは」

「に、してもだよ」

途中昼ご飯を挟んだから余計に辛い。吐きそう。お前らアレだからな。「流石に何回も乗ったら慣れるだろ」とか思ってるだろ。慣れないからな！7回オール見事に辛いからな!!

「そろそろ暗くなってきたわね」

「えっ嘘ジェットコースターしか乗ってないよ?」

本当だった。夜の遊園地は明るいので上を見なければ分かり辛い、空は真つ暗だった。ジェットコースターに乗ってる時は途中から目を瞑って横に座る詩乃ちゃんの嬉しそうな叫び声に集中していたから、よく分からなかった。

「さっ、観覧車乗りましよ!吐き気覚ましにもなるわよきつと」

「い……いやいや。外で新鮮な空気吸ってた方が、よっぽど吐き気覚ましになると思う……」

「カップル組で」

「話を聞くんだけお願いだから」

係員のお姉さんに「すみませんこの観覧車の営業は1時間後になります」と申し訳無さそうに言われた。夜限定の観覧車か……ナイト遊園地って奴か?夜からが本番なのか、この観覧車は。

「あ……じゃあ、その辺のベンチで休みましようか」

「おう……」

ベンチに腰掛け、詩乃ちゃんの肩に頭を預ける。冬らしい寒い空気が肺の中を循環し、熱くなった体を冷ましていく。その心地よい感覚と、7回にも渡る怒涛のジェットコースターによる疲れが押し寄せ、少し眠くなってしまう。

「……………」

一言断りを入れようとしたが、入れる前に僕は眠ってしまった。

「はあ……なんでこんなにカッコイイのかしら……」

私の膝の上で眠る出雲の頬や髪を弄りながら、ポツンと呟く。それ程までに私の夫はカッコイイし、可愛い。その世の褒め言葉全てを同時に言っても表現出来ない程に。

「喉が乾いたわね……でも出雲を起こしたくはないし、退かしたくもない……」

そうは言っても喉が乾いた。先に飲み物を買っておくべきだったかと後悔しながら、そっと出雲の頭を持ち上げて、下にカバンを敷いて置く。

私の太腿より硬いカバンに枕が切り替わった事に気付いたのか、少し身動きをしたがそれだけだった。

起きなくて良かったと安堵すると共に、私の膝でなくてもいいのかと、誰に向けるわけでもない嫉妬心が浮かぶ。

「……お茶、買ってこよう」

財布を手を持ちながら、時々出雲の方を振り返り、寝ている出雲に良からぬ事をする女がいないか警戒しながら、近くの自動販売機に付く。

「眼鏡の姉ちゃん。クリスマススイヴの夜に一人かい？俺達が一緒に居てやろうか？」

お茶を買って、それを取り出し口から取り出そうとした時に、背後から知らない男の声がする。またかと思いつながら振り返ると、3人程のピアスやタトゥーを入れた「いかにも」な奴らが立っていた。よくもまあかっこよくもないのにそのような物を付けられるものだ。「恥」という言葉を辞書で引いたらどうなの？

「一人じゃないし、先約がいるから結構よ」

ナンパには大まかに2つに分けられる。

良心的なナンパと面倒なナンパだ……いや、ナンパな時点で良心的とは言えないし、ナンパは全部面倒だけど、大まかに分けて、ね。

良心的なナンパというのは、大体一言断りを入れたら去っていく。ダメで元々、とい

う輩に多い。

後者はイベント物に多い。ハロウィンやクリスマス等だね。こっちは、まあ、しつこい。何度言おうと何を言おうと食い下がらない。最後は結局暴力行使である。人のいる所に出て殴られたりはほしくないようにしているけれど……困まれてるわね。

「そんな事言わずに、ね？」

「今日はクリスマスだぜ？ 今日くらいソイツも許してくれるさ」

「そうだよ（便乗）」

「……本当に結構よ。どいてくれないかしら」

決して人目が多いとは言わないが、少なくともない。しかし他のカップルは素通りするし、アトラクションの係員でさえ目を合わせない。慣れっこなので一々文句を言ったりしないが、そういう奴らを見る度に「やはり出雲以外は取るに足らぬ物」と再認識する。

「だーかーらー。大人しく付いて来いって」

「痛い事とかしないから、大丈夫だよー」

「なんで拒否する必要があるんですか（曲論）」

嗚呼面倒臭い！ さっさと退けばいい物を！ 私の態度を見てまだ「行ける」とでも思っているのか!? 余程その醜い姿に自信があるようだな。鏡を見た後その鏡に頭から突つ

込むといい。今よりマシな姿と頭になるんじゃないか!?

全身で「不機嫌」オーラを出しながら、どうすればここから出られるか思案していた時……

「つかさ、その先約、ぜってえ俺らよりブサイクだべ?」

「つまんねー男より俺らみたいなのと過ごした方が幸せだと思っただけどなあ?」

「カンノミホ……(?)」

「……は?」

今こいつらはなんと言った?

ブサイク?つまんない?お前らといった方が幸せ……?

?
こいつらは自分達と出雲を比べ、あまつさえ「自分たちが上」だと判断したのか……?

嘘だろう?月とスッポンどころか、糞を下水で煮込んだ物と神を比べるようなもの……いやそれ以上の差があるというのに……?

「冗談もいい加減にしなさいよ……」

「あ?」

目の前に陣取っていた男の口を掴み、そのまま力を込める。

「まだ私を誘うなら許すわ。絶対に乗らないし、断りを入れるだけだもの。強引に手を

出すなら許さないけど、それ以上に許されないのは……彼を侮辱する事よ。

貴方は何を持って彼を自分より下と判断したのか知らないけど、貴方みたいな、姿も心も醜い人間とは比べ物にならないような人よ。私が愛し愛されるのは彼以外にないともう決めているの。

さあ……わかつたらその汚い口を閉じなさい？」

「あ……あがが……」

顎が外れ、閉じようにも閉じられない様子。

「……その汚い口を……閉じなさい！」

そんな事お構い無しに、アツパーをいれ無理やり口を閉じさせる。そのまま2人目の目を潰し、足をかけ転ばせる。

「私はね。彼を守る為に色々勉強したの。その道の人と1体1で戦って勝てる自信はないけれど、貴方みたいな何かを極めてもない、ゆるりゆるりと流されるまま、本能のまま生きてきた人種には絶対に負けないと自負できるわ」

そう言い、2人の性器を思い切り踏み潰す。先程まで呻き声をあげていた2人が声のない叫び声を上げ、気絶する。

この世には辜丸を潰されショック死した人間もいるらしいが、どうでもいい。むしろ死ねばいい。

「……」

「……す、すみません！許してください！なんでもしますから！」

「……………貴方は彼を侮辱しなかったわね。手は出さないであげるわ。立ち去りなさい」

そう言うと、一目散に逃げていった。倒れた仲間を助けようとしなないとは……………やはりクズはクズという事か。仲間意識すらないとは。

自動販売機の中のお茶を取り出し、出雲の元へと戻る。

「ん……………うゆ……………」

「ふふっ」

先程の一件で若干不機嫌であったが、出雲の可愛い寝顔を見ると全て吹き飛んだ。カバンを持ち上げ、再度私の膝へ乗せる。

「惜しいけれど……………30分程で起こさなきゃ……………」

出雲の寝顔は、また今日の夜見よう。

私の生きる活力、意味、理由……………それら全ては、彼ただ一つ。

それで十分だし、私は今、とても幸せだ。

「……はっ」

目を覚ますと、まず頬を膨らませた詩乃ちゃんの顔が目に入った。あざとい。あざと可愛い。

「あれからどんくらい経った？」

「1時間と20分よ。20分オーバーね。まったく、声掛けても起きないんだもの……」
「私、ご立腹です！」と言った表情で腕を組むが、まっつたくさういう雰囲気が出ていない。さては声掛けすらしていないな。

「自意識過剰じゃなければ、僕の寝顔見てて時間忘れたでしょ」

「そつ、そんなわけないでしょお→!？」

「声裏返ってるよ……」

手を差し出し、その手に温もりを感じてから引つ張る。既に開いた観覧車の列の方へ歩いて行くと、詩乃ちゃんも段々普通の表情に戻っていく。ご立腹詩乃ちゃんも良かった

たなあ。帰ったらまたやつてもらおうかな。待ち受けにしたい。

「……実はね。今日は、この為に来たの」

「ジェットコースター7回も乗ったくせに!」

「うっ……それは……その……ごめんね?」

「可愛い。許す」

詩乃ちゃんが僕を掌で転がしている……! 転がし方をマスターしたな!? クソ! もつと転がしてくれ!

やがて僕達の番になり、観覧車に乗る。外から見た感じは、他の有名所の遊園地の観覧車より、人が乗る籠のようなものも、全体の大きさも、ひと回り大きいように見える。観覧車とジェットコースターに力入れ過ぎじゃないかこの遊園地? 偏り過ぎだぞ? こんなんでもよく客来るよな……僕らもだけど……

「で、この為に来た、ってなんなの?」

「もうちよつと……」

疑問に思いながらもその言葉を信じ、遠くに見える山々や、高い所から見る煌びやかな街中に目を巡らせ、やがて頂点につく。

「……………下、見て」

「下?」

詩乃ちゃんの言葉のまま、真下を見ると、そこには遊園地全体のライトアップによって映し出された大きなベルが見えた。

それは、詩乃ちゃんが電車の中で描いていたベルに似ており、なんと言っているいい物か分からず、ただただ驚く。

「この遊園地ね。結婚式なんかでも、結構使われるんだって。新郎新婦が2人でこの観覧車に乗って、頂点に至った時に永遠の愛を誓う……そんな結婚式」

「ねえ、出雲。貴方は私に、永遠の愛を誓える？」

下からのイルミネーションの光と、それに負けない……いや、それ以上に輝いている詩乃ちゃんの笑顔を見て、僕も笑顔を浮かべ、答えを言う。

「勿論……勿論だとも。永遠の愛を誓うさ。例えば僕達が死んでも、来世できつとまた君を見つげ出す。その来世も、その来世も……きつきつと、僕は君と一緒にいる。」

観覧車の中で膝立ちをし、詩乃ちゃんの左手の薬指にそつとキスをする。

「……ありがとう。出雲」

「(ち)(ら)(ん)そ。詩乃ちゃん」

12月24日

僕、
終出雲と朝田詩乃は、
死さえ裂けない永遠の愛を誓った。

柊出雲と子作りがしたい

i f

「出雲！今が！なんの時間か！知ってるわよね！」

「しつ、知らないなー。うん。ほら、早く寝よ？今日は寒いから一緒に寝てあげるからさ。寝よ？だからさっさと服着て、どうぞ」

やべえよやべえよ……帰ってきて風呂入ってご飯食べたらこれだよ……！

最近肉が多かったのはこの為か！スタミナか!? 6時間ブツパ出来るようにドーピングしてたのか!?

「観念しなさい！さっきあげたお茶にはバイアグラが入ってたのよ！」

「なんでそんな事する必要があるんですか（正論）」

さつきまで純愛ロマンスだったじゃん！僕の「永遠の愛を誓う」って言葉が嬉しくて帰りの電車で僕の腕を抱きしめながら幸せオーラ出ってたじゃん！今じゃ痴女みたいな雰囲気しかないよ！こっわいよねえ性欲ってさあ！

「痴女とは失礼ね！私の処女を散らせたのは貴方だし、貴方以外のモノは入れてないわよ！デイルドですら入れてないの！」

「そういう事は言わなくていいですー！心読まないでくださいー！」

ギヤースカギヤースカ騒いでいるが、まあ大丈夫だろう。両隣り居ないらしいし。さつき言われて「だから6時間たつぷり私を啼かせて良いのよ」って言われたし。

啼かせたくない訳じゃないよ！

「なんで?!何がダメなの!？」

12月24日の夜21時から25日の朝3時までには「性の6時間」と言われ日本で一番セックスが多い時間なのは知ってるわよね?!これ以上の理由があるかしら?!これでダメなら貴方はいつ抱いてくれるのよ!」

「うぐつ……そ、そうだけど……!」

アッアッアッアッアッアッアッアッ!!!もう!バイアグラ効いてきたああああ!!やべえ超襲いてえ!今すぐ押し倒して啼かせたい!

「そ、そーだ!ゴム!ゴムがないよ!」

苦し紛れの言い訳である。もうなんかどうでもいいような気がしてきた。アレ?なんで僕我慢してるんだっけ?別に良くね?詩乃ちゃん孕ませれば良くね?(錯乱)

「なら生でいいじゃない!貴方の子を孕みたいわ!もう名前だつて考えてあるの!」

「あーもー!わかつたよおお!!」

僕が折れました。アソコは折れようがないくらいカッチカチだけど!いや上手くねえよ!

これ大丈夫!? 詩乃ちゃんの秘部が裂けたりしない!?!
心配になるくらい硬いぞコレ!?

結局、6時間……では収まらず、翌日の朝8時、つまり11時間という常人の倍くらいの時間、詩乃ちゃんと交わっていた。

もう2時くらいの特典で詩乃ちゃんは限界を迎え、「もう無理」「入らない」と嘆いていたが、その言葉すら僕を奮い立たせる材料にしかなかった。

それでもまだ6時までには気を保っていたのだが、6時を過ぎた辺りで気を失ってしまったみたいだ。気が付かなかったが。

その後はマグロ状態になった詩乃ちゃんに、己の性欲をぶつけ続けた。何度頭の中でやめようと唱えても止められず、「これは詩乃ちゃんが望んだ事だ」「僕は悪くない」と自分を正当化して行為を続けてしまった。

「……詩乃ちゃんが起きたら謝らなきゃなあ」

いくらなんでもこれは……いつちやなんだが集団レイプ後にしか見えない……詩乃ちゃんの体中に付けられた「愛」の量を見ると、尚の事そう思う。僕の性欲はこんなに

高かっただろうか……？

「外はもう明るいし……起こさなきゃな」

ベッドも洗濯しなければいけないし……そう思いながら、詩乃ちゃんを揺すりながら名を呼ぶ。恐らく僕以上に体力を使ったであろう詩乃ちゃんは中々起きない。昨日の夜始めたはずなのに外明るいんだが。

「……………んっんん……！」

詩乃ちゃんが呻き声とも取れる声を上げながら、未だプルプル震える腕を使い上半身を起こす。

「……………あれ……………あさ……………？」

「結構寝てたみたいだね……………今何時だろ。昼くらい？」

ボーっとしたままキョロキョロして、お腹を摩つて幸せそうに、にへらつと笑みを零す。

「夢じゃなかったんだ……………出雲の愛が、まだここにいるって感じる……………」

……………マジに孕ませちゃったかなあ……………

もしそうだった場合、嬉しいんだけど……………ふう……………割のいいバイト探さなきゃな。申し訳ないけど、しばらくは親に頼りそう……………

「あ……………今日は、出前でいいかな？」

「あ、待って！折角のクリスマスなんだから、私が作るわ。ケーキもね
おお！やったぜ。」

久しぶりに詩乃ちゃんの作るケーキが食える！

ししほらしくして……

「あ、出雲」

「なんだい？」

「その……最近、生理が来てなくて……妊娠検査、してみたんだけど……当たってた……」

！

「そつか……僕も、お父さんになるんだねえ」
「ふふ……気が早いお父さんね」

朝田詩乃とお正月　i f

「初詣に行きたい」

「……珍しいわね。貴方がそんな事言うなんて」

そう？今までは家族と行ってたから、今回は詩乃ちゃんと二人きりで行きたいよね。

家族で行ってた時も、何故か詩乃ちゃん居たけど……そげなことはどうでもいいんだよ！（迫真）

「でもここらに神社なんてあったかしら。かといつてあまり混むような所には行きたくないわよ」

「クウーン……」

ただの思い付きで言っちゃっただけだし、まだ12月30日の昼だし。まだ時間あるし。調べられるし！諦めるにはまだ早いよネ！

「出雲大社とか混むよなあ……」

ちよつと気になってた出雲大社。僕と名前が同じなんだよ！それだけだけどき！

「………言つとくけど私は無神論者よ」

「僕も神様なんて信じないけどね。なんてったって、僕自身が神だから？（王の風格）」

転生する時に神様名乗る人と会ってるけどね。元気にしてるかなあの人。姿とか全然覚えてないけど。

僕にとっての女神は詩乃ちゃんだし（ドヤア）

「はあ……………」

やめてよそのジト目。僕別にDMじゃないから喜ばないよ。

わかった。わかったよ。僕が悪かった。ね、一緒に近くの混んでない神社探そ。

ポチツとな。BGMほのぼのの神社

「でも初詣なんだし、何処の神社も混んでるかしら……………」

「うーん…………お正月イベントとかやってるような神社なら、有名所程じゃないにしろ混んでるだろうねえ……………」

詩乃ちゃんと色々相談した結果、混雑もそれ程なく初詣が出来る「上野東照宮」に行く事になった。無難だね。まあまあ近いし。

12月31日。何年かは忘れた。

マイクチエツクの時間だオルア！あー、テスト。マイクテストワン・ツー……よし！

「おこたは、至高！」

「……………」

無視かあ。そつかあ。あ、そのみかん1個ちようだい。ん、ありがと。でもあーんは恥ずかしいよあーんは。

「なんというか……特別感がないわね」

「え？」

「炬燵に入つて、2人で丸くなつてみかんを食べてテレビを見る……今日は大晦日よ？もつとこう……何かないの？」

「ないよ？」

「ええ……(困惑)」

そんな事言われたつて、しょうがないじゃないか(えなり)

大晦日はイベントの中でも珍しいイベントなんだよ。いや1年に1回だしそりや珍しいだろとかそういうんじゃないで、ね？大晦日つてのは、年が明けるまでは特に何も無いんだよ。いつも通りだけど、年が明けたその時から、年賀状やら初詣やら新年顔合

わせとか色々あるんだよ。

「明けるまではなにもないの!」

「……やる?」

暇があつたらそう言うのやめなよ。いい加減みんな飽きてると思うよ?というかただのビッチだよ。この性欲魔人ちゃんめ☆

「つてもガ〇使始まるまで本当にやる事ないねー。幸せだからOKですけど」

「大晦日にGG〇つて言うのも、なんだかなあつて感じよね……いつそキリトやアスナも呼んで、みんなで年越す?」

おつ。こりや珍しいな。いつもイベント事は僕と2人つきりで居たがるのに、今回はみんなで過ごそうという提案か。

「それでもいいなあ……キリトくん達は集まりそうだよ。シリカちゃんとかクラインさんとか呼んでさ」

不満顔になつたな。なんだよー提案してきたのそっちだぞー。ちよつと名前出したくらいで膨れるなよー。

か、わ、い、い、い、な、あ、し、の、ち、ゃ、ん。

「でもさ。やつぱり特別な時間は特別な人と、2人で過ごしたいよ」

アフターケアも忘れちゃいけないよ。こういう不満が重なりに重なって、暴走しクリ

スマスの時（3話）みたいになるんだからね。ヤンデレと付き合うなら、しつかり考えて発言しなきゃ監禁されたり事件起こしたりするから、気が抜けないよ。

「……………そ、そうね！」

恐ろしく早いそつぽ……僕じゃなきゃ（顔が赤いのを）見逃しちゃうね。

「あつそうだ（唐突） そういえばこんな物を母上様に送ってもらったのだよ」

「お義母様が？」

こころら☆まだ結婚していないゾ☆

母上様ってなんだよとか、テンションおかしいだろとかは目を瞑ってくれ。というかみんなは知らないだけで、基本僕はこんな感じだ。

「人生ゲーーム！暇潰しには丁度いいね！2人しかないけど！」

「こんな絶滅危惧種みたいな、リアルボードゲーム……よく引つ張り出せたわね、お義母様は」

「おや。覚えてないかい？昔はよく遊んだじゃないか。まだ詩乃ちゃんがよそよそしかった頃だよ。懐かしいなあ。僕が人生ゲームで結婚とかしたら凄腕で来たよね」

思えばあの時からヤンデレの兆候はあったのでは……？僕が鈍感なせいで全然気付かなかった……

あの頃は、まさか詩乃ちゃんがヤンデレだとは汁とも思ってたし、こういう関

係になるなんて事も思ってたなかった。いや、なれたらいいな〜とかなりたいな〜とかはすっげえ思ってたけど。

この後むちやくちや人生ゲームした。

さあ現在時刻は23時59分！今年も終盤であります！何年かは覚えてないけど！テレビの〇キ使はそんな素振りまっつったくありません！いつも通りです！もう少しカウントダウンとかしっかりした方がいいんじゃないでしょうか!?かといつてジャ〇ーズのカウントダウンなんて絶対見ないぞ！こちとら横向きや女神居るんじゃない！
そして皆さん！お気付きですか!?1月1日は僕の誕生日です！また1つ年齢が上がります！詩乃ちゃん気付いてる？みんなは気付いてると思うよ？

「出雲」

「なんだけい詩乃ちゃんや」

おっ誕生日の事切り出すか？

「来年も、同じくらい私を愛しなさいよ？」

「ふふ。今年の何倍も愛してあげるよ。僕の可愛い愛妻さん」

そろそろ純愛したいから、慣れてくると有難いんだけどなー詩乃ちゃん。とうか自分からなんで振るかなあ。男としてダメダメだよ僕。僕の女子力とキザ力がぐんぐん上がっていくよ？将来は主夫かなあ……

……誕生日……

そして年が明け、除夜の鐘が鳴る。なんか聞こえなくても聞こえるような気がするよね、除夜の鐘って。

「あけましておめでどう、詩乃ちゃん」

「……ええ。今年もよろしくね。出雲」

明日は早いので、人生ゲームを切り上げその後特に何もなく就寝。明日早いからね。僕朝苦手だし。

期待した人、何を期待したか、怒らないから先生に言ってみなさい。

「あ、誕生日おめでどう出雲。プレゼントは勿論このわた（ry）」

「ありがとう詩乃ちゃんプレゼントはまた来年に貰おうかな」

「じゃあ……「朝田」の苗字をあげるわ」

「ありがとう詩乃ちゃんプレゼントはまた来年に貰おうかな」

期待してなかったよくそつたれ。

あ、メッセージで知り合いにもあけおめメールしておきました。みんな返信早いなえ。やつぱり一緒にいるんだあ。そつかあ……ハブかあ……

そして誰一人「誕生日おめでとう」の言葉を言ってくれませんでした。大会（初詣）近いからね……しようがないね……

キリトくんには「君の彼女さんも僕の彼女と同じ心配するから、気を付けといてね」と添えておきました。ハツハツハツハツ怯えろ怯えろヤンデレ初心者。別に恨みはないが。別に恨みはないが！（大事な事なので2回言いました）

「寒いわね」

「今年は随分と冷え込んでいるよ」

手袋耳当てマフラーコートと完璧な防寒対策をして初詣に来ました。なぜ神は真冬の朝に1年の朝を持ってきたのだ？ぶち殺したいわあ。寒スギイ！

「あ、おみくじ！おみくじやろうよ！」

「わかったから……」

詩乃ちゃん元気ないねえ。いつもは逆なのに……今は僕が詩乃ちゃんをエスコートしている感じだ。

……ん？それって普通なのでは？普通は男が女をエスコートするものなのでは……？

「んーんー……」

「あ、大吉」

なにぬう!?!だ、だだだだ大吉だと!?! (過剰反応)

「は、博多〇丸・大吉さんの事？」

「いきなり何言ってるのよ。大吉は大吉よ……ほら、見なさい」

詩乃ちゃんの持つおみくじには、しっかりと「大吉」の文字が記されていた。運もいいのか……？

おみくじを読んでいくと、「特に恋愛運が向上。めっちゃモテンで」的な事が書いてあった。僕以外にモテても仕方がないとあつけらかんと言うもんで、少し照れてしまっ

た。ちくしょう、なんかちよつとした敗北感。

「それで？出雲は何が出たのよ」

「エ、ッ」

《大凶》

デデドン！（絶望）

くっ……何故だ！大凶って存在してたのか！噂か都市伝説だと思ってたよ！これは詩乃ちゃんに運気を吸い取られてるとしか……思えないよ！

「そ、そんな目で見られても……私からは何も言えないわ」

……えーつとなになにに？

「何をやっても上手く行かない」？

「想い人が離れていく」？

「友人が半分以下になる」？

「詩乃ちゃんは僕から離れる気があるかい？」

「例え地球の引力が私達を引き裂こうとしようが絶対に離れないわ」

この大凶嘘っぱちじゃないかー！適当な事書きやがって……何でこんなもの信じる必要があるんですか（正論）

「ほら、神様にお願ひしに行くわよ」

「おかのした。やつぱり何か願うんだね？無神論者さんや」

からかうようにそう言えば、溜息を吐いた後に少し真剣な顔になる。

「居ないと思う、って程度よ。居たとしても、それは人が思っているような聖人君子じゃないし。」

……でも、無神論者っていうのは撤回するわ。あの事件の時、私を助けてくれた男の子は……間違いなく私にとつての、《神様》そのものよ？」

クスリと笑い、僕の顔を覗くように見る詩乃ちゃんが目が合い、頬をポリポリと掻きながら目をそらす。今僕の顔は赤いだろうなあ……

「そんないい人かな。その男の子は」

「ええ、いい人よ。」

「……その男の子が好きかい？」

「愛してるわ」

「ずっと一緒に居たいって思えるくらい？」

「来世も一緒に居てくれる、って言ってくれたもの。彼に嘘をつかせるわけにはいかな
い」

「……そっか」

「ええ」

「詩乃ちゃん」

「何？」

「好きだよ」

「私もよ」

初詣の全行程を終え、帰路へ着く。なんかこう言うと言作業みたいに思えるけど、楽しかったし良かったよ？また来年も行きたいね。

「詩乃ちゃんは何を願ったの？」

「……何も。勿体ない事したなあって、今後悔してるところよ」

「そっか。僕はね……僕を救ってくれた身近な女神様に願ったよー。まあ、願うまでもないような、つまらない内容だけど」

「そう」

それから、家に着くまで僕達の間には会話は無かった。

ずっと繋がれていた手に、少し力を込めて握ってみると、握り返される。

小学校編

朝田詩乃と知り合いたい

——ええ~~~~~……

ソードアート・オンライン第6巻を手に持ちながら、俺は四つん這いになつて落胆していた。

その理由は、まあ、もちろんこのソードアート・オンライン第5・6巻のせい(?)である。

「詩乃ちゃん救われないやん……」

キリトくんのお蔭?で、前に進む事には決めたようだが……まあ——救われない!
トラウマも、治るまでも相当苦労するだろうし、キリトくんに惚れた○(?)ようだけど、恐らく、というか絶対報われない。

「……………」

ふう。と、溜息を吐き、無地の白い天井と照明を見上げながら、ふと思った。

……助ける方法ないのかな……むしろ助けてい(小並感)

【その願い叶えてt h n ぜよー】

「ん？誰か今囁ん（ry）」
視界が暗転した。

【…………ちす】

「あ、ん？大丈夫？…………ですか？」

次に目を覚ました時、目の前には口を抑えた白髪の老人が立っていた。その手の隙間からは血がボタボタと垂れている。恐らく、舌を噛んだのだろう。

【だ、大丈夫…………】

「え……………とりあえず血拭いたらどうですか…………？」

どこからとも無くティッシュとハンカチを取り出し、止血に掛かり始めた。やがて血は止まり、ゴホンと空気を直すように咳をして、目を合わせてくる。

【そなたには転生してもらおう】

「……………んー？」

【……………転生じゃ、転生…転生な……………】

「あ、はい。分かりました……………」

舌が痛いのと、大量に出た血で喉が塞がれて苦しいのサンドイッチ状態なのだろう。手短に終わらせてあげよう。うん。

転生とかちよつと良く分からないけど、まあ、信じてても信じなくても転生なら結局送られるんだし。気にしないでおこう。

【……………それじゃ】

フツと老人の姿が消え、代わりに扉が現れる。二次創作かなんかなら、落ちたりするもんだと思ってたが……………現実に来てる時点で違いは出るよなそりゃ。

「それじゃあ……………いい、行つてきますか？」

一応挨拶も欠かささない。まだ名乗られてないけど、転生が本当なら多分神様だと思うし、しといた方がいいよね。

【……………うむ】

まだ完全に血が止まってないのか、まだ少し震えながら手を振っている。恐らくけど普段ガサツな人だと思う。人間の前ではしっかりと威厳持ちたい的な人だと思う。頑

張ってください（偏見）

そして、扉を開ける。すると、大きな光が目を眩ませ、思わず目を瞑る。すぐに目が回復し、目を開け……開け……開け……開け！（ヤケクソ）

「オギヤア！オギヤア！オギヤアア！」

転生……した。目の前には、産婆と思わしき人。自身の泣き声（であろうもの）はとどまる所を知らない。いや、赤ん坊ならそれが正しいんだけどね。

……普通に精神に来るな。この状況。

まずは現状説明だな。

僕の名前は柊^{ひいらぎいすも}出雲。ちなみに前世の名前は覚えていない。ある程度、この世界の知

識はあるけど。

さて、それでね、僕は今7歳で、小学2年生である。前世の知識を生かして人生イージーモードだ。家族にも恵まれ、富にも恵まれ、容姿にも恵まれている。

……容姿は、まあ。客観的に見て、だからちよつと分からないけど。調子乗ったごめん。

あ、でも友には恵まれなかった。the・ぼっちである。何故なんだ（）

今は学校の教室で授業を受けている。でも、さっき言った通り人生イージーモード。前世の知識がある僕には小2の問題なんて楽勝である。少なくとも今すぐそこらへんの大学には受かる自信がある。前世では大学合格してだらだらしてたのが最後だったし。

……長々と話したが、まあ、現状はそんな感じだ。僕は友達のいないぼっち天才少年（笑）。

だがしかし！僕は今日やつと発見したのだ。

（……詩乃ちゃん居るやん）

なんで気付かなかったん？ 神の力的な物？ いや、あの事件まで後3年しかないよ？ どうすんの？ 今から体鍛えて間に合うかな？ 詩乃ちゃんに会う事しか考えてない（つもりだった）のに。見逃してたなんて。クラスメートだったなんて。

気付いてしまったので、接触を図る。そして仲良くなり、あわよくばあんなことやこんなこと（ry）は冗談だけど、仲良くなりたいたいの事実だ。

だが、どうやら彼女は今の僕と同じ感じらしい。友達という友達が出来ていない。というより、「周りに馴染めずにいる内気な女の子」だ。分かる。子供は残酷だからね。嫌な時は嫌だつて目するもんね。高校生や大学生より怖い。

こんな事言っても詩乃ちゃんとのイチャラブ展開（○）も嬉し恥ずかし生活記（○）も送れやしない。みんな待つてるんだからな。今日の帰りにでも、話しかけてみようかな。

放課後である。

……詩乃ちゃんが消えたでござる。あれれえ〜？おつかしいぞー？まだ帰りの挨拶したばっかなのになー。早いな〜……明日でも……いいやダメだ。今だ。今行くんだ。

詩乃ちゃんが僕を待つてる！（待ってません）

昇降口まで降りて、靴箱の所を見るも、誰もいない。おのれ神め。恨んでやる。

「あ、柗くん。ちょうど良かった。朝田詩乃さんの家に、このプリントを届けて欲しいんだけど……」

ありがとうございます。一生感謝します。

先生の有難いお言葉を頂戴し、帰りの会で配布されたプリントを見る。受け取らないで帰っちゃったのか。まあ、あんな早かつたしな。「住所は……これ」と言われ、詩乃ちゃんの住所が書かれた紙を差し出し、僕が受け取ると「じゃー！」と言って足早に去ってしまった。

……いや、小2が住所渡されて「ああここね」なんてなる？中学生でも分からない人居るんじゃない？やっぱり神の力か。感謝します（2度目）

……向かうか。これで、少しは仲良くなれるといいけど。

朝田詩乃と仲良くなりたい

「すみません。終ですけど」

つと。終と言っても分かんか。しつかりと「朝田詩乃さんのクラスメートです」と伝えると、ひよこつと若そうな女性が顔を覗かせた。

原作知らなかったらお姉さんと見間違える所でしたね。はい、詩乃ちゃんのお母さんです。

「クラスメートの……何か用かな？」

子供に言うように、笑顔で言った。あ、そうか。僕子供やわ。

「帰りの会で配られたプリントなんですけど、朝田さん、貰い忘れたみたいで。届けに来ました」

あれ？すらすらと言えたな。学校じゃあいうえおのあも言えないのに。

「あらそう……あの子だったら……ほら、上がってくださいいな」

……おっと、マジか。上がれたらいいなうとか、ちよつと考えてたけど、マジか。3次元じゃ有り得ない（事もないけど）事だと思っただけ……詩乃ちゃんと知り合える機会には成り得るか。良かった良かった。

家上がり、大きなテーブルの前の椅子に座る。帰りに寄ったので、ランドセルはただ持っている。そのランドセルを床に置き、貰ったオレンジジュースを飲む。氷まで入ってて、とても冷たくて美味しい。

「今、詩乃を呼んでくるわね」

「あ〜……学校じゃあまり関わりないんですけど、大丈夫ですかね？」

「そうなの？……まあ、大丈夫だと思うわよ？」

……そんなの気にする年齢じゃない、かな？詩乃ちゃん結構大人だからなあ。知り合いたいののは事実だし、仲良くもなりたい。でも不用意に近付いて怖がられるのは嫌だな
……

「呼んでくるわね」

しかし。目の前に甘い果実（詩乃ちゃん）を出されて我慢など出来なかった。

……お母さん、大丈夫なのかな。

原作では、詩乃ちゃんが2歳の頃、つまり、5年前に詩乃ちゃんのお父さん……お母さんの旦那さんが死んだ事で、精神が病んだんだが……そのような様子は見れなかった。もしかしたら、僕がいる事で原作とは違う点があるのかもしれない。

「……………」

いつの間にか詩乃ちゃんが来てい……………え？来て？

リビングに入る扉から右半身だけ出して、じつとこちらを見ている。その目には、まだ氷のような鋭さはなく、幼く優しい瞳をしていた。可愛い（確信）

こちらが存在に気付いた事に気付いたのか、はつとして、たたつとこちらに小走りでかけてきた。すると、ペコツと少しお辞儀した。

「……あの、プリント、ありがとうございます」

顔を上げて、申し訳無さそうにそう言う。やはり、なんというか、まだ強くない。人というものにまだ慣れていない、と言った方がわかりやすいだろうか。

わかりやすく言えば、コミュ障って奴だな。厳密には違うけどさ。

「……ああ……話すのは、初めてだよね」

「っ」

ビクツと震え、目を瞑る。そんなに僕の顔は怖いだろうか。爽やか系イケメンに生まれなかった。

友達が出来ないくらいなんだから、僕にはそれ相応の「近寄りたくない理由」^{ワケ}つてのがあるんだろう。これが全くわからない。

「……敬語、使わなくていいよ。タメ口で」

「……うん」

「はい、これプリント」

プリントを詩乃ちゃんが受け取り、プリントを流し読みしている。いや、していない？目はプリントに行っているが、心ここに在らずと言った感じだ。

……よし、僕は、思い切ってみようと思う。

「ねえ、朝田さん」

「っ！なっ、なひ!？」

あ、囁んだ。顔真っ赤にして可愛いねえ……何でだろう。学校では、思ったように喋れないのに。詩乃ちゃんの前だと、言葉がすらすら出てくるな。

「僕ってさ、怖い？」

僕のその一言に、詩乃ちゃんの顔の赤みが、すつと溶けるようになった。

「……………えっ?」

ポカンとしている。まあ、僕学校じゃあんまり……まったく喋らないし、そういう人だと思ってるだろう。少なくとも、こんな事を聞いてくるような人ではないと思ってる筈だ。辛いなあ。

「……………」

「答えづらいなら、答えなくていいけど……」

「あっ……………えつと……………」

おろおろ、と狼狽えている。恐らく、答えていいのかどうか迷っているのだろう。ま

ず、こういう子は「答えなくてもいい」と言われ、答えないなんて選択肢は出ない。そこで、答えていいのか良くないのかを考える。

「……あの、ね」

まあ、どんな人でも、大体は結局答えるんだけどね。

「怖いって、感じじゃなくて……近寄り難いっていうか……」

「……そんな雰囲気、出てる？」

コクコクと頷く。ふむ。怖い訳では無いと……まあ、それなら、いいかな。……いや、良くないけど。雰囲気なら何とかかなりそう？時間はかかるけど。

「朝田さん」

「な、何？」

打ち解けてきた、かな。

そこで、1つ提案をする。受け入れてくれるかどうかは、大袈裟なんかではなく、僕の人生を左右する。

僕がこの世界で生きる意味にきた理由は、簡単で、とても難しい。

……僕はただ、目の前にいる、この儂く脆い少女に、寄り添いたいだけなんだから。

「僕と……友達になって、くれないかな」

その日の事を、僕は死ぬまで、1度たりとも忘れたことは無かった。

いつもの日常、いつもの時間。

毎日毎日変わる事なんて無くて、面白い事も無い。

私の名前は、朝田詩乃。5年前にお父さんを事故で亡くし、今はお母さんと私の2人で暮らしている。

事故の時、まだ物心がつく前の私にお父さんの記憶はなく、お母さんから聞いた事しか知らない。お父さんが死んだ時、お母さんは心が壊れかけたらしい。でも、そんな時、今より幼かった私の事を想い、なんとか病む事はなかったらしい。

今でも、お父さんの写真がリビングに飾ってある。病む事はなくても、やはり心にくる物があるのだろう。今でもたまに、お父さんの写真を見て涙を流すお母さんを見る。

「詩乃」

「……………お母さん？」

……………今は自室にいるのだから、私を呼ぶ人はお母さんしかいないのだから、当たり前だが。

お母さんに呼ばれるまま一階へと降りると、「カッコイイクラスメートの男の子が、来てるわよ」とニヤニヤ顔のお母さんに言われた。

……………自慢ではないが、私に友達と呼べる人はいない。帰りの会が終わるとすぐに家に帰るか、図書館によるかしかない。休み時間は本しか読んでないし、ろくに話している人もいない。クラスメートなんて、名前を知らない人が殆どだ。

「……………プリント届けに」

「!?そ、そういうのは早く言ってよ!」

「ふふ」

いつもの、子供っぽくて、意地悪なお母さんだ。

プリント届けに、なら、まあ、分らないでもない。友達がいなのは先生も分かっているだろうし、適当な人に任せたのだろう。そう思って、静かに扉を開けて相手を確かめる。

「……………」

パタン。と、閉める。リビングでオレンジジュースを飲んでいた男の子を見て、出るに連れられなくなった。

「…………お、お母さん」

「なあに？」

「プ、プリント貰ってきて…………」

「…………」

彼とは顔を合わせたくない。いや、好きな人とか、嫌いな人とか、そういうんじゃない。ただ、彼はダメだ。

彼は、人気がある。当たり前だろう。顔もよく、頭もいい。子供ながら、どこか年上のような余裕を見せる節がある。表立ってそれを言う人は居ないし、本人も気付いていないのか分らないが。一部ではファンクラブすらあるらしい。しかし、彼からは…………なんとというか…………「近寄るな」「関わるな」って空気が出ているのだ。それで、今まで告白した人はおろか、友達になれた人すらいらない。

「クラスメートでしょ？」

「そうだけど…………」

私は、彼の事をよく知らない。ファンクラブがあるって事も、近寄り難いって事も、噂してるのを聞いただけなのだから。ほらほらと言いながら、お母さんにリビングへ行く

のを催促される。あまり気乗りしない。「関わるな」と言われたら関わりたくないし、別に関わる理由もない。ぶつちやけて言うのと、関わりたくない。彼はここらへんでは有名人なのだ。私が彼に関わって、有名になりたくない、と思うのは、自意識過剰なのだろうか。

「……」

もう一度リビングの扉を開き、半分だけ顔を出して観察する。顔は、噂通り悪くない。だが、問題は性格や口調である。学校で彼が話しているのを見た事がない。私のように、いつも同じ時間を繰り返しているような感じだ。もしかしたら私と同じなのでは？ と思ったこともあるが、その時はそれはないかと首を振った。

すると、彼がこちらに気付いた。私ははっとして、慌てて彼の元に向かう。

「……あの、プリント、ありがとうございます」

思わず、本で学んだ「敬語」の口調になってしまふ。敬っている訳では無いが、なっってしまうのは仕方ない。もしかしたら、プライドの高い人なのかもしれないし、不良のような性格の悪い人かもしれない、と思うと、自然とそうなってしまうた。

「……ああ……話すのは、初めてだよね」

思いの外優しく、それでいてふんわりとした、女性のような少し高い声で、彼はそう言った。クラスメートで彼の声を知っているのは、私だけなのではないかと、思ってしまう。

しかし、それで私の気分は高揚なんてせず、逆に苦しくなってしまった。普段の彼……いや、他のみんなが思う彼なら、無言で立ち去っていただろうから。優しい声をしていても、本人が優しいとは限らない。何か言われるのでは？と、不安になってしまう。「……敬語、使わなくていいよ。タメ口で」

いつも真顔で、普段、感情をあまり表に出さない彼が、笑顔を浮かべそう言った。緊張と安堵と驚きで、頭がこんがらがってしまう。その笑顔は、正しく優しい人の笑顔で、その声は、私を氣遣つての言葉だと、理解出来た。

彼は、みんなが思うような人ではなく、又、雰囲気通りの人ではないと、理解出来た。……噂は当てにできない。

「……うん」

少しづつ回復してきた頭をフル回転させ、返事を絞り出す。緊張も不安も、もう無かった。でも、理解出来ない心臓の高鳴りと羞恥に、どうしていいか分からなくなる。

「はい、これプリント」

彼の手からプリントが渡され、私はそれを受け取る。そのプリントを読む振りをし、どうしていいか考える。

さつきから心臓が苦しくて、顔が赤くて、まともに考える事が出来なくて、訳が分からない。今すぐ自室に向かい、ベッドの上で足をバタバタさせながら暴れたいと思う。

しかし、彼に「帰って」なんて言えない。言いたくもない。

……あれ？なんで、言いたくないんだろう？

「ねえ、朝田さん」

「っ！な、なひ?!」

噛んでしまった。彼もそれを聞いて、引きつったような笑顔を浮かべている。やつてしまったと思っても、もう遅い。顔は真っ赤になり、何も言えなくなる。まともに思考する事も出来なくなる。

「僕ってさ、怖い？」

その彼の一言を聞いて、私の頭は急速に冷えて行った。

「……………えっ?」

目を丸くしてしまう。まさか、そんな事を聞かれるとは思わなかったし、そんな事に気にする人だとも思ってた。なかった。

……いや、そうか。彼は、優しいんだ。自分の、どうしようもない、その「近寄り難い雰囲気」に、心の奥底で悩んでいたのか。言いたくても、言えない。多分、勇気を出して言ったのだろう。自分ひとりではどうしようもなくって、どう思われているのかもわからなくって、ただただ不安で。

「……………」

「答えづらいなら、答えなくていいけど……」

「あつ……えつと……」

この場合、率直に言った方がいいのだろうか。博識な彼の事だから、自身が他者にどう思われてるのかなんて、知っていると思うのだが。

試している、という訳では無いだろう。ただ、自分で見るのとは違う、客観的に見た自分を教えて欲しいのだろう。

「……あの、ね。怖い、って感じじゃなくて……近寄り難いというか……」

分かっているても、言いづらい。頭で考える事と口でいう事には、天と地程の差がある。だが、答えないわけには行かない。私なんか彼彼の力になんて烏滸がましいにも程があるが、力になれるのならなりたい。彼がみんなと打ち解ける時、その横に私なんか居ちやいけない。みんなが彼を理解した時、私が彼とこうやって話す事など出来ないのだから。

「……そんな雰囲気、出てる?」

口には出さず、頷いて見せる。やはり、言いづらいのだ。それを聞いた彼は、考えるように顎に手を置いて目を瞑る。何を考えているのかは、もちろん分からない。理不尽に当たってくるような人ではないし、不安になる事は無いが……

「朝田さん」

「な、何？」

だんだんと、彼と話す事に慣れてきた。まだ完全に慣れていないし、心臓の高鳴りはまたやって来たが。彼が私の名を呼ぶ度、言いようのない嬉しさが、込み上げてくる。それが何なのか分からず混乱するしかないが。

そして、彼の決意した目が私の目と合い、驚きの言葉を発する。

「僕と……友達になって、くれないかな」

その日の事を、私は死ぬまで、1度たりとも忘れる事は無かった。

朝田詩乃と友達になりたい

「えっ?」

「友達になってください」という、質問ともお願いともつかない何かを発した僕に、後悔はない。頼む、受けて。お願いします。300円あげるから……

「いい……の?」

「え? いや、僕から頼んでるし……是非?」

顔真っ赤にして口押さえてる。どうしたのかな? 大丈夫? あ、もしかして、僕の事気持ち悪いとか思ってる? ……ち、違うよね。いいの? って聞いてきたもんね。なんか吐きそうな人みたいなんだけど……

「で、でも。私、なんて……可愛くないし、全然普通に話せないし、柊君の友達なんて……無理だよ……」

名前呼んでくれた……呼んでくれた! 凄い! 嬉しい! ……あ、いや、これはマジで気持ち悪いな……

「大丈夫だよ。朝田さんは可愛いし、僕だって学校だったらまともに話せないしね?」

「……っ、で、も!」

友達になりたくないのかな……

自分の意思ではないが、少し悲しい表情になってしまう。朝田さんは、潤んだ瞳で僕の顔を見て、とうとうツーッと、を涙が流れた。

「あ、朝田さん？ いや、なりたくないなら、別に……」

「違う……違うの……わかんない……」

ガチ泣きし始めてしまった。涙をぼろぼろ零し、嗚咽を漏らす。途切れ途切れながらも、ハッキリと、しつかりと、その言葉は僕の鼓膜に届いた。

「私で、良けれ、ば……お願い、します……！」

……ああ、よかった。

この世界で、僕は幸せに暮らせそうだ。

「——ありがとう」

僕がそう言つて、彼女の頭を撫でる。まだ子供なので男女にそれ程身長の違いはなく、少し手を伸ばさなければいけないが。

2度、3度、と撫でていると、詩乃ちゃんが僕の体をギュツと抱き締めてきた。

「だ、大丈夫？」

「……」

何も言わず、ギューっと、強く抱き締めてくる。撫でるのを止めると、小さい声で

「もういつかい」と言ってくる。それを何度かやり取りしているうちに、お母さん乱入。しかし詩乃ちゃんは離れない。幸せ過ぎて明日死ぬんじゃない僕。

「あらあら……まあまあ♪」

そんな貴婦人みたいな笑い方……そんなのしなくていいので、助けてください。詩乃ちゃんの力強い。待って本当に強い。

その数分後、やつとこさ詩乃ちゃんは離れてくれた。顔は（2つの理由で）真っ赤で、鼻をすすっている。

僕の服がべつちよりしたけど、まあ、いいや。案外家近かつたし。本当なんで1年間気付かなかつたんだろう。

「あ……それじゃあ、僕はこれで」

「そう？もつと居ればいいのに。詩乃もそう思ってるわよね？」

何も答えない。お母さんが、「全く、この子は恥ずかしがり屋なんだから♪」と言って、気を付けて帰ってねと言ってくれた。

「ここから僕の家、結構近いですよ」

「そうなの？」

「はい、出て右に行つて、最初の曲がり角曲がつて、そのまま、真っ直ぐ言つた所にある、青い屋根の家が僕の家です」

「近いわねー。遊びに行けるじゃない?」

今、詩乃ちゃんはお母さんの背中に隠れてしまっている。今更、羞恥心が沸いてきたのだろう。お母さんの足に抱きついて顔を隠す詩乃ちゃんグツジョブですありがたいがとうございます。

「それじゃあ、失礼します」

詩乃ちゃんの横を通って、最後に詩乃ちゃんに「また明日ね」と囁いてから帰る。僕って結構Sっ気があるのかもしれない。今、更なる羞恥に悶える詩乃ちゃんを想像すると、ゾクゾクする。

「ああ、早く、明日にならないかな」

今、自分でもわかる。この世界に来て、最高の笑顔を浮かべているという事を。

何がなんだか分からない。その気持ちで、私の心の中は埋め尽くされていた。

今日、人生の転機とも言える出来事が起きた。

人気者で、私なんか、話していいのかも分からないぐらいの、高嶺の花と言ってもいい人。柀 出雲君。

今、彼の笑顔と優しい声を知っているのは、彼の家族と私とお母さんぐらいじゃないだろうか？それ程までに、彼は喋らないし、表情を変えない。

そういう人なんだと思っていた。関わろうとも、関われるとも思っていなかった。

私だって、人間だし、女の子だ。かつこいい男の子は好きだ。人並みに恋もする……今の所、した事はないけれど。

私はまだ小学生だし、誰かを好きになる年齢でもないのかもしれない。クラスで周りを見て、みんなが自分より年下に見えて仕方ないのは、私が大人びているのか、みんなを見下しているのか。

はつきり言って、どうでもいい。私とお母さん以外よく見ていなかったし、何かをする時も、何処か達観している部分もある。

……少し、自惚れていたのかもしれない。いや、自惚れていた。今までなら、自惚れている事にも気付かなかった。彼と触れ合った事で、色々な事に気づけた。

「……………くるしい」

さつきから、心臓の動機が収まらない。体も熱く、何度深呼吸しても冷めない。

「風邪……………なの、かな」

……………違う。分かっている。自分の気持ちくらい、わかる。自分でもちよろいと思う。軽い女だと言われても、反論する言葉もない。いくら勉強が出来て、色んな事を知ってても、精神は年相応か。

「柊君」

名前を呼んでみると、小さな幸福感を感じる。ああ、心の底から理解出来る。もしかしたら今だけなのかもしれない。だけど、1年後、10年後、私は彼と一緒に居たい。

「……………柊君……………柊、君……………ふふ」

人が見てたらなんて思われるのか不安だけど、私1人しかない自室ならば、好きなだけ言える。

「今は……………大好きだよ……………柊君」

明日は明日の、1年後は1年後の、10年後は10年後の私に任せよう。

朝田詩乃と寝てみたい

「朝田さん！」

「ひゃあい!？」

いつものように詩乃ちゃんの部屋に突撃する。これで何十回、もしかしたら何百回かもしれないけれど、そのぐらいしているのに、度々こうやって驚く事がある。慣れてるのか慣れてないのか、まったくわからん。

「あ、ひ、終君！ちよつと、出でて貰っていい、かな？」

「へっ？」

「いいから！出でて！」

結構真面目に怒鳴られたので、仕方なく部屋から出る。詩乃ちゃんのお母さんが2階に上がってくるが、大丈夫ですよと言うと、あらそうと言って降りていった。僕の仕事用し過ぎじゃないですかねえ。

「……も、もっもいいよ」

「姫からお許しが出た。」

僕が部屋に入ると、女の子座りでベッドに座っていた。顔は真っ赤。詩乃ちゃん、顔

真つ赤にする事多い気がするよ。

「…………おはよう」

「うん。おはよう」

「僕とお話して友達になってよ！」って言うてから（大嘘）半年程経っているが、最近、やつとこさ普通に喋ってくれるようになってきた。最初の頃はどもっていたり、まづ話す前に逃げられたりされていた。でも学校では話しかけてきてくれない。まあ僕も、話しかけないんだけどね？頑張ろ。

「朝田さん朝田さん」

「何？」

「公園行こう！」

「……………」

何故か詩乃ちゃんは、頑なに僕と外で遊ばない。何度遊ぼうと誘っても、「お前本当に小学生かよオ!」ってくらい誤魔化してなんだかんだ、屋内で遊んでいる。そのせいで、お互いボードゲーム類が凄く上手くなった。

「どうしても、公園で遊びたい？」

「遊びたい。なんでダメなの？」

「それは…………柊君が…………」

え？僕？原因僕なの？………思い付かない。あ、もしかして、学校の人に「あんなのと仲良くしてる……wwww」とか思われたくないのかな？普通に凄く悲しい。

「分かったよ……仕方ないなあ……」

そう言つて、にへらつと笑う。やつと外で遊べる！何して遊ぼうか。鬼ごっこ？隠れんぼ？うーん！

……ん？詩乃ちゃんが凄く見てくる。

「嬉しそうだね」

「朝田さんとやつと外で遊べるからねー」

ニッコニコ顔の詩乃ちゃんを見て、自然と僕も笑顔になる。後で聞いたが、この時僕の顔が凄く緩んでいて、喜んでくれてるんだと思つて、とても嬉しかったらしい。なにそれ可愛い。

その後、近くの土手近くの結構広い公園に來た。遊具も豊富で、真ん中には噴水もある。今は土曜の朝9時ちよつと。中高生らしき人達が遊んでいるのが見えるが、同じくらいの年齢の子達はいないようだ。

「……ねえ、柊君」

「うん？何？」

家からこの公園まで歩いて20分程なんだが、その間、ずっと僕の服の袖を握つてい

た詩乃ちゃんが、ここに来て一言目を発する。公園までずっとキョロキョロしていて、何も喋らなかつたのだが……

「……日向ぼつ、しよよ。」

僕の友達が可愛過ぎて小2にして犯罪犯しそう。……嘘ですごめんさい。まだ小さい詩乃ちゃんに欲情出来ません。ロリコンでもこれ見たら引くよ。

「うん。いいよ」

もちろん受け入れますとも。

詩乃ちゃんと共に土手に寝っ転がり、日向ぼっこする。日向ぼっこっていいよね。体力ない人でも出来るし、こうやって、好きな人としていると、とてつもない幸福感に包まれる。

あ、詩乃ちゃん好きです。しつかり言つてなかつたね……誰に言つてるんだろっか？

「んっ……」

大の字になって寝っ転がってた僕、その左腕に、詩乃ちゃんが頭を乗せてきた。詩乃ちゃんの顔近い。多分、僕の顔今真つ赤だと思う。詩乃ちゃん……え、寝てるやん。早っ！

……今日、朝早かつたのかな。それとも、昨日夜更かししちゃったとか？起こさない

でおう。

「……寝よ」

開き直って寝る事にした。このまま起きてると、何処がとは言わないけど、覚醒してしまうから。まだ通つてもいないんだよ。子供の体だからなのか、性欲つてもんはあんまり無いけど。

「おやすみ。詩乃ちゃん」

まだ朝だけだね。

「……」

暖かい感触を感じながら、むくりと起き上がる。寝てしまっていたのか。

ちらりと右を見ると、穏やかな顔でスヤスヤと眠っている彼がいた。寝ぼけ眼の目を擦り、もう1度横になる。起きた時に感じた暖かい感触は、彼の腕だったのか。

「えへへ……」

だらしの無い声が出てしまうが、いいだろう。大好きな彼の顔が近くにあつて、こんなにも暖かさを感じるのだから。

自覚がある。私の恋心は、普通とは少し曲がっている。「恋」という物は、あらゆる本のストーリーに干渉してくる物だ。恋をしないストーリー本の方が少ないだろう。それ故、少なくとも「普通の恋」というものは知っているつもりだ。

まず、私は彼の所有物を幾つか持っている。貰った物ではなく……盗んだ物だ。

どうしようもなく、彼を感じられる物が欲しくなる。私が読んだ事のある作品にも、そんな人がいたが、まだ、彼を監禁したいだとか、私以外の人を見て欲しくないだとかは考えていない。

いつかそう思ったら、私は行動に移すのか……わからない。

「……………ふふ」

彼の全てが好きだ。彼の、私が嫉妬してしまうくらい滑らかで、綺麗な黒髪に手を通す。

……………

「ん……………んう……………」

彼の唇に、私の唇を合わせる。唇を合わせるだけの、ソフトなキス。それを、10秒

程する。

幸せだ。幸せ……幸せ……幸せ。幸せ。幸せ幸せ幸せ幸せ幸せ幸せ幸せ幸せ幸せ!!

体全体が熱くなる。幸せ過ぎる。唇を離れた後も、彼の左腕を体全体を使って抱き締める。このまま死んでもいいとも思える。

もう1度寝よう。遊んでいる、とは言えないかもしれないけれど、有意義に過ごせたのだ。私的に、満足な1日だ。

その2時間後、昼の3時になっても帰ってこない詩乃達を探しに来た詩乃母が、土手でラブラブ昼寝(○)をしている詩乃達を見つけ、携帯で写真を何枚か撮って、2人を起こす。

その後、終が詩乃宅でおやつを貰い、今度は室内で遊ぶ事にした。

何だかんだ、終も詩乃も、インドア派なのだ。ずっと室内で、少し外に出たくなかっただけで。

明日も元気に室内で遊ぼう。と、2人は思った。

朝田詩乃が最近おかしい

なんかいきなり時間が飛んだ気がする。

……気のせいかな。変な電波を受信してしまった。

「どうしたの？ 出雲」

「ん？ ー……なんでもない」

僕と詩乃ちゃんは、先月、小学4年生にあがった。

詩乃ちゃんの事件まで後1年くらいか……2学期入った辺りだったと思うから、1年半はあるけど。

特に体鍛えたりはしてない。運動は人並みにしてたり、朝走ったりはしてるが。

後、お互い名前で呼び合うようになった。「名前で呼び合おう！」って言ったわけじゃないし、これといって転機は無かったが、自然とそうなっていた。

「春に入ったばかりだから、暖かくて眠たくなるのは分かるけど、寝ちゃダメだから」
「わかってるよ」

この2年で、詩乃ちゃんはずいぶん成長したと思う。身体的にも、精神的にも。

まず、段々と原作詩乃ちゃんに近付いてきた。おどおどしたコミュ障詩乃ちゃんも可

愛かったが、原作のツンツン詩乃ちゃんも可愛い。

それと、なんだか最近、詩乃ちゃんの様子がおかしい。

何処に行っても付いてくる。朝は6時くらいに僕の家に来るし、休み時間もずっと居る。泊まったりもたびたびあったが、風呂やトイレにまで付いてこようとしたのは驚いた。

依存、なのかは分からないが……僕が詩乃ちゃんの中で、どういう存在になつてのかわ知りたい所だ。

ゲームの片手間に解けるような問題ばかりの授業は暇なので、今日は、僕と詩乃ちゃんの日常を振り返ってみようと思う。

まず、朝。

6時00分、僕、起床。

本当なら、7時くらいに起きるのだが、詩乃ちゃんが家に来るようになってから、6時に起こされるようになった。

「おはよう出雲。まだ寝てるの?」

呆れた顔で、僕の上に跨る詩乃ちゃん。やめなさい。はしたないです。ありがとうございます。眼福眼福。

「……降りてえ」

叩き起こされたばかりの僕が、弱々しい声で降りてほしいと伝える。すると、顔を近づけ、耳の近くで囁くように言う。

「じゃあ起きるっ？」

僕は返事をしない。起きたくないからだ。このままで居たいというのもあるが、毎朝毎朝やってたら睡魔の方が前に出てくる。最初の頃はされただけで跳ね起きた物だ。

「今何時だよ……」

仕方なく上半身だけ起き上がらせる。僕の膝に跨って首に手を回す詩乃ちゃん。小4だからいいが、高校生になってもこれされてたら毎朝ハッスルだぞ？

「6時よ」

「まだいいじゃんか……朝ご飯7時でしょ……」

「いいから起きなさい！」

成長し過ぎだよ……あの優しくった初心な詩乃ちゃんはどこ……ここ……？

なんだ夢か。

その後、詩乃ちゃんが誘惑に似たナニカをしてくるので、逃げるように起き上がり、詩

乃ちゃんに構ってあげる。

そうして朝ご飯を食べ、学校へ行く。

「……通学嫌い」

「私は結構好きよ」

僕の家から学校まで、歩くと結構かかる。学校へ行ってしまうば楽なのだが、如何せん歩くのが面倒だ。体力が無いとか疲れるとか、そんなのじゃない。歩くのが嫌なんだ。

分からない？

「詩乃ちゃんって歩くの好きだっけ？」

「歩く事は、嫌いでも好きでもないわね。こうやって、出雲と2人で歩くのが好きなのよ」

うん。ありがとう。とっても嬉しい。嬉しいんだけどさ。そのハイライトのない目やめてよ。怖いんだけど。羞恥心より恐怖心の方が強いんだけど？

他愛ない（？）会話をしていたら、あつという間に学校へ着く。この時間も悪くないなど、毎日考えてしまう。案外僕は意志が柔い人なのかも知れない……

学校に着いた。

朝の会やって、授業やって、休み挟んでまた授業！

そして、普通より長い2時間目休み。

「出雲」

今日も今日とて、飽きずに詩乃ちゃんが僕の席へ来る。1年くらい前までは、学校ではお互い不干渉だったのだが、数ヶ月前程から学校でも話しかけてくるようになった。

僕に詩乃ちゃん以外の友達は居ないし、詩乃ちゃんにも僕以外の友達は居ない……と、思う。

でも、たまに詩乃ちゃんはクラスの子と話している。どんな話をしているかは知らないが。

「詩乃ちゃんはさ」

「なに？」

「僕以外の友達って、居ないの？」

「……貴方の言える事じゃないと思うけど？居ないわよ。そんなもの」

そんなものって……酷い言い方するねえ。こういう所が原作詩乃ちゃんに似てきている。原作詩乃ちゃんより圧倒的に成長速度が早い。なんだか、僕が詩乃ちゃんと関わり始めてから、急成長して行つた気がする……僕、何かしたっけ……

「そういえば、出雲。貴方も眼鏡かけ始めたのね。目悪かったの？」

出会った日（友達になった日）からの事を思い出して行っている途中、詩乃ちゃんからそう言われる。

そう。そうなのだ。僕は今、眼鏡を掛けている。

「言ってなかったつけ。ここ最近で、すつごい目悪くなつてね。眼鏡なしだと、今の席じゃ黒板の小さい文字が見えないんだよ」

「黒板見てないくせによく言うわね」
ばれてーら。

理由としては間違つてない。本当に、ここ数年、数ヶ月で目が悪くなったのだ。それを親に伝えると、すぐ眼鏡を買ってくれた。

夜更しをしているわけでも、暗い所で本を読んでいる訳でもないのだが……一体何故なのだろうか……

「ねむい……」

「まだ2時間目よ？」

「毎朝6時に叩き起こされるから……」

「6時にしつかり起きなさいよ……」

僕は夜行性なんだ。朝は弱くてね。逆に夜は強い（純粋）からいいのさ。

そんな事を言うのと、呆れた顔でため息を吐かれた。解せぬ。

……ん？どこを見てるんだ？

「詩乃ちゃん？」

「……………ん？何？」

「いや、何処見てるのさ」

詩乃ちゃんの見てた方……教室の後ろ窓側を見ようとすると、詩乃ちゃんに頭を掴まれて、グイツと前を向かされる。

今朝も見たハイライトのない目。怖いけど、最近慣れつつあるのか、それとも僕が無意識に恐怖心を感じないようにしてるのか、日常的一幕として捉えられるようになってきた。末期だね。

「見ちゃダメ。私と話してるんだから、私だけを見てて」

いや、アンタさつき僕と話してるのに、あっち向いてたでしょうが。と言いたいが、言ったら言ったでなんかやばそうなので、口を噤んでおく。

放課後。帰りの会が終わると同時に、詩乃ちゃんに手首を掴まれ、引つ張られるように教室を後にし、校門前でやっと手を離される。と思つたら今度は手を繋いできた。

「さ、帰りましょ」

眩しい笑顔を浮かべながら、僕に向かってそう言う。この笑顔はずるい。どんな事でも、詩乃ちゃんに笑顔を向けられたら、許せてしまうような気がする。

1度僕の家に戻り、荷物を置いてすぐに詩乃ちゃんの家へ。いつものようにボードゲームやテレビゲームで遊び、暗くなったら帰る。たまに夕飯も頂く。

これが、僕の日常。

…最近、詩乃ちゃんの様子がおかしい。

無感情でいて、強い意志を持った目をしている。

何も見ていないようで、何かを見ている。

はつきり言って、怖い。

でも、それ以上に僕は、不遇な朝田詩乃に寄り添いたい。

柀出雲は今日も恰好いい

朝5時30分。起床。

私は毎朝この時間に起きる。前日は大体20時か21時に寝ているので、9〜8時間以上は寝ている計算になる。問題ない。

まだ早朝で、外はあまり明るくない。この時間帯は、雨だろうが晴れだろうが、曇りのような空をしている。これも、彼が居なければ知らなかった事だ。

まずは、櫛くしで髪をとかしながら、整えていく。彼の前に出るのに、寝癖なんてあつてはならない。それを20分程し、髪留めを付ける。

この髪留めは、私と彼が友達になつたばかりの時、彼が買つてくれたものだ。お小遣いを貯め、お店で買つてきてくれたらしい。

クロス型の、小さな髪留め。本人は安かつたし、壊れたら捨ててもいいよといつていたが、あれから2年経つた今でも、壊れず私の髪を留めている。これを付けていると、彼を近くに感じられる。

服を入念に選び、6時になつたら、彼の家へと向かう。1年前の今頃は、私も寝ていたのだが、彼は遅刻やギリギリに来る事が多く、私が居なきやダメな事に気が付いた。

もつと早く気付くべきだった。

6時00分。彼の両親もまだ寝ている頃。私は彼の家の鍵を開け、彼の部屋へと向かう。鍵は、彼の両親がくれた。起こしに行き始めたぐらいに。優しい人達だ。

彼の部屋へと入り、すやすやと穏やかな顔で眠る彼の顔を見つめる。何故か下腹部が熱くなるが、いつもの事なので放っておく。

毛布を剥ぎ、すこし肌寒いのか、身動きする彼の足に跨る。彼は寝起きが悪い。暴れたりする訳では無いが、尋常じゃない力で毛布を被る。最初の頃は困ったものだ。

少しシャツが捲れ、むき出しとなつた腹部を見て惚けてしまう。なんと引き締まった^{そそ}喰る腹をしているのだろう。このままずっと見ていたい。

しかしそれはダメだ。毎朝行われる、彼を前にした私の理性と本能の攻防。今日も理性が勝利し、彼を起こしにかかる。

起こすのは簡単だ。肩をゆすればいい。起き上がるまでは長いが、起きるのは早い。「……………」

眼を、少し開いた。起きた事がわかつた私は、溢れ出ている感情を無理やり押さえ込む。毎朝毎朝、本能を抑え込むのは疲れる。

「おはよう出雲。まだ寝てるの?」

私がそう問いかけると、彼は少し頭を上げ、私の顔と体を往復して見て、頭を下ろす。

右手を額に乗せて、弱々しい声を出す。

「……降りてえ」

降りてやらない。降りたら、ベッドからずり落ちている毛布を取って被り、数十分、下手したら1時間起きてこないからだ。最初は、寝たいなら寝かせてあげようと思って、彼の椅子に深く座り込んで、彼の寝顔を近くでじつと見ていたのだが、時間を忘れ、朝ご飯だと叫ぶ彼の両親の声も聞こえず、あっさり2人とも遅刻した。

それからは二度寝させないようにしている。

「じゃあ起きる?」

無言。何も返ってこない。ちよつとムツとしてしまうが、習慣化された起床時間とは異なっているのです、眠いのは当たり前だと、自分を納得させる。

1年も続けているのだから、そろそろ自主的に6時に起きてもいいと思うのだけだ。ど。

……それはそれで寂しい。我ながら面倒臭いと思う。

「今何時だよ……」

「6時よ」

時計を探すようにキョロキョロしていたが、間髪入れずに私が答える。時計なんか意識を向けず、ずっと私に意識を向けて欲しい。そう思うのは、異常なんだろうか。

「まだいいじゃんか……朝ご飯7時でしょ……」

「いいから起きなさい!」

これは断じて私的な物ではなく、6時に起きるのが健康的だから、必死になって起きているだけだ。そう。別に、彼が構ってくれなくて寂しいなんて、そんな訳ない。確かに、彼はイケメンで優しく性格も良く綺麗好きでセンスも良く頭も良く私なんかと仲良くしてくれる私の大好きな人だけど、構ってくれなくても大丈夫なのだ。

「……………嘘」

思わず声に出してしまう。頭の中で言い訳を並べていたのだが、私の本質が言い訳を許さなかった。

彼に聞かれてしまっただろうか……

「んん……なんか言ったあ?」

……聞かれていなかったようで、よかった。

「いいえ。何も。早く起きなさい」

「うえく……」

はあ……まったく。彼は、私が居ないと、本当にダメなんだから。

学校への通学。彼は「歩くのは嫌いだ」とボヤいているが、私は、彼と2人きりでいられるこの時間は、結構好きだ。

学校へ着き、席に座る。彼は真ん中少し後ろの位置におり、私はその三つ前、最前席である。授業中、彼を見られない事はとても辛い、彼の視界に常に私が映っていると思うと、嬉しい。

……と、普通なら思う所なのだが、彼は授業中、机に突っ伏して寝ているか、暇そうにペン回しをしており、黒板なんてチラリとも見ない。そんなので大丈夫かと思うだろうが、彼は天才。テストは全部満点だ。ある時、一体何処で勉強してるの?と聞いてみたら、「へっ!?……よ、夜、かな?」と曖昧な返事が返ってきた。何を動揺していたのだろうか。

休み時間になったら、彼の元に向かう。彼が椅子を差し出してくれる時もあったが、何度も断っていると、して来なくなつた。気持ち悪いかいいう理由では断じてない。むしろ座りたいくらいだ。しかし、そうすると彼が立つことになってしまう。それはダメだ。私が許せない。

彼と向き合つて話していると、彼の後ろに、彼を見て笑いながらひそひそ話す姿が見えた。

1年前から、私は学校でも彼と関わるようにしている。その時、必然的に、彼も私と話す為、喋る事になる。今までは「関わるな」オーラ全開だった彼が、普通に話し、尚且つ優しいと知った雌豚共は、私と合わせて話しかけようとする。

雌豚がこちらに歩き出そうとした時、私は殺意を込めた目を雌豚に向ける。彼から2m程の距離で立ち止まり、私と目を合わせて「ひっ」と小さく悲鳴をあげる。

雌豚の分際で、彼に話しかけようなどと、烏滸がましい。その醜い手で触れて欲しくないし、その汚い声で彼の耳を犯して欲しくない。彼の体も耳も、全て私のモノだ。

……彼には気付かれていないな。よし。

「詩乃ちゃんはや」

数秒の間（先程の眼の攻防約3秒）無言だったが、珍しく彼から話題を振ってくれた。彼は、1年経った今でもあまり学校では喋らないので、彼から話しかけてくれたのはとても嬉しい。

「なに？」

「僕以外の友達って、居ないの？」

友達……友達？あの薄汚い雌豚と、何も考えていない能無しの屑共と友達になる筈が無いでしょう？

そう言いたくなるが、口からその言葉を出す直前、とある思いに辿り着く。

「そうか、そうか。彼は優しい。それは底知らずで、天上知らずだ。つまりは、薄汚い雌豚も、何も考えていない能無しの屑共も、等しく見てくれているという事だ。ああ、なんて優しいんだろう。あんな奴らにも優しさを与えるなんて……」

「……貴方の言える事じゃないと思うけど？居ないわよ。そんなもの」

「無難に返しておくとしよう。彼がいくら優しくても、私はそんなに優しくくない。彼が「他の奴らとも仲良くしろ」というのならば、あの雌豚や能無し共と仲良くするのも吝かではないが。」

しかし、このままこの話題を引つ張るのは良くない。私も彼も、友人など居ないし、作る気もない。いや、彼に作る気がないのかは知らないが、私は作らせない。少なくとも、作りの屑共はダメだ。絶対に。」

「そういえば、出雲。貴方も眼鏡かけ始めたのね。目悪かったの？」

結構最近、彼は眼鏡をかけ始めた。いつもとは違う、知的さを感じさせる眼鏡も、とても似合っている。

いや、いつも知的さを感じさせない訳では無いのだが。これはこれで、とても恰好いい。

「言ってなかったつけ。ここ最近で、すっごい目悪くなつてね。眼鏡なしだと、今の席じゃ黒板の小さい文字が見えないんだよ」

「黒板見てないくせによく言うわね」

苦笑する彼に、私も自然と笑みが零れる。この時間は、何にも変えられない、今しか味わえない感覚に落ちる。永遠に続いて欲しいとも思うし、それ以上も求めてしまう。

私なんか、なんて、最近はよく思う。雌豚共が彼に群がっているのを見て、更になにに辛く苦しい時でも、彼が居れば、私はやっていける。いつも私を安定させてくれる。どんなに辛く苦しい時でも、彼が居れば、私はやっていける。

今はまだ、彼の隣に立つには、足りないかもしれない。でも、絶対、いつか、彼の隣に、堂々と立つてみせる。

私以外……立たせない。

窓際で、数人の屑が話している。いつもなら頭にとどめすらしなが、今回は何か違う。私を見て、何かを話している。何かするつもりなのだろうか？しかし、彼のモノである私の体を見られるのは気分が良くない。ジツと見つめ返していると、屑共もこちらに気付いたのか、ふっと視線を外した。何なのか少し気になったが、彼にどうしたのか聞かれ、すぐに頭から抜け落ちる。

彼がそちらを振り向こうとしたが、私が止めた。あんな屑共を、彼の視界に入れてはいけない。

放課後になったら、私はすぐに彼の手首を掴み、校門まで引つ張る。悪いなどは思うけれど、すぐに出なければ、雌豚と屑がわらわらと集まってくる。事実、彼と私が話し始めた頃に、何度かあった。それからこうしている。

「さ、帰りましょ」

校門前で、振り返って、彼の顔を見る。彼は毎回不思議そうな顔をするが、私が笑顔で彼の手を握ると、苦笑した顔になり、私と共に歩く。

何度も言うが、彼は優しい。それは良い所だが、同時に悪い所でもある。外の世界は危険なのだ。だから、危険を知らない彼を、私が守らなきゃならない。

いつまでもいつまでもいつまでも……

私は、彼を見守る。彼の隣に立つたために。私の幸福感を満たす為に。そして、彼の幸せの為に。

「……大好きだよ。出雲」

私のその言葉は、強い風の音でかき消され、誰の耳に届く事もなかった。

朝田詩乃とプールへ行こう

小学5年生にあがり、一学期が終わり、夏休みに入った。詩乃ちゃんが銀行強盗にあらうまで、後数ヶ月しかない……の、だが。

よく良く考えたら、僕がどうこう出来るような問題ではない事に気付いた。なんでもっと早く気付かなかったん？

とりあえずの解決法なんだが、行かせないようにする、しか思い付かなかった。細かい日には書かれていなかったような気がするので分らないし、わざわざ一言僕に言っただけで行くとは思えないので、止められる可能性は低い。

でもなー。詩乃ちゃん僕に（何故か）ベツタリだからなー。もしかしたら銀行行かないで僕の所にいるかもしれない。いや、それじゃお母さんが死んじゃう。それはギルテイ。

今すぐ僕が、バクトル操作できるようになったり、スタンド発現させたり、王の財宝を手に入れたり出来たら話は早いが、生憎そんな都合主義がある訳もないので……

「詩乃ちゃん。プール行こう」

問題を先延ばしにして、1度きり……僕は2度目か？まあ、そこはスルー。1度きり

の小学5年生の夏休み、楽しまなきや損だ。中学校や高校に上がったら、宿題なんかで時間が取れない（かもしれない）から。

ちなみにもう宿題終わらせてます。少なかったし、僕や詩乃ちゃんならすぐ解けるからね。

「……プールねえ」

本から目を離さずに答える。少しはこつち見て。後もう少し恥じらつて。詩乃ちゃん今ミニスカだから。足組んじやダメ。はしたないよ。

後なんでナチュラルに僕の部屋の椅子に座つてるの？部屋主僕だよね？遠慮つてもんが無くなつてきたね。

「そうそう。この前福引で「うえるかむとうーようこそじや〇りぱーく」の招待券当ててねー」

「あそこの……でも、今の時期は混んでるんじゃないかしら？」

ご尤もである。事実、前世の僕は夏にプールなんぞ行かなかつた。誘われなかつたという事もあるが、単純に、人混みという物が嫌いだったからだ。

DA☆GA！今世は、詩乃ちゃんがいる。美しい華が添えられるのだ。ぶつちやけて言うどロリ詩乃ちゃんの水着見たい。恥ずかしがつてる水着ロリ詩乃ちゃん見たい。

発情はしないが（重要）

「ペアチケットが2枚あって、僕、母さん、父さん。これで3人なんだけど、後1人どうしようかってなって。それで、詩乃ちゃん誘おうかなーって」

「ふくん……」

「ありや？興味なし？」

水とか青いもの好きそうだけどなー。と偏見じみた事を考えていると、本から目を離し、ジト目をこちらに向ける。

「もしペアチケット2枚じゃなくて、1人1枚のが3枚だったら、私は誘わなかったのね」

「えっ」

いや、まあ……そりや……ねえ？……言わずもがなって奴ですよ。でも、正直に言ったら拗ねてしまう。本人は拗ねてないというが、絶対拗ねてる。何も答えないでいると、ツーンと顔を背けてしまった。

「……行かせて貰うわよ。余ったら、勿体ないし」

「アハハ……ツンデレが激しいなあ……」

「ツンデレ言わないで」

「うーん……何処で間違っただろう……全部か。」

詩乃ちゃんとプール行く約束は取り付けたから、もうどうだっていいや！詩乃ちゃん

可愛い女神！（現金）

「それで？プールっていつなの？」

「3日後」

「……………はっ!?ちよっ、もつと早く誘いなさいよー」

急ぎながらも丁寧の本に葉を挟み、慌てたように部屋から出ていく。3日前は遅いのか？1週間前とかに誘った方が良かったのだろうか……

前世でよく、女心を知らないだとか、鈍感だとか、無性欲人とか言われた事を思い出した。そういえば、詩乃ちゃんにも何度かさらつと言われたような気がする……解せぬ。僕なんて、性欲と煩惱の塊みたいなモノなのに。

家に帰った詩乃ちゃんは、すぐにお母さんに頼み、新しい水着を買いにショッピングモールに出掛けたとか。

後から聞いたのだが、あの時はスク水しか持っていないなくて、焦っていたらしい。別にスク水でも良かったと言うと、怒られた。

3日後。プール当日である。「うえるかむとうーようこそじゃ〇りぱーく」改め「うえるかむぱーく」は、やはりというか、混雑していた。

僕の両親の車で向かい、更衣室で別れる。比較的着替えるのが楽な男性陣は、早めにプールへと出た。

「出雲！パラソル持ってきたか!？」

「今運んでるから!」

男性陣は、早く出た分、パラソルをたてたり、レジャーシートを敷いたり、働かなければならない。このうえるかむぱーくは中々敷地面積が広く、近くに「うえるかむホテル」といううえるかむぱーく所有のホテルまである。まるで何処かの夢の国のようだな。

そうこうしているうちに、母さんと詩乃ちゃんが更衣室から出て、こちらに向かってくることに気付く。詩乃ちゃんは青いフリルの付いた子供用ビキニを着用しており、絵になっていた。え？母さん？自分の母さんの水着を実況しろとか、鬼畜にも程があるよ。各々好きに想像してくれたまえ。

「水着可愛いね、詩乃ちゃん」

「つ……あり、がと……」

グイグイバタバタする、どちらかと言うと攻めが多い詩乃ちゃんだが、案外褒められ

たりする事に弱い。水着を褒めると、真つ赤に顔を染め、目を背けて礼を言ってくる。チラチラ見てるのだが、気付かないと思つているのだろうか？僕は、子供らしい詩乃ちゃんという物を、余り知らない。だが、今ここで水着を着て顔を赤らめる姿はまさに子供で、とても可愛らしいと思う。

「そ、それじゃあ、行きましよう！」

「気を付けるのよー」

今日も、僕は引つ張られる側だ。いくら可愛らしく子供らしい詩乃ちゃんでも、僕を先導してくれる。

もう僕の中で、詩乃ちゃんはかけがえの無い存在になってしまつているのだろう。あらゆる日常のワンシーンの、全てに彼女がいる。

「ね、詩乃ちゃん」

「何？」

「ありがとう」

「……どういたしまして」

前を向いたまま、こちらを振り返らない。しかし、肩から覗く耳が、先程の顔同様、真つ赤に染まつているのを見て、僕も自然と笑みが零れる。

今日は、
目一杯楽しむとしよう。

朝田詩乃と流されたい

小学5年生というのは、ある程度自立的な行動が出来るようになり始める年だと、僕は思う。小学5年生からは、自転車で遠くへ行ったり、友達と17時や18時まで遊んだり……わかりやすく言えば、人生の節目という物だ。15歳を超えれば、R15の作品が見れるようになったり、高校生になれば、バイトが出来るようになったり、門限がなくなったり、と。

主に未成年のうちに、様々な「禁止」が、時間と共に無くなっていく。少なくとも僕は、小学5年生は、人生の節目の1つだと思っている。うちは小学5年生から自転車を許されたし、ある程度ならば1人で遊びに行くのもOKだった。17時前に帰れば怒られないし、なんとというか、一定の自由を手に入れた。

そんな事を両親に力説し、僕はもう1人でも大丈夫だとアピールする。そして、自由にさせてくれとお願いする。

そしてその願いは通り、プールにいる間、詩乃ちゃんとずっと2人きりで居られる事を許された。

「昨日は少し疲れた……」

昨日の夜に行われた「1人でも大丈夫アピール」で、僕は心が疲れていた。前にいる詩乃ちゃんの綺麗な髪を伝う水を見てたら、心が清められていく気がする。

「……何？ずつと見て」

「あ、気付いてたの？」

「そりやそんなに見られれば気付くわよ。言ってくればいいのに」

いや、言ったら変態確定じゃないですか。と口には出さないが、心で思う。詩乃ちゃんとして小学5年生……まあ僕もだけど、なんていうか、「男」と「女」という物を理解し始める頃でもある。

ちなみに、良く聞く「お父さん大っ嫌い時代」はこころから始まるらしい。詳しく知っている訳では無いが、そんな事を聞いたことがある。

「いい加減、それ貸しなさいよ」

後ろ歩きの子詩乃ちゃんが指差すのは、僕がグデーつとしてる、いるかの浮きだ。いるかの形をしており、なかなか大きい。プールに来たら、ひたすら流水プールにて浮き輪

に浮かびながら流されるのが好きなタイプだ。友達といって雑談を挟むとなおよし。
「嫌だよお……」

このいるかは渡さん。そう主張するように、僕は、いるかを背中から抱き締める。僕はこうやって流されながら、前を進む詩乃ちゃんを見ていられたら、それで満足だ。

「……ずるい」

口を尖らせながら、そうボソツと呟いた。そんなに欲しいなら、無理やり剥ぎ取ればいいものを。それをしない所が、詩乃ちゃんの優しさだろうか。僕だったら剥ぎ取って。いや、詩乃ちゃんがグデツてたら、許すけど。

「詩乃ちゃん、そんなにこれ好きなの」

ぼふぼふと浮きを叩くと、口だけプールに入れて、ぶくぶくと何かを言う。

「……ブクブクブクブクブク」

「何い……う？」

「出雲に抱きしめられてるいるかがずるい」

ええ……

なんだそんな事か。と一瞬思い、言葉をもう一度頭の中で繰り返し、えっ？と疑問符を浮かべる。つまりは、このいるかのように抱き締められたらという事だろうか？僕としては全然ウエルカムなんだが、周りの目もあるし、何より、僕達は今水着である。そ

んな状態で抱き締めたりなんかしたら……

「いつ、出雲に……だ、抱き締められ、たい……」

「おお……」

詩乃ちゃんから直球に言われました。これはもう成長云々じゃないね。進化だよ、進化。ツンデレから何かに進化したのか、今までのツンが全てデレに変換されて、ここに爆誕したのか。頭が混乱してよく分からない。

「……おいで」

先程も言ったが、僕は、詩乃ちゃんを抱き締める事自体はいい。詩乃ちゃんの、柔らかいアレやらソレやらが僕の体に当たろうが、僕の斬魄刀が卍解する事もないだろう。まだ精通もしていないのだ。平均的な精通は11歳くとなつているし、来年か再来年にはすると思うんだが。

……詩乃ちゃん、初潮迎えてないよね？

「んっ」

おいで。と言った僕に、「抱き締めて欲しい」と頼んできた詩乃ちゃんが断る訳もなく、おずおずと僕の脇に手を通し、抱き締める。僕もそれに合わせて、詩乃ちゃんにおぶさるように手をかけ、抱き締め返す。少し顔が熱い。顔の横も熱い。見た訳では無いが、多分、この顔の横の熱いのは、詩乃ちゃんの顔だと思う。

ゆつくりと、水に体を浮かせる。いるかの浮きは、縄のようなものが付いているので、それを腕に巻き付けて固定しているから、流れていく事は無い。

周りの視線が気になるが、仲のいい兄妹けいまいか姉弟あでいに見えている事だろう。いや、それにしてはこれはないか？……いやいや、クリスマスだとかバレンタインデーだとかに、木の下でラブラブチュチュするよかマシだろう。うん。

恥ずかしい事には変わりはないが。

「ん……えへへ」

右を向くと、僕の右肩に頭を乗せた、幸せそうな顔の詩乃ちゃんが見える。その顔は珍しく年相応で、僕とは違い、やはり、子供なんだなと気付く。

普段、詩乃ちゃんは大人っぽい。年相応の顔や行動はほぼせず、まるで一人暮らしする成人女性のような性格をしていた。僕は前世では成人直前つくくらいで、今世を合わせれば余裕で成人している。なので、もちろん、僕の精神は小学5年生とは合わない。だが、彼女は違う。純粹な小学5年生なのだ。

まだ精神が未発達で、でも、大人然としている。

そんな詩乃ちゃんが、僕は大好きだ。

「ねえ、出雲」

「んー？」

「私の事好き？」

思わず体が震える。詩乃ちゃんの顔を恐る恐るというふうに振り返ると、顔を上気させ、目はトロんと溶け、口はだらしなく開き、はあはあと言いながら、力強く僕の体を抱き締める、先程の幸せそうな顔とは、また違うベクトルの幸せを感じている詩乃ちゃんの顔が、見えた。

「あ、あー……」

「ねえ、どうなの？ 私は好きよ。出雲の事」

どう反応するのが正解なのだろうか。素直に言うべきなのか、子供らしくはぐらかすべきなのか。さつきから冷静に色々と物を考えているが、はつきり言つてキャパオーバーである。まだ精通前で僕のスタープラチナがオラアする事は無いが、興奮はする。詩乃ちゃんの、アレやらソレやらが体にふにふに当たるのを忘れる為、考え事をするのだ。

僕はテンパツたり、どうしようもなくなつた時、頭の中で色々考える癖がある。その事柄に関係する事を考える事もあつたし、全く関係ない事を考える事もある。

ダメだ。考える事しか出来ない。早く答えねば、詩乃ちゃんが不機嫌になってしまう。現に、段々と詩乃ちゃんの細腕からは信じられないくらいの力で、抱き締めてくる。痕が出来そうだ。

「ねえ……ねえ？」

痛い。締め付けられる痛みと、詩乃ちゃんの爪が僕の背中に食い込む事による傷のふたつが痛い。なんとか止めさせるため、質問に答える。

「う……僕も、大好きだよ。ちよつと、力、強い、かな……！」

その場しのぎの言葉でもないし、僕の本心である。けどまあ、小学生の言う「好き」は、あまり信用出来ないからなあ。子供は好きになるまでも早い、好きでなくなるまでも早いので、不安だ。

「……………ふふっ」

僕の言葉を聞いて、詩乃ちゃんが不敵に笑う。また強く抱き締めて来るが、今度は痛くなく、心地の良い強さだった。僕も詩乃ちゃんを抱く手を少し強めると、詩乃ちゃんが僕の首筋に吸い付いてくる。

「ひ、やあ!？」

「んっ……………」

思わず、変な、とても恥ずかしい声が出てしまう。楽しそうな声を出しながら、チュウチュウと首を吸ってくる詩乃ちゃん。前世含めファーストキスもまだ（本人はそう思っています）な僕としては、刺激が強過ぎる。

時々歯を立てるのも、なんというか、感じる。誰得だよって話だが、僕は結構首が弱

いのかもしれない。というか、詩乃ちゃんなんか慣れてない？

「ちよ……つと!?」

少し強めに詩乃ちゃんを引き剥がす。お互い数歩後退し、離れる。詩乃ちゃんは驚きのような、混乱のような顔と表情をしながら、問い掛けてくる。なんで引き剥がされたのか、分かっていないような表情だ。

「えっ……嫌、だった?」

「嫌とか、そういうんじゃないよ……いきなり、どうしたの?」

僕の知っている詩乃ちゃんは、友達の、しかも異性の首筋を吸うような子ではない。それは前世で見た原作を読んだ上での言葉であり、今世で見た、成長した詩乃ちゃんを知った上での言葉である。

「……シたくなっちゃった。……それだけよ?」

もう顔を赤くする事はなく、本当に、心の底から混乱した瞳をこちらに向ける。さも当然かのように思っているのか?……いや、思っているのだろう。先程詩乃ちゃんの言った「好き」は恋愛的な意味なのだろうか。「朝田詩乃」を知っている身として、あまりドストレートな好意や告白を苦手としている詩乃ちゃんが、か?

有り得ない、と一決するには可能性が高い。

「したくなつたって……はあ、もういいよ。……大丈夫かな」

「大丈夫って、何が？」

「首だよ。詩乃ちゃん結構強く吸ってたし、痕とかついてない？」

「……大丈夫よ」

うーん。大丈夫なら、いいんだけど……

あの時、詩乃ちゃんの言った「好き」は、雰囲気になされて言った物なのか、勇気を振り絞って言った本気の「好き」なのか、はたまた友人としての「好き」なのか。それは分からないが、とにかく今は一旦忘れ、詩乃ちゃんと遊ぶとしよう。

問題を先延ばしにするのも、僕の悪い所だな……

ちなみにその後、両親達の元に帰った時に、両親から「首筋にキスマークついてるぞ」と苦笑されながら言われた。詩乃ちゃんめ……謀ったな。どうりで「なんか凄い見られるなあ」と思ったよ！すつごい恥ずかしい……

策士の詩乃ちゃん。略して策士さくし乃ちゃんのは、帰りの車で僕的首筋にくつきり付いたキスマークを見て笑い、見て笑いを繰り返していた。幸せそうでよかったよ。僕は不幸せだけどね!!

朝田詩乃を守りたい

小学5年生の2学期が、始まった。そろそろ、あの「事件」が起こる頃だ。原作では2学期が始まった頃、としか描写されていなかったもので、細かい日程は分からないが……

「おーきーなーさーいー！」

とある土曜日の朝、いつもの様に、詩乃ちゃんに起こされる。休みの日という事もあって、8時に起こしに来た。大体この時間だ。誤差はほぼ無い。その管理能力を他に回せ、と言いたいが、他の管理も完璧なので文句が言えない。

「ほら、早くー！」

「……………」

まだ寝たい一心だった僕は、特に考えもせず布団へ潜った。昨日の夜は、勉強で寝るのが遅くなってしまったのだ。ちなみに範囲は大学3年の後期である。前世での勉強ペースを維持出来るよう頑張っているのだが、僕はスイッチが入ると一気にやるタイプで、昨日はそのスイッチが入った日だった。

「もう……………」

詩乃ちゃんが、諦めたように僕の上から降りる。詩乃ちゃんは以前、休みの日は、無理に起こしたりせず、起きるまでずっと僕の部屋で本を読んでいるか、パソコンをしていると言っていた。配慮も出来るなんて、いいお嫁さんになるねえと冗談で言つて怒られたのは、すっかり覚えていて（詩乃ちゃんに忘れろと言われたけど）

「んん……」

詩乃ちゃんの少しの重みが無くなり、体勢を少し変えて、寝やすい形にしてから、また眠る。詩乃ちゃんが起こしに来たという事は、今は8時くらいなのだろう。ならば、もう2時間は寝るとするか……

「…………ふあ」

目が覚める。外はまだ明るい。今は何時だろうか……13時!? えっ!? アレから5時間経つてるじゃないか!

詩乃ちゃんなんで起こして……って居ない。あれ? いつもなら1時間だろうが3時間だろうが、起きるまで僕の部屋に居ると言うのに……5時間は、流石にあきらめたのか?

詩乃ちゃんの家へと行ってみると、鍵が閉まっていた。詩乃ちゃんのお母さんから頂いた合鍵を使い、中に入る。ちなみに、使用したのはこの時が初めてだ。

「詩乃ちゃん……ん？」

居ない。詩乃ちゃんはおろか、お母さんまでも。はて、買い物にでも言ってるのだろうか。食材ならば、詩乃ちゃんが僕を叩き起して2人で行くだろうし、他の何か――

「あつ……」

そうだ。そうだ！2学期始め、土曜日、午後、詩乃ちゃんとその母親の不在！これはもう……！

「やばいー！」

それは正しく、事件の日だと確信した。

詩乃ちゃんとそのお母さんが向かったのは、近所の郵便局。原作通りならば、銀行強盗に遭うはずだ。既に事件が起きた後ならば、どうすればいい？いや、起こってないと

しても……

様々な考えを巡らせながら、郵便局へと向かう。「近所」の「郵便局」ならば、数は限られてくるし、今まで何度か連れて行って貰った事もある。アニメ版の銀行の細かな所まで覚えているわけもないので、虱潰しに行くしかない……と、思う所だが。

ある程度検討はしている。朝田家が行く郵便局が一番近い所。自意識過剰じゃなければ、詩乃ちゃんは、僕が居ない状態で外に出る事を嫌っている。ならば、一番近い所が最有力候補だろう。

走って、走って、ただ走る。日頃から走り込んでいたお蔭で、郵便局への最短ルート、及びそこまでの全力疾走を可能としている。郵便局が見えてきて、中に入る。入口の横の椅子に座る詩乃ちゃんが、本を持ちながら驚いた瞳をこちらに向けている。どうやらまだ事件は起きていないようだ。

「良かった。早く、早くここから!」

「えっ、ちよ、どうしたのよ? 汗凄いわよ?」

詩乃ちゃんのお母さんは……ツ!もう窓口に!? だったら、恐らく、記憶違いじゃなければ、すぐに……!

入口に目を向けると……痩せた、中年男性が入ってくるのが見えた。コイツが強盗犯だと、直感で分かった。と言うより、脳に刻まれた感覚が、そう叫んでいる。

今、この日、この瞬間が、僕と詩乃ちゃんの人生の分岐点となる。

「本当にどうしたのよ。貴方らしく……」

「ッ」

言いたい。けど、口を開くと、パクパクと金魚のように口を開け閉じする事しか出来ない。声が出ず、詩乃ちゃんも不思議な顔をしている。そんな事をしている間にも、強盗犯は窓口に向かい、詩乃ちゃんのお母さんを突き飛ばした。

「痛っ……」

詩乃ちゃんのお母さんが倒れ込み、強盗犯がポストンバッグを窓口において……銃を取り出し、銀行員に銃口を突きつけた。

「この鞆に金を入れろっ！両手を机の上に出せ！警報ボタンを押すな！お前らも動くな！！」

銃口を慌ただしく動かし、職員達に「妙な事をしたら撃つ」とアピールする。叫びだしそうな詩乃ちゃんの口を抑え、詩乃ちゃんの隣に座る。僕という壁が居なくなつた詩乃ちゃんの瞳に、強盗犯と、強盗犯の持つ銃が映る。

すぐに固まる詩乃ちゃんの口から手を離し、必死に思考を巡らせる。奴が銀行強盗に入る前、もつと言えば、薬物を打つ前に、何か鈍器を使い始末しておきたかった。しかし、それはもう出来ない。もう事件は起きてしまっている。

……パァン！という、激しい音が銀行内を包む。僕と詩乃ちゃんは反射的に耳を抑え、爆音から鼓膜を守る。足元に葉莖が転がってきて、目を上げると、男性局員が撃たれていた所だった。

「……！」

救えなかつた！強盗犯が来る事も、彼が撃たれる事も分かっていたのに！

そうだ。そうだ。考えている暇なんてない。原作の詩乃ちゃんもそうだった。原作の詩乃ちゃんも、強盗犯に無我夢中に飛び付いたんだ。結果は良かったとはいいい難いが、少なくとも、命は失わなかつた。

「……やるしかない」

決めたんだ。詩乃ちゃんを、守る。救う。不遇な朝田詩乃を、あるべき場所に立たせると、そう決めたじゃないか。今までは、寄り添って、それで詩乃ちゃんが助かると思っていた。「友達」「親友」、そんな存在がいれば、詩乃ちゃんはもつと強くなれていたんだと。

寄り添うだけじゃ、足りないんだ。行動しなきゃ。「友達」だとか「親友」だとか、そんな者が居るだけでは、詩乃ちゃんは救われない。

なるんだ。詩乃ちゃんの、英雄ヒロイに。詩乃ちゃんを……彼女を命懸けで救い、助け、そして寄り添う。そんな、物語のような英雄に！

詩乃ちゃんのお母さんへ、銃口が向けられる。このままでは何も変わらない。僕は決心したんだ。

席から跳ね上がるように立ち上がり、強盗犯の元へ走る。強盗犯の足を、毎日走って鍛えた脚力で蹴る。相手は大人だが、薬物中毒者だ。体はガタガタと震えていたし、余裕もないようだった。僕の蹴りで簡単にバランスを崩した強盗犯は、床に背中から倒れ込む。

銃を持つ右手の手首を思い切り踏み、銃を落とさせ、蹴って遠くに飛ばす。ここまでOK、詩乃ちゃんのお母さんが撃たれる事はもうない。問題は……

「この、ガキいいいいいい!!」

このプランじゃ、自分自身の身を少しも守れない。つて、所かな……

強盗犯は僕の首を掴み、窓口に叩き付ける。そのまま力任せに首を絞める。抑え込まれては、もう僕に勝ち目はない。元々、1度は人生を終えている。3年も詩乃ちゃんと過ごせたのだ。詩乃ちゃんさえ救えれば、問題は無い。

そんな事を考え、ほぼ生きる事を諦めていた時……意識が朦朧となり、遠くなった耳に、微かに発砲音が聞こえる。それが更に2回連続して鳴り、強盗犯から完全に力が抜けていくのを感じた。

助かつ

痛い

痛い。痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!

顔が熱くなるのを感じる。右頬が、尋常じやない程痛い。炎で炙られているかのように熱い。何故だ？一体何が起きている？脈絡のない、言葉とも言えない、情けない叫び声を上げながら、僕は暴れる。

チラリと見えたのは、拳銃を手に持ちながら、床に倒れる詩乃ちゃんの姿。その姿を見て、僕の頭は急速に冷え、痛みも感じなくなっていくた。

ああ。

結局、僕は朝田詩乃を救えなかったのかな……

そんな事を考えながら、僕は意識を失った。

終出雲を助けたい

まだ暑い日差しが照り付ける、9月上旬。今日は土曜日だが、私は平日休日関係なく彼を起こしに行っている。流石に休みの日は自重するが。

「お邪魔します」

一言断って、鍵のかかかっていない玄関の扉を開く。リビングにいる彼の両親が気付いたが、特に何も言わず私を通す。最早毎日の恒例行事となっているので、かける言葉もないのだろう。

部屋の扉を開ける。彼はまだ寝ている。

ため息を吐き、何度目かも忘れたやり取りを行う。しかし、今日はそう長く居られない。朝イチで彼の顔を見る……んじやなくて、彼を起こしに行くのは、習慣だ。これから予定があるとしても、欠かせない。

そう、今日は少し予定がある。彼は休みの日は起きないし、無理やり起こして引つ張って行く、なんて事はしたくない。軽く彼に声をかけ、彼が起きないのを確認し、私は彼の椅子へと座る。心地いい。まだ出掛けるまでは時間があるので、その時間までここで座って、言葉では言い表せない気持ちに包まれながら過ごそう。

幸せな時間は長くは続かない、というのは当たり前の事で、あつという間に時間になつてしまう。天井を見ていた目を、ふと、机の上にある時計に向ける。

「……………」

指し示す時間は12時40分。これには、私が私自身に絶句する。約4時間もの間この椅子に座っていたとは、思わなかった。せいぜい1時間がいい所、という認識だった。私の予想以上に、「幸せ」という物は時間を進めるらしい。

「行かないとな……………」

13時頃に家を出る予定なので、今から帰って、外行き用の服に着替えなければならぬ。いや、決して今の服で郵便局になんて行けないという訳では無いが、お気に入りなので、彼以外の前で着たくないし、何かの拍子に汚れてしまうのも嫌だ。

まだ眠る彼を見て、まだ寝ているのかと呆れる。休日とは言え、流石に寝過ぎでは？ そう思ってしまうのも、仕方ない。前日に彼がどれほど夜更かししていたのか少し気になるが、今はそんな時間はない。彼の額を1回撫で、「じゃあね」と小声で囁いて部屋から出る。彼の両親に「お邪魔しました」と言つて、走つて私の家へと向かう。それ程遠

い訳では無いので、走る必要はないが。

郵便局に着き、お母さんが窓口へ向かった。私は、題名も覚えていない本を読みふけている。久々に、面白い作品を見付けたな、と心を踊らせる。私が心を踊らせるのは、彼関係か、本ぐらいだ。特に、今年の私の誕生日に花束を送ってくれたのは嬉しかった。もちろん、その花は花瓶に入れ、毎日手入れを欠かしていない。彼にお礼の花束もあげた。あの瞬間は、私の中の、理解し得ない感情が爆発した瞬間でもあった。アレは一体何だったのだろうか……？

そんな事を考えていると、いきなり誰かが転げるように銀行に滑り込んできた音がした。むわっとした暑い風が、冷房によってひんやりした銀行に入る。一瞬、そちらの方に目を向けると、彼の……出雲の目と、合った。驚きのあまり、凝視してしまう。

「良かった。早く、早くここから！」

「えっ、ちよ、どうしたのよ？汗凄いわよ？」

焦ったような顔と声で、私に必死に訴えかけるようにそう言う。しかし、突然な事に、私は、反応しきれない。何故ここに来たのか、何故そんなに焦っているのか。考えど、答えは出ない。

「本当にどうしたのよ。貴方らしく……」

「ッ」

何かを伝えようとしているのか、口をパクパクさせている。声が出ないのか、本人も困惑しているようだ。私の横で扉が開き、誰かが入って来るが、この時の私には視界にすら入ってなかった。

ソイツが銀行の窓口に向かい、お母さんを突き飛ばした。そこで初めて、私は彼から意識を外し、その男に意識を向けた。この時は、彼と私の位置関係から私が見る事は、出来なかったが、お母さんの小さな悲鳴が聞こえた所で、抗議の声を上げようとした。しかし、彼に口を抑えられ声は出なかった。

「この鞆に金を入れろっ！両手を机の上に出せ！警報ボタンを押すな！お前らも動くな！！」

彼が退き、窓口に置かれたボストンバッグと、ソイツが上げた叫び声。そして、その手に持つ物を見て、ソイツが強盗だと、分かった。彼はこの事を言っていたのだろうか？だとしたら、何故知っていた？いや、聞くのならば後だ。今、私に何が出来るかは分からない。ただ見ている事しか出来ないのか？

発砲音が聞こえ、窓口係の銀行員が撃たれる。胸に手を当て、地面に倒れ込んだ。そこで、言おうとした言葉が、段々と無くなって言った。

何も考えられず、「目の前で人が撃たれた」という事態を頭が理解出来ない。理解出来

ないまま、その銃口がお母さんに向けられた。

助けなければ、いけない。しかしどうすれば……!!

「……やるしかない」

隣の椅子に座る、彼の小さな声が聞こえた。えっ?と思ひ、彼に目を向ける。同時に彼が飛び出し、強盗犯の足を蹴り付ける。倒れ込んだ強盗犯の右手を踏み、銃を離させてから蹴つて遠ざけた。

その銃は、丁度私の足元に転がって来た。

彼が強盗犯を倒している隙に、お母さんは壁際まで寄つていた。強盗犯は最早お母さんや金の事など目に入つておらず、自分を倒した彼の事しか目に入っていないようだ。

「この、ガキいいいい!!」

強盗犯が立ち上がり、彼の首を掴んで、机に叩き付けて絞める。あの体格差で勝てるはずも無く、抵抗虚しく彼の足掻きも弱々しくなっていく。

意識の中から、強盗犯と銃への恐怖心と困惑が無くなる。私の心の拠り所であり、私の全てである彼が、名も知らない奴に殺されそうになっている。

彼の元へ向かおうとした時、私の足に何かが当たる。それが、強盗犯の持っていた銃だと気付き、それを持ち、構える。

2発一気に撃つ。両手がじんじんして、肩が痛くなる。その2発は、1発はやつの脇

あの強盗犯の命を奪った事は、まあ、どうでもいい。この痛む肩もどうでもいい。もう彼に嫌われたこの体なんて、いらぬ。

「……はあ」

私は、私自身に呆れた。

今更、自分自身の事を気にしているのか。もういいじゃないか。彼と過ごしたこの3年で、もう満足だろう。私程度が居なくても、彼の人生には何ら影響はないし、まず、彼と知り合った事自体が間違っていたんじゃないかとすら思える。

目を地面に向ける。そこには強盗犯の血と、少量の彼の血が混じった液体が流れてきていて、座り込んでいる私の足と、手に、血が付着する。

もう、どうだっていいや。

朝田詩乃に寄り添いた……かつた

「事件」は、あっさりと終わりを迎えた。

あの後警察が到着し、射殺された強盗犯、血溜まりに伏せる僕、そして銃を持つ詩乃ちゃんを見て、とりあえずは全員を病院へと送った。勿論の事、強盗犯は即死。僕は右頬に、癒えない傷を負った。と言つても、治療のおかげか、表面上深く抉れている訳ではなく、なんというか、こう……クレツシエンドみたいになっている。進んだ医学薬学でも、銃痕の完全治癒は出来ないか……

僕と詩乃ちゃんの名と、行つた事は、警察と親にとても怒られたものの、警察が情報規制を敷き、メディアがそれを取り上げる事は無かつた。僕と詩乃ちゃんの行いは「正当防衛」として認められた。数週間の療養（頬の痛みが和らぐまで入院&事件後のカウンセリング等）をして、今日やつと帰つてこられた。

詩乃ちゃんはまだ入院しているようで、どうも精神面が不安定らしい。刑事さんとカウンセラーの方に聞いてみたが、心ここに在らずという感じで、受け答えもまともにしてくれない状態だ、と。

1度、会わせて下さいと言つたのだが、僕もその時療養中であつた為断られた。しか

し、今ならば大丈夫……だと、思う。話に聞いた通りの詩乃ちゃんだったら、僕はどうしていいか分からないが、寄り添って、理解してあげよう。

それが、防げなかった僕の最低限すべきことだ。

そして今日、またこの病院にやって来た。

病院内に入ると、受付に刑事さんが居た。どうも、と頭を下げると刑事さんが「やあ」と言つて笑つた。受付員の人に詩乃ちゃんの場所を聞くと、案内してくれるそうだ。

刑事さんも同伴するようで、理由を聞くと

「一応な。今の彼女の精神状態は……良くない」

と言つていた。念には念を、という奴か。

詩乃ちゃんの部屋に着く。扉の前で、「此処で待っていてください」と刑事さんに伝えるとき、「大きな音がしたら入るからな」と言つて、待つてくれた。あれ程優しい刑事さんには会つたことがないな……いや、まず、刑事さん自体あまり会う機会が無い訳だが。詩乃ちゃんの部屋に入り、一番右奥のベッドに向かう。カーテンを開くと、無感情の目と表情をした詩乃ちゃんが、窓の外を見ていた。カーテンを開いたにも関わらず、こちらに意識さえ向けていない。

「……詩乃ちゃん」

ピクツ。と、詩乃ちゃんの指が少し動いた。しかし、それ以上の反応は示さなかった。

意識がない、という訳でもないのだろう。ただただ、考える事を放棄している。

「……………めん、ね」

そんな詩乃ちゃんを見てなのか、涙が溢れてきた。なんの涙なのかは、僕にもわからない。反応してくれない悲しみの涙なのか、こんなにも辛い現実から逃れられる嫉妬の涙なのか。ふと、ベッドの上に置かれた詩乃ちゃんの左手に、自分の手を乗せる。ギョツと握ると、詩乃ちゃんが窓から、詩乃ちゃんと僕の重ねられた手に視線を移した。

「……………」

詩乃ちゃんの手を握りながら泣いていると、詩乃ちゃんも、少しだけ握り返してきた。詩乃ちゃんの目を見ると、詩乃ちゃんと目が合った。やがてその目が潤み、大粒の涙が零れ、今度はしっかりと、僕の手を握り返した。

「い……………あ……………」

詩乃ちゃんの右手が、僕の頬に触れようと伸ばされる。だが、途中でその手は止まり、空中で静止する。何処か戸惑うように、指先がカタカタと震えていた。

「大丈夫……………僕は、ほら。大丈夫だから……………ね」

優しく、問いかけるようにそう言つて、詩乃ちゃんの空中で静止した右手に、空いた僕の右手を重ねる。すると、その右手が伸ばされ、僕の左頬に重ねられた。

「……………めん、なざつ……………私……………ッ！」

「大丈夫……大丈夫だよ……」

大丈夫と詩乃ちゃんに言い聞かせ、左手で頭を撫でる。すると、身を乗り出して、僕の体を包み込むように抱き締めてきた。そして、今度はしっかりと、大声をあげて泣き出した。刑事さんが入ってきたが、僕と詩乃ちゃんを見て、驚いていた。

「まさか、起き上がるとはな……」

それ程詩乃ちゃんの精神状態は悪かったらしい。まだ僕が入って5分も経ってないんだけどな。カウンセラーの腕が悪い、なんて事はないと思うし。

その後、詩乃ちゃんは数十分に渡って泣き続け、疲れ果てたのか眠ってしまった。このまま連れて帰る、なんて事は出来ない為、その時は詩乃ちゃんを寝かせて僕は帰ることにした。色々な手続き何かをしなければならぬらしく、最低でも3日か4日は待つてもらおう事になると、申し訳なさそうに刑事さんが教えてくれた。

……毎日、来るとしよう。

翌日、詩乃ちゃんの病室に行くと、昨日と比べ少しだけ元気が出たような気がする詩乃ちゃんが居た。声をかけると、バツとこちらを向き、ふんわりとした笑みを浮かべたが、すぐにまた昨日のような困った顔をする。

「おはよう、詩乃ちゃん」

「……おは、よう。柊君」

呼び方が昔に戻ってる?……原作詩乃母みたいに精神逆行、なんて事はないと思うが、どうしたのだろうか。精神はそのまま記憶だけ無くなった?だとしたら僕を見て笑う事はない、よな?

「どうしたの?呼び方戻ってるけど」

「……その、なんで、ここに居るの?」

「えっ?」

その時の詩乃ちゃんの顔は、本当に困惑している顔だった。心の底から、「何故ここに居るの?」と思っているようで、少しショックを受けてしまう。居てはいけないのだろうか。

「なんでって、友達でしょ?」

「とも、だち?……でも、私は、貴方の顔を……」

嗚呼、詩乃ちゃんは、自分が僕の顔を撃つたと自覚しちゃってたのか……出来たらし

て欲しくなかったが、まあ、どうせバレていたか、カウンセラーか刑事さんの口から聞いていただろう。

「いいんだよ。まあ、とつても痛かったけどね？」

でもさ。ほら！見た感じ、それ程大きい傷じゃないでしょ？それに、もう治ったし、痛くないよ！

もう治った傷の事は、いいよ。傷跡も気にしてない。そんな事より、僕は詩乃ちゃんが心配なんだ」

詩乃ちゃんの目を覗き込み、そう言う。数秒詩乃ちゃんがフリーズし、また、ポツリと言葉を零した。

「……………」
ごめんささい

「もー……………はい！笑ってー！」

そして僕は笑う。

僕はカウンセラーでもセラピストでも精神科医でもないの、詩乃ちゃんの精神を治す方法なんて知らない。けど、詩乃ちゃんはいつも、僕が笑っていると笑ってくれる。その笑顔は様々だけど、いつも幸せそうに笑ってくれる。僕はその笑顔が大好きで、またその笑顔が見たくて。

カウンセラーにもセラピストにも精神科医にも出来ない、僕なりの詩乃ちゃんの「治

し方」をする。

「詩乃ちゃん！」

「……何？」

「これからも、よろしくね！」

そう言つて、今度は僕から詩乃ちゃんを抱き締める。ビクツと体が震え、恐る恐るというように、詩乃ちゃんの腕が僕の背中に回された。まだ弱く、抱き締め返されているというより、触れられているという方が近い。

「私、柊君と……出雲と居て、いいのかな」

「うん」

涙を堪えたような、何かを耐えるような震えた声で、そう問いかけてくる。

「可愛くないし、感情表現出来ないし、色々変だし、全然出雲と釣り合っていないけど……」

「うん」

「……こんな私でも、良いの？」

「僕は、詩乃ちゃんがいいんだよ」

そう言つと、昨日同様、詩乃ちゃんが泣き出す。不安だったのだろう、ずっと考えていたのだろう。他の事が手につかないくらい、ずっと。

詩乃ちゃんを抱き締め、頭を撫で落ち着かせながら、僕は言葉には出さずに、ひっそ

りと心の中で何度も謝る。

僕は詩乃ちゃんに対して、謝らなければいけない事ばかりで、返せない恩ばかりだ。それは一生かかっても返せない程のもので、どうしたらいいのか分からない。

今はただ、詩乃ちゃんを宥め、心中で謝るとしよう。これ以上言葉にして謝ると、オウム返しで謝り合いになりそうだ。

詩乃ちゃんが泣き止む。今度は、眠ってしまった事は無かった。まだ朝だし、詩乃ちゃんも起きたばかりだと思うので当たり前だが。

泣き止んだ後でも、詩乃ちゃんは一向に僕を抱きしめる手を離してくれない。僕の胸に顔を埋め、ひしつと抱き締められていて、その力は段々と強くなってきている。もはや最初の面影はなく、ギリギリと音を立てているような気さえする。

「ちよ、ちよつと詩乃ちゃん？力強くない？」

流石にたまらんといい、詩乃ちゃんにそう言うのと、涙目の上目遣いでこちらを見てきた。何も言わないが、目で訴えている。まだこうさせる、と。そろそろ僕の背骨が逝きそうな気がしてならないが、小学生の身でそれはないだろう……ないよな。

「……ねえ、出雲」

「ん？何？」

グイッと引つ張られ、ベッドに押し倒される。どうしたの？と聞く前に、詩乃ちゃんの唇が僕の唇に重ねられた。

「ん——!?!」

やばい。突然の予期せぬ事に、頭がこんがらがる。どうしようどうしようと、その言葉しか頭に浮かばない。無理矢理押し返す事も出来ると思うが、はつきり言つて役得だ。しかし、いきなりしてきてどうしたのだろうか。そんな事を思っていると、今度は詩乃ちゃんの舌が口内に入ってきた。

「んっ……むう………」

口内を、詩乃ちゃんの小さな舌が蹂躪する。この状態では「弱者」の僕にはどうする事も出来ず、ただただ、詩乃ちゃんに暴力的に口内を犯される。

「れる……ふはっ」

「っはあ……はあ……詩乃、ちゃん？」

何秒、何分経つたか分からないが、あらかた犯し尽くしたのか、詩乃ちゃんの柔らかい唇が離れる。あれ程したのに、何処か名残惜しく感じてしまう。

僕の上に被さるように寝つ転がる詩乃ちゃんの顔は恍惚としており、至近距離で僕の顔を見ている。

「……好き。大好き。愛してるわ、出雲」

うわ言の様にそう言い続け、僕の唇や、傷が付いた頬、目、鼻、首、果ては服を捲りあげ、胸を舐める。抵抗する気力すらなく、ただひたすら理性と戦う。別にこのまま詩乃ちゃんを犯しても詩乃ちゃんは抵抗しないだろうし、むしろこのまま詩乃ちゃんが僕を犯しそうな勢いだ。どうしてこうなったんだ？詩乃ちゃんを元気づけに来たというのに、なぜ僕はその詩乃ちゃんに犯されそうになっている？全くもって、訳が分からない。

「ちよつ、と詩乃ちゃん。待って……！」

しかしやめてはくれない。傷付いた頬を、入念に、愛おしそうに舐めてくる。まだ治ったばかりのそこは、麻酔の反動なのか、他と比べて少し敏感になっている。

「好き……好き。愛してる、愛してる、愛してる。出雲……出雲……出雲お」

「ダメ……え」

言葉では抵抗するも、僕の体は、詩乃ちゃんを受け入れ始めている。このまま行くと、完璧にR18ルートだ。だがやはり動けない。まるで自分の体ではないようだ。

やばい。それしか頭に浮かばず……そんな事を考えていると、詩乃ちゃんの舌が止まった。扉の方を凝視している。

「……チツ」

小さく舌打ちをして、最後にキスをされて、椅子に座らされた。なんとかバランスを

保ち、息を整える。袖なんかで顔に付着した詩乃ちゃんの唾液を拭いていると、扉が開いて、詩乃ちゃんのカウンセラーと思わしき人が入ってくる。

これからカウセリングを始める。との事で、僕は病室から退室するよう言われた。ふらふらとした足取りで病室の扉に向かう。詩乃ちゃんは、カウンセラーをキツと一睨みし、「また明日ね！出雲！」と満面の笑みを浮かべてこちらに手を振ってきた。

「つう、うん。また明日」と、曖昧な返事しか出来ない。

……明日から、どうすればいいんだろう。

詩乃ちゃんに、「好き」「大好き」「愛してる」と、その他にもたくさん言われ、様々な所を舐められ、触られた。いや、愛されている事はとても嬉しいし、その「好き」が決して家族や友人に向けるものでもない事も分かっている。

「……はあ」

羞恥と疲れから、項垂れる。まさか、立ち直つてから、あんな急激に好感度が上がるとは思わなんだ。元々高かったのが爆発したのか？それだつたら嬉しいが……ファーストキスが、あんなに激しく、しかも小学5年生の時に、つて、中々来るものがあるな……

その後、家に帰り、風呂で詩乃ちゃんの唾液を洗い流す。悶々とした気持ちと、発散される事のなかった掻き立てられた性欲は、自分で処理した。

柊出雲を愛している

何も手につかない。

事件の後、私は何もしたくなくなつた。食事すら手に付かず、最後にまともに栄養を取ったのはいつか覚えていない。現在は、点滴のようなもので栄養を補給している。

三大欲求の食欲、性欲、睡眠欲もまともに機能せず、もう何日も彼の物に触れていないにも関わらず、何も思っていない。

……彼の事を考えるのは、烏滸がましいか。私程度の人間が彼の事を考えてはいけない……もう、死んで、しまいたい。

毎日毎日、ベッドから窓の外を眺める。指一本すら動かさない。誰かが部屋に入ってくる音がしたが、どうせカウンセラーか誰かだろう。返答する必要は無い。

「……詩乃ちゃん」

気の所為、だろう。まだ私は彼の事を忘れられていないのか？ 幻聴すら聞こえるようになってきた。そろそろ、幻覚すら見えそうだ。勇気さえあれば、今すぐこの窓から飛び出した。

……私の手が、私の意志とは別に動く。それを感じたのは、私の手が置かれた、膝

の上。久しぶりに、窓の外以外……自分の膝の上に目を向けると、私の手をふんわりと包む優しい手が見えた。

「…………ごめん、ね」

彼の、声が聞こえる。嘘だ。そんな筈はない。彼がここに居るはずがない。そんな、考えつく限りの否定の言葉を出し、明るい現実から目を背ける。私は、明るい世界に居ては行けないのだ。彼を傷付けた私に、彼の優しさを受ける資格はない。

「…………い」

だが、いくら「私」が否定しようと、「本能」が彼を求める。私の体が、意思が、心が、全てが、彼を求める。

「…………い…………あ…………い…………」

乾いた喉が、必死に彼の名前を呼ぼうとする。ズキズキと痛むが、そんな事には構わず、何度も何度も。

私の空いた方の手が、彼の頬に触れようと伸ばされる。彼の右頬には、私が付けたであろう傷跡があり、それを見た瞬間、私の手は止まってしまった。

「大丈夫…………僕は、ほら。大丈夫だから…………ね」

そつと、彼の手が、空中で静止した私の手に触れた。それを機にまた動き出し、彼の頬に触った。

同時に、涙が込み上げてきた。色々な感情が、心中を渦巻いた。

「ごめん、なきつ……私……ッ！」

謝つても、許される事じゃない。

そんな事は分かっているが、謝らなければ気が済まない。いや、謝つても気は済まない。彼の美しい顔に、一生残る痛々しい傷跡を付けてしまったのだから。

「大丈夫……大丈夫だよ……」

それでも彼は、尚もその優しさを私に与える。いつもと変わらない笑みを浮かべ、慈愛の瞳で私を見つめる。彼に撫でられ、気が昂り、彼を抱き締めてしまう。してはいけないのに、自然と、まるで息をするように抱き締めてしまった。

彼はそれをつっぱねる事はなく、それが、また私の涙腺を刺激した。

その日、私は人前にも関わらず、大声で情けなく泣き叫んだ。「恐怖」だったり、「愛」だったり、「困惑」だったり、「不安」だったり、「安心」だったり、言い出したら限りがないくらいに感情が溢れた。

次に気が付いたのは、その日の夜だった。

翌日。

冷静になつて考えて、やはり彼と一緒に居てもいいのか考える。

片や、人気者の格好いい天才。片や、他者の記憶にすら残らない凡人。普通に考えて、関わる事の出来る関係ではないし、関わる事を許されていないとも言える。

いくら一人で悩んでも、答えは出ない。

「おはよう、詩乃ちゃん」

今日も、昨日と同じ眩しく優しい笑顔を浮かべた彼が、私の病室へとやってきた。

嬉しく思うと同時に、罪悪感がこみ上げてくる。

「……おは、よう。柊君」

私がそう言うと、彼はポカンとした顔になる。

「どうしたの？呼び方戻つてるけど」

……やはり、彼は優し過ぎる。それが他者に取つて毒となつているとも知らずに。

その毒に侵されるとどうなるか、私はよく知っている。何故なら、私自身がその毒に侵されてしまったからだ。

「……その、なんで、ここに居るの？」

「えっ?」

これは、私の心の底からの疑問だった。昨日は、まあ、カウンセラーか誰かに行つてやつてくれと言われて、嫌々来たのかもしれない。今日、来ない可能性すら考えていた。もし今日彼がこの病室に来なかつたら、私はこの窓から飛び降りて肉塊となつていただろうが。

何故、彼は私にそこまで拘るのだろうか。彼が探そうと思えば、私より断然可愛くて、素直な人等星の数程見付かるだろうに。なんで……彼の「友達」の資格を失った、私に……

「なんでつて、友達でしょ?」

「とも、だち?……でも、私は、貴方の顔を……」

これには、驚愕の感情で心中が埋まった。彼がまだ私の事を「友達」と思ってくれている事に……

普通ならば……例え成人した大人であろうと、自分を撃ち、大事な顔に傷をつけた人間と、「友達」で居られるはずが無い。

「いいんだよ。まあ、とつても痛かつたけどね?」

でもさ。ほら!見た感じ、それ程大きい傷じゃないでしょ?それに、もう治つたし、痛くないよ!

もう治った傷の事は、いいよ。傷跡も気にしてない。そんな事より、僕は詩乃ちゃんが心配なんだ」

……呆れて言葉も出ない。彼は私を嫌う所か、私を心配していたのだ。

私を助ける為に強盗犯に立ち向かってくれたのに、私は彼の頬に癒えない傷跡を付けてしまった。恩を仇で返すような事をしたのに、咎める事なんてせず、尚優しさを与える。

例え神であろうと、彼の心には適わないだろう。

「……………」
ごめんなさい

「もー……………はい！笑って！」

しかし、私の表情筋は動かない。どれだけ笑おうとしても、その口角が上がる事は無い。

彼の顔が、少し不満げな表情になる。それを見て、私は目を伏せてしまう。

「詩乃ちゃん！」

彼の、楽しそうな声が聞こえた。

「……………何？」

素っ気なく返す事しか出来ない私に、嫌気がさす。

「これから、よろしくね！」

……今まで見た彼の笑顔のなかでも、トップクラスの笑顔だった。絵画にして売れば、高値が付くだろうと予想出来るくらいなの。

心が、揺らいでしまった。

「私、終君と……出雲と居て、いいのかな」

「うん」

涙が込み上げる。しかし、零さない。

私は彼の物だ。いつだったかは覚えていないが、私はそう決心したのだ。

もし……もし！彼がまだ私が必要だと言うのなら……私は……

「可愛くないし、感情表現出来ないし、色々変だし、全然出雲と釣り合っていないけど……」

「うん」

尚も彼は笑う。

「………こんな私でも、良いの？」

「僕は、詩乃ちゃんがいいんだよ」

間髪入れずにそう言われ、思わず、涙が溢れてしまった。ここ2日で、もう一生分の涙を流したような気さえする。

私の心が、今度は、「愛」で埋まる。私の全てが彼の全てをどうしようもなく欲している。

彼が、私を包む。彼の存在を感じる。温もりを感じる。匂いを感じる。鼓動を感じる。

彼は、私を抱き締めたまま、ただひたすらに泣き喚く私の頭を撫で続けた。

やがて私の涙は止まった。だが、私は彼を離さなかった。私自身信じられないくらい
の力で、彼を未だに抱き締めていた。

「ちよ、ちよつと詩乃ちゃん？力強くない？」

目を上げると、苦笑した彼の顔が目に入る。この時、既に私に「理性」なんて無粋な
物はなかった。

「……ねえ、出雲」

「ん？何？」

一言声をかけ、彼の声に酔いしれる。彼の襟首を掴んで、ベッドに引き倒す。もう我
慢出来ない。私の中に溢れる本能が、「満たせ」と叫んでいる。体がはち切れそうだ。

そして私は、彼の唇を強引に奪った。

これがファーストキスではない。彼は知らないだろうが、既に何回か……いや、何十

?何百?そんなのは覚えていないが、彼が寝ている内に、唇を合わせるだけのソフトなキスをした。

しかし、今までの^{ソフトキス}で満足する程、私の本能は生易しくなかった。私の舌が彼の口の中に入り、歯や舌を強引に舐め回す。その1秒1秒が愛おしくて、至近距離で映る、困惑した彼の顔も愛おしくて、今現在の全てが愛おしくて。

何度も何度も、彼の口内を犯し、息が続かなくなったら、今度は彼の体を舐める。「キス」というのは、愛する人に敬意や愛を伝える為の行為だそうだ。それならば、何度でも、いつまでも、何処でだってやってやる。今日から私が死ぬまで、1秒足りとも彼を愛おしく想わない時はない。

私が傷跡を舐める度、彼は体を跳ねさせる。最初はこの傷跡の罪悪感のせいで、それだけでストレス死しそうだったが、今は愛おしく感じる。私が付けた、彼が私の物という「証」になるのだ。

ああ……ああ……!

私はもう、彼の「毒」に全てを奪われた。

彼なしでは、1日足りとも生きては行けない。

もう、彼と離れられない。

下腹部が熱くなり、濡れる。彼の何かを求めて、きゅんきゅんとしている。だが、一

体どうすればいいのかわからない。

「好き……好き。愛してる、愛してる、愛してる。出雲……出雲……出雲お」

彼から、「やめてくれ」との声が、何度もかかる。しかし私はわかつている。彼が口でそう言おうとも、それが本心ではない事に。

現に、彼の体は私を求めている。私が彼なしでは生きていけないのと同じで、彼も私なしでは生きていけないのだ。

永遠に……そう。来世も、来々世も、来々来世も、私は彼と共に生きるのだ。いつまでも……いつまでも。

……誰か、来る。そう私の感覚が言った。

一体誰だ？私と彼が愛し合っているというのに、無粋な奴だ。

「……チツ」

今の状態を見られるのは、宜しくない。彼のこの姿を見ていいのは、世界で私ただ一人なのだ。他の有象無象になんて、見せていいはずが無い。

名残惜しいが、彼をベッドから下ろし、近くの椅子に座らせる。椅子から落ちそうだったが、なんとか体勢を立て直したようだ。

そのすぐ後に女が入ってきて、彼は追い出されてしまう。「有象無象が彼に話し掛け

て！」と思い睨み付けるがそいつが気付く前に、すぐに彼に笑顔を向けて、また明日と伝える。

ああ、明日が待ち遠しい。

早く彼に会いたい。

……所で、なぜ私の股は濡れてしまうのだろうか？

彼と……「そういう事」をしてる時、大体こうなってしまう。

毎回毎回、どうすればいいのかわからず、疲れて眠ってしまう。

よく調べておかなければ……

高校生編

朝田詩乃と暮らそう

先日、中学校を卒業した。今は……なんとすべきか、休憩期間的なものだ。そして今、詩乃ちゃんが僕の部屋に来ている。

……まあいつもの事なんだけど、今日は大事なお願いがあるらしい。何となく予想はついているが……

「出雲」

「なんだい詩乃ちゃん」

原作同様、僕のと似たようなデザインの度なし眼鏡を付け、私服で女の子座りの詩乃ちゃん。

あの忌々しい事件から既に4年程経っている。詩乃ちゃんにPTSDは出ていないようで、時たまテレビでやっているアクション映画などを見ても吐き気を催したりはしていない。

「さつきも言ったけど、お願いがあるの」

「うん」

「……私と一緒に、東京に行ってくれないかしら？」

「ここはやはり変わらないか……いや、変えるつもりもないが。今現在、この街で詩乃ちゃんに良からぬ噂がたっているのは知っているし、それでいつも一緒にいる僕にも飛び火しているのも知っている。詩乃ちゃんも知ってるだろうし、原作と理由は違えどこの街から出ていく事はほぼ確定していたと言える。」

「ああ、いいとも」

「ありがとう。そこでなんだけど、実はもう家は取ってるの」

「うん？なんだか雲行き怪しいぞ？」

「も、もう？」

「ええ。今から行くこうと思うのだけれど、どうかしら？」

「いや、そんな眩しい笑顔で言われてもな……」「一緒に東京へ」までは分かるよ。ちよつと予想（という名の期待）してたけどさ。応じたら「じゃあ今すぐ行きましょう」とか（予想出来）ないでしょ？」

「え、いや、その、家族に話とか」

「もう私からしてあるわ」

「……お金」

「もう1ヶ月分は貰ってるわ。後は毎月仕送りしてくれるそうよ」

「荷物は……」

「纏めてあるわ。私のも、貴方のもね」

八方塞がり。手回しが早いよ詩乃ちゃん？僕の荷物とかどうやって纏めたのさ。先に部屋にいたからびっくりしたけど、そういう意味だったの？

「今から？」

「ええ、すぐに」

最近……ではないな。あの事件が終わった後辺りから、詩乃ちゃんは積極的、というか開き直った感じが否めない。常にくっついてくるし、もう風呂にまで突撃してきた。最近では慣れてきたので、毎日ではないが一緒に風呂にも入っている……あ、やましい事はしてませんので悪しからず。

まだ付き合ってもいないのだが、そこらの付き合い合ってるカップルより仲がいいと確信して言える。詩乃ちゃんは「好き」やら「愛してる」やらをたまに言ってくるが、僕は未だに答えられていない……訳では無い。本当だよ？

1度だけ「僕も愛してるよ」と言った事があるのだが、目の色が変わって冗談抜きで僕の貞操が奪われそうになった。そうだよ、もう性知識付いてるもんね。

流石の僕でも気付く。詩乃ちゃんはヤンデレって奴だ。病んでいる事には気付いてたけど、まさか「ヤンデレ」とは……

それでもいいけどさ。詩乃ちゃんがどうなるうが、僕は詩乃ちゃんの側に居るだけだし。

「わかったよ。それじゃあ行くうか？荷物はどこだい？」

僕がそう言うと、今度は詩乃ちゃんがポカンとした表情になった。

「……素直ね」

「詩乃ちゃんと暮らせるのは純粹に嬉しいからね」

少しだけ頬を赤らめる。風呂にまで突撃してきて、お互い色々な所を知っている筈なのに、まだ何処か初^{うぶ}なんだよなあ……

纏めてもらってた荷物を受け取り、両親に別れの挨拶をして東京に向かう。数時間の電車旅を経て、着いたのは原作と同じアパート。少し狭い気もするが、聞いてみたら「狭い方が近くに感じられるじゃない」と真顔で返されたので、追求しない。

高校が始まるまではまだ時間があるので、それまでは詩乃ちゃんとの同棲生活を楽しむとしよう。

「出雲、朝ご飯出来てるわよ？ほら、早く起きなさい」

「ん……」

朝7時、詩乃ちゃんに優しく起こされて起床する。家事はほぼ折半だが、少しだけ詩乃ちゃんが多い。最初は詩乃ちゃんが「全部私にやらせて」と言ってきたが、流石に悪いと思ひ折半にした。だが、少しだけ詩乃ちゃんが多い。詩乃ちゃんが全部決めたので、わかたてやっているとと思うが……まあ、本人が望むなら良いだろう。

「早く起きなさいってばー」

「待つて……後少し……」

「まったたく……」

詩乃ちゃんが僕の上に跨り、唇を合わせる。最初はソフトだったが、キスされても（慣れてるので）寝ぼけ眼の僕を見て、更に激しく僕の唇に吸い付いて来る。

流石にこれは起きるので、詩乃ちゃんの肩を押して起き上がらせる。

「やつと起きたの？ご飯冷めちゃうわよ」

「……ああ、うん。わかった」

詩乃ちゃんは真顔のまま、唇から垂れる僕のか詩乃ちゃんのか分からない唾液を手で軽く拭きながら、ベッドから起き上がってキッチンへ向かって行った。

慣れてはいるが、この幸せは慣れそうにないし慣れたくない。詩乃ちゃんみたいな美少女（強調）に、毎朝おはようのキスをされるのは。

僕もベッドから起き上がり、ベッドの前にある小さな机の前に座る。部屋の形はほぼ原作と変わってなく、机が少し大きくなったぐらいだ。ベッドは共用、夜は一緒に寝ている。

別で寝ようよと提案した事があるが、マジで、アレはやばかった。貞操云々の前にやばかった。語彙力が落ちるレベルで。ヤンデレ目でなんか色々言われた。ごめん記憶の端に追い込んだからよく覚えてないんだ。

「いただきます」

「ん。いただきます」

朝ご飯を食べ、食べ終わったらベッドで横になる。今日の洗い物当番は詩乃ちゃんなので、僕はゆっくり……

「……洗い物は終わったの詩乃ちゃん？」

「ええ」

洗い物が終わったらしい詩乃ちゃんが、ベッドにスルスルと入ってきた。少しだけ濡れた詩乃ちゃんの手が、僕の頬に触れる。

「ダメ」

近付いてくる詩乃ちゃんの唇に手を当てる。

「……まだなにもしてないじゃない」

「キスするつもりだったでしょ」

「嫌なの？」

「嫌じゃないけどさ……少し自重して欲しいかな。四六時中して飽きないの？」

「貴方さえいれば飽きないわよ。何処で何やっててもね」

うーん。嬉しい。嬉しいんだけど、愛が重い。潰れそう……

ヤンデレも詩乃ちゃんも嫌いじゃないから、いいんだけどね。

しばらく2人でベッドに横になり、お互いの体温を感じ合う。詩乃ちゃんがやたら体を僕の体に擦ってくるのだが、気にしないでおこう。あ、ちよ、ここではやめて。

スツ……と詩乃ちゃんが立ち上がり、トイレに入って行く。

……今度、芳香剤をトイレに置いておこうかなあ……

二度寝し、起きたら手が、縛られていた。なんてこった。パンナコッタ。

時計を見れば、現時刻は11時程。外はまだ明るい、カーテンが閉められ電気は消

され、部屋の中は少し薄暗い。

「出雲が悪いのよ」

何処からか現れた詩乃ちゃんが、ベッドの横に立っている。自然と、額に汗が垂れ、縛られた手足を外そうと動かす。

「無駄よ。簡単には取れないよう縛ったわ」

「……なんで、とは、聞く必要は無い？」

「わかってるならね」

あ、オワタ（確信）

率直に言おう、僕は無事だ。目立った傷もないし、貞操も奪われていない。強いていえば、ロープの痕が少しある程度。

あの後、案の定詩乃ちゃんは僕の貞操を奪いに来た。このままじゃやばいと思ったので、「手だけ外して貰える？」と頼んで外して貰い……その、なんだ……

イかせました、はい。

まだ初な心のある高校1年生と、前世は大学生（直前）の現世高校1年生だと、いくら相手がヤンデレだろうと人生経験の差で僕の方が優勢。

詩乃ちゃんが服を脱ぎ、いざ行為となった所で詩乃ちゃんの動きが止まったのは助かった。止まったというか、ヘタレたというか……

……ヘタレた詩乃ちゃんは、攻めから一転して守りに入る事になった訳だ。あの時はあれ以外選択肢はないように思えたんだよ……手荒いのは嫌だし……

「んん……」

僕の横で服を着ずに眠っている詩乃ちゃんが、起きたようだ。外はもう暗い、このまま朝まで寝てて欲しかったよ。

「出雲……?」

「何? 詩乃ちゃん」

頭を優しく撫でてあげると、顔を真っ赤にして毛布を被ってしまった。キスは恥ずかしくなくても、行為に及ぶとなるとやはり恥ずかしいか。

まだ僕童貞だけど。え? 前世はどうだったのか、だって? ハハ! よく覚えてないんだよ! (すつとぼけ)

「……今度は、私が出雲を気持ちよくするからね」

「あぁ……アハハ……」

詩乃ちゃんがヘタレたとか言ってたけど、結構僕もヘタレたのかも知れないな。
あのまま詩乃ちゃんを受け入れてしまっても、良かったのかもしれない……

朝田詩乃とアミクスファイア

高校が始まった。

つい先日、高校の入学式を終え、今日から本格的な授業が始まる。詩乃ちゃんと同じ部屋に住んでいるので、遅刻はしない。羨ましかろう。

「……同じクラスじゃないじゃない」

「そうだね。ちよつと痛いから腕の力緩めて」

僕はB組で、詩乃ちゃんはA組。家から絡めてた腕が、優しく包んでいたのに、クラスが違うのを見ると強くなった。僕に当たって貰っても困る。このままじゃ教員室に突撃して直談判しそうなので、僕から止めておくよう伝えると、渋々と言ったように了承した。するつもりだったんだね。

「あ、詩乃ちゃん」

「何？」

クラスの前で（名残惜しいが）別れる直前、もう1個伝える事があった。

「クラスのみんなと仲良くね？」

笑ってそう伝えると、苦虫を噛み潰したような顔になった。表情から「嫌だ」って感

情がひしひしと伝わってくるが、目で訴えると小さく頷いた。

その日の放課後、校門で詩乃ちゃんを待っていると、詩乃ちゃんが走ってきて、僕の背中に隠れた。

「どうしたの?」

「……」

詩乃ちゃんが指差す所を見ると、1人の男の子が走ってくるのが見えた。その人は初対面だったが、見知った顔だった。

原作ヤンデレくんこと、新川恭二くんである。

「待って……速い……」

「何度言えばいいの? 付いてこないで!」

「いや……だから」

「出雲以外の生物は話し掛けないで！」

あっ……（察し）

「ごめんね、名も知らない君、ちよつと待ってて？」

詩乃ちゃんを連行。なにか言いたそうな新川くんを校門に待たせ、近くの曲がり角を曲がった所の壁に詩乃ちゃんを押し付ける。

「……」

「……」

「……んっ」

「なんでそうなるの」

壁ドン（壁に手を付いている訳では無いが）して、詩乃ちゃんの約束を破った（仲良くね云々）弁明を聞こうと思ひ黙っていると、真顔で唇を突き出してきたので、手で抑える。

「悪かったわよ……でも、私のせいだけじゃないわ。彼も彼よ。話を流したのは悪かったけど、肩を掴んでくるんだもの」

「そこら辺はしつかり本人と話そうね？だから、真っ向から否定するのはナシ。OK？」

「……わかった」

原作で、詩乃ちゃんと新川くんがどういいう出会い方したのか知らない（忘れた）けど、

とりあえず原作と違うのはわかる。原作詩乃ちゃんだろうと「いきなり話しかけて、流したら肩を掴んできた」なんて混乱するだろうし。理由にもよるが、仲良くなる確率は低い。ある程度節度と常識を持った原作詩乃ちゃんでもこれなのに、うちのヤン詩乃ちゃんならもつと酷い。

校門に戻る。新川くんはしつかりと待っていて、僕らを見つけて安心した顔をした。

「よかったー。帰られたかなーと思っちゃったよ」

「そんな事はしないさ。それで、詩乃ちゃんになにかようなのかい？」

「いや……これ」

新川くんの手に乗っていたのは、生徒手帳。そこに記された名は「朝田詩乃」で、ハツとした詩乃ちゃんがカバンを漁っている。

「……」

「詩乃ちゃん？」

「ごめんなさい……」

落し物を届けてくれただけのようだ。新川くんに礼と謝罪をすると、どもりながらも「どういたしました」と答えてくれた。原作では危険型のヤンデレなので、まだ付き合っていないといいのかわからないが……

「というか、授業初日からよく生徒手帳落とせるなあ……」

「落し物届けてくれただけじゃないか？」

「うっ……」

「まあまあ……僕は大丈夫なので……」

新川くん……その笑顔だと、ますます好青年にしか見えないよ。「アサダサンアサダサンアサダサンアサダサン」は何処へ？

「だかしかし！新川くんにはあまり関わらないでおこう。原作で新川くんが詩乃ちゃんにどんな事をしたのか、忘れた訳では無い。ぶっちゃけ今の新川くんみたいな子は好きなので、是非友達に欲しいのだが、そのメリットを含めてもデメリットの方が大きすぎる。最悪の場合、死人が出る。」

……死ぬのは新川くんの方なんだけどね。言っちゃ悪いが、新川くんが詩乃ちゃんと戦っても詩乃ちゃんが勝つ気がする。なんかこう、意思的な問題で。」

「えーつと……生徒手帳、ありがとね？」

「は、はい」

帰ろう。今すぐ帰ろう。幸い、新川くんはまだ詩乃ちゃんに対してそういう感情は無いらしい。一目惚れとかされてたら、危なかった。主に新川くんの命が。」

「あ、そのまえに」

いや、待って。

「名前、教えてくれませんか？」

これ、あの、神の力とか働いてないよね。無理矢理にも新川くんと関わらそうとしてない？絶対嫌だよ。友達になんてならないからね！ツンデレとかそういうんじゃないわよ！

「僕は、新川恭二。よろしく」

「……柊出雲、だよ。こっちは朝田詩乃。今年入学したんだよ。よろしく」

うん、それじゃあ永遠にさようなら（願望）

「ねえ、出雲。アレ」

新川くんと別れ、2人の家へと向かっている途中、詩乃ちゃんがGEO（隠せてない？し、知らないよ）を見つけ、表にデカデカと書かれた文字を指さしている。

『次世代型VR《アミューズフィア》今日発売！今なら《アルヴヘイム・オンライン》か《カ
ンゲイル・オンライン》のどちらかのソフトも付いてくる！』

「VR、ねえ」

ちなみに、この世界でもいわゆる「SAO事件」ってのは存在した。僕自身SAOに
そこまで興味はなかったので、わざわざ頑張つて初回1万ロッドのナーヴギアを入手し
てデスゲームに入ろう、なんて思わなかった。

僕と詩乃ちゃんの間「SAO事件」の話が上がった事はそんなに無く、同じ国で起
こった大規模な「誘拐事件」であるにも関わらず、気にした事もなかったし、どうにか
出来ないかとも思ったことが無い。

心がないのかー。と思われるかもしれないが、僕には詩乃ちゃんが居ればいいし、詩
乃ちゃんも、僕が居れば良い………と思つてるといいなあ。

「詩乃ちゃん、VRなんて興味あつたの？」

「ちよつとだけね。あるヴへいむ？つて奴と、がんばっている？つて奴がどんなのかわから
ないけど、「完全仮想世界」って、やつぱ少しは気になるじゃない？」

一理ある。G カンゲイル・オンラインアルヴヘイム・オンライン OもA L Oも、普通に遊べば何ら問題は無い。《死銃》デス・ガンについ

ての懸念はあるが、原作とは違つて「強さ」への執着心がない詩乃ちゃんを、死銃が標
的にするかは分からない。

「……欲しい?」

「でも、高いわよ?」

「僕達、お互いの両親から仕送り貰ってるから、結構浮くんだよね。将来に備えて貯金しようかなと思ってたんだけど、娯楽も必要だよ?」

「将来に備えて」の所で目を伏せてしまったのは可愛かった。思わず抱き締めたくなったが、僕が調子に乗ると詩乃ちゃんも調子になり、歯止めが利かなくなるので大人な僕（ ）が我慢する。流石に外は、ね。

GE○に入り、アミュスフィアの在庫を確認すると、どうやら残り3機だったらしい。危なかった。

「良かった……あの、それで、ソフトなんですけど」

GG○でもALOでも、詩乃ちゃんが行きたい方で良いが、「出雲が決めて」と言われたらALOを選ぶ。やはり1%でも死銃に狙われる可能性を考えると、楽しく平和に遊べるALOがいい。

「あー。それがですね。もうソフトの在庫がGガンゲイル・オンラインGOオンラインしかなくて……ALOは人気で、ついさつき無くなってしまったんですよ」

「そ、そうですか……なら、GG○でお願いします」

「分かりました!……あの、ALOの次回入荷は未定ですが、HPホームページを見ていただければ、

入荷予定が見れますので、そちらをご参照ください」

「ああ……」親切に、どうもありがとうございます」

店員さんの親切を受け止め、アミスフィアとGGOを持ち家に帰る。やはり、原作……というか、GGOには関わる運命にあるのか。まあB・o・Bに参加しなければ何ら問題はないし、参加したとしても死銃に近付かなければ大丈夫だろう。

……いや待て。前回（強盗事件）はその軽率な考えと行動で失敗したじゃないか。いや、結果オーライとかそういうの抜きで。

やはりやらない方が……

「出雲、ゲームの話とか全然しないから、あまりゲーム好きじゃないのかなと思ってただけど、好きだったのね。一緒にゲームが出来ると思うと、嬉しいわ」

あっ（察し）無理だこれ。断れない奴や。この笑顔を前に断れる人間は居ない。オワタ。

朝田詩乃とゲームをしよう

アミユスファイアを手にならず部屋へ帰り、アミユスファイアを準備する。

僕は制服から短パンとTシャツという、ラフな格好に着替える。今日は少し肌寒いが、いいだろう。脳を使えば暖かくなるはずだ。

……あ、脳を使う前に暖かくなりそう……

Tシャツとパンツの僕よりラフな格好になった詩乃ちゃんを見て、顔が熱くなる。

よくあるような、パンツも隠れるくらい大きなTシャツではない。ちなみに、僕と詩乃ちゃんのTシャツは共用である。だから「そ、それ僕のTシャツじゃ……ッ！」とかはない。いつもの事である。

「……」

ベッドに座る僕に、ツンとした顔で、猫のように四つん這いで近付いてくる。猫耳と尻尾を幻視する。

ポスツと隣に座り、アミユスファイアをいじくり始める。ベッドは1つしかないのだから隣の隣り合わせでやる事になるが……何時間もくっついていて、大丈夫だろうか……汗とか凄そうなんだけど。

「?どうしたの?早くやろ?」

「ああ……うん、そうだね。やろつか」

アミユスフィアを被り、マニュアル通りに起動する。

いやー。1度言ってみたかった!

「リンク・スタート!」

「……キャラクターかあ」

まずキャラクターを決めるのだが、GGOはランダムで、変えるなら課金しなきゃいけない、つて感じだったかな……

流石にそれは悪いので、一発勝負で!

「えいや」

どんな容姿になるかなあ……とワクワクしながら、仮想世界へと降り立つ。

目の前が光り、その光が無くなると、アニメでも見た……ぐるっけん？だっけ？そこにいた。「おおおおお！」と感動しながらキョロキョロしている、近くの柱に腰掛ける、水色の髪の女の子が目に入った。

「シノン！」

詩乃ちゃんの近くに走りより、名前を呼んで肩を叩く。すると驚いた顔をして、頭の上にクエスチョンマークを浮かべた。

「出雲よね」

「そうだよ！」

「なんで私が「シノン」って名前にするって分かったの？」

ギクツと肩が震える。その間に答えるのなら、「原作を知っていたから」だが、馬鹿正直にそれを言う事も出来ない。詩乃ちゃんがリアルで「シノン」って名前にするつもりなんて言っただけじゃなかったし……

「……し、詩乃ちゃんなら、安易な名前にしそうだな……って……思っ……」

くっ……これは辛いかな？

「……よく分かっているじゃない。安易で悪かったわね」

ふう。何とか分かったが、拗ねてしまった。後で埋め合わせをしようとしようと、すぐに微笑を浮かべてくれたが……笑顔では無かった。

さて、僕のGGOでのキャラクターはどんな……

「こーれーはー……っ？」

「ん？ キャラの確認してなかったの？」

鏡に映るのは、女（？）だった。そう、あくまでも女（？）なのである。もしかりにこの姿が女であつたとしたら、「いや俺男だからー」をگری押せば「ああ……そう言われると男……？」って感じだ。

言うなれば女よりの中性顔。流石にキリトくんみたいな姿ではないが。ネームカードを確認すると、どうやらこの姿は「M8600系」というものらしい。

……キリトくんって、なんだったっけ？ Mは「male」のMだと思うから、M○○○○系だつたと思（ryどうでもいいや。

「声も若干それらしいわね。ネカマでもやったら？」

「やらないよそんなの……」

キリトくんと思わぬ所で親近感が湧きそうな姿になつてしまった……。

「それじゃあ、とりあえず歩きましよう……えっと」

ああ、そつか。まだ詩乃ちゃんに名前を伝えていなかつたね。

「シユウって名前にしたよ。「柎」の別読みだね」

一般的とは言えないが、「柎」という漢字を「シユウ」と読む事がある。主に名前の時

とかに使われる……というかそれ以外の使い道知らないなあ。

その後、武器がないと始まらないので武器屋へ向かったのだが……皆さんお察し、お金が無いのである。

「あ」

「うん？どうしたの？」

資金面どうしようかなーって考えてたら、さつきからメニュー画面を色々弄ってた詩乃ちゃんが何かに気付いたようだ。

「ねえシユウ」

「何？なんかいい案思い浮かんだ？」

パツと僕の目の前にウィンドウが現れる。特に開いたりしてないんだけどな、思ったら、そこには

《Sinon》から《結婚》を申し込まれました。受けますか？

yes/no

「oh……」

GGOに結婚システムってあったんだ。原作では触れてなかった（と思う）から知らなかったな……いやいやそんなことより

「え、結婚？」

「そうよ」

「こういうのって、ほら。ムードとか、男からとか……」

「わざわざ「結婚システムがあるから貴方からして」なんて言うの？馬鹿らしいわね。それにこれはゲームよ。リアルで結婚する時は、もうちよつとムード考えるわ」

「そ、そう……」

結婚する事は確約されてるんだね……

yes を押し、「《Sinon》と《結婚》しました。おめでとうございます」と表示された。その後、ヘルプから《結婚》というシステムについて調べる。

《結婚》システムについて

メリット

どちらかが経験値を得ると、パートナーは経験値の2割が貰える（片方は10割、パートナーは2割で、その分経験値が減る訳では無い）

アイテム・資金が完全共有化され、プレイヤーに倒された場合のドロップ確率が減少する。

《結婚》している者限定のクエストやアイテムを手に入れる事が出来る。

《倫理コード解除》が可能になる。

パートナーの位置が常にマップ上に映し出され、把握できる様になる。

デメリット

《結婚》した瞬間からアイテム・資金の完全共有が始まり、アイテムや資金に《鍵》をかけることが出来なくなる。

それに伴い、どちらかが他プレイヤーにキルされた時にドロップするアイテムがパートナーの物の場合もある。

別々のスコードロンに入る事が不可になる（片方がスコードロンに入った場合、そのパートナーがそのスコードロン入らなければいけない訳では無い）。別々のパーティーへの参加は可。

パートナーをキルしてしまった場合（故意かどうかは問わず）、共有資金の3割と共有アイテム5つが《消滅》する。（《消滅》とは、ゲームそのものからの消滅を指し、ゲーム内に個数制限のある武器又は防具が消滅した場合、サーバー上から削除され2度と手に入らなくなる）

異性との2人パーティーが組めなくなる。

尚、《結婚》システムは、1アカウントにつき2回まで行えます。

《離婚》システムについて

結婚している状態で

メニュー→ヘルプ→その他→結婚

の順で行くと、

現在○○と《結婚》状態です。

と表示されます。そこで右上にあるヘルプへ行き、一番下へスクロールすると《離婚》の文字があります。その文字をタップすると、《離婚申請をしますか？ yes/no》と表示され、yesを押しした場合、パートナーに《○○から離婚申請が来ました。承諾しますか？ yes/no》と出ます。そこでパートナーがyesを押しした場合のみ、《離婚》が決定します。

資金は完全に折半ですが、アイテムのみ一時的に《共有ストレージ》と《ストレージ》の2つが現れ、自分のアイテムを移すことが出来ます。《共有ストレージ》は発生から24時間で中のアイテムごと消滅します。

長々と読んだが、そんな感じらしい。

問題ないな。あつても既に結婚したし関係ないが、信頼し合っている関係ならメリツトが大きい気がする。

「それで、なんだっけ……資金？」

「え、聞いてなかったの?」

どうやら、メニニュー弄りに夢中だったらしい。詩乃ちゃんそこまでゲーム好きだったかなーと頭を捻るが、詩乃ちゃんと詩乃ちゃんの周りに多大な影響を与えた、本来存在しない僕がいるのだ。原作とどう変わってようが、不思議ではない。もしかしたら原作から大きく変わる点もあるのかもしれないが、今の所はない、と思う。

「資金ね……地道にやっついていくしか、無いのかしら?」

「うーん……そうだねー」

キリトくんみたいな、並外れた動体視力とか持ってたらなあ……僕の取得と言ったら、水泳が上手い事と身体能力が他と比べてちよつと高いぐらいだが……転生する時に、テンプレが如く特典を貰った方が良かったのだろうか?

資金を工面する方法は結局見つからず、地道に集めていこうとなった。

初期金額の1000クレジットしかないので、あまり大きな物は買えないが……フィールドにいる雑魚程度なら、狩れると信じてたい。

朝田詩乃とGGOの生活

武器屋にて軽い武器を買い、1度僕だけリアルに戻って序盤するべき事を調べる。

攻略サイトによると、序盤は地道にモンスターを狩って資金を貯めたり、そのモンスターのドロップアイテムで防具を作ったりしていくらしい。GGOでは「初心者狩り」というものはあまり存在しないようで、理由としては「アイテムがしょぼい上にマナー違反」と書いてあった。恐らく、前者が本音後者は建前だろうが。

「……おい。詩乃ちゃん」

アミュスフィアを被ってダイブ中の詩乃ちゃんに声をかけてみる。返事なんてしないと分かっているが、なんとなくだ。

毎日一緒のベッドで寝ていたり、たまに風呂に乱入してきたりするので、顔を身近で見ると腐る程あるが、まじまじと見たのは久しぶりかもしれない。普段は何かとグイグイ来るし、夜は僕が先に寝て詩乃ちゃんの後に起きるし。

プニプニとほっぺをつねってみたり、指を弄ってみたり。流石にR18タグを入れなければいけないような所は触らない。一線は越えてはいけない（謎の使命感）

「そろそろ戻らないと」

《シユウ》の体は詩乃ちゃんに預けているので、早く帰らなければ。指弄ったり顔むむにしたりするのは、別に起きてる時でもいいや。

「よいしょつと……リンクスタート」

「ん……？」

「起きたの？随分遅かったわね」

目が覚めたのは、ログアウトした時、そして結婚した時もいた「マーリン」という名の店。リアルでいうファミレスのようなどころだ。ちなみにアーサー王伝説のマーリンとは関係ないらしい。

「まあ……ちよつとね。」

「なにか分かったの？」

「序盤はモンスター狩るしかないってさ。簡単な狩場も書いてあったし、そこ行ってみようよ」

僕と詩乃ちゃんは銃の名前すらろくに知らない。銃器に関しては素人も素人だ。本

当は使い方や立ち回りを教えてくれる先生のような人がいるといいんだが、高望みはできないか。

それから暫くして、僕と詩乃ちゃんはある程度強くなった。

詩乃ちゃんは先日、FR—F2というスナイパーライフルS Rを買い、僕は銃を調べていた時に一目惚れした、P—90というパーソナルデیفエンスウエポンP D Wを買った。GGOでは「R M T」という、簡単

に言えば「ゲームのお金をリアルのお金に変えることが出来る」というシステムが備わっている。アミューシアの月の使用料は3000円程度だが、それを取り戻せるくらいには成長した。と、言ってもギリギリだが。赤字ではない程度で、決して黒字ではない。

……まあ、GGOのクレジットで払っている訳では無いが。

「ねえシノンちゃん」

「なによ。早く帰るわよ」

「こんな所にこんな扉あった？」

いつも狩りをしているダンジョンに来て、その帰り。いつもは壁だったはずの場所に、なにやら黒い扉が出来ていた。

入ってみようと提案するが、詩乃ちゃんは嫌がる。罾だと警戒しているのだろうが、冒険せずして何がゲームか！と思ひ有無を言わさず扉に入る。

扉が閉まり、辺りに明かりがつか。中々広く、今の所モンスターやプレイヤーは見え
ない。

詩乃ちゃんが原作で使っていたスナイパーライフル（名前は忘れた）の獲得イベントだろうか？と思ったが、雑魚モンスターがスポーンした時にその考えは無くした。原作では大型ボスを倒していたと思うので、違うだろう。

「やつぱり罾じゃない……いつもので行くわよ」

「うん」

いつもの。というのは、僕が前衛で戦い、スナイパーである詩乃ちゃんが後衛で僕のアシストをする、というのだ。僕は僕より後ろにモンスターが行かないよう暴れ周り、詩乃ちゃんは僕にたかるモンスターの頭を確実に撃ち抜いていく。

出てきたモンスターは雑魚中の雑魚。詩乃ちゃんのSRでH^{ヘッドショット}Sすれば体ごと爆散するし、比較的威力の低くレート重視のP-90であっても、数発当てれば倒れる……だが、如何せん数が多い。ゆうに数百は倒れているというのに、視界いっぱいモンスターが広がっている。

そんな事が数十分程続き、僕の弾が無くなりかけた頃、やっとモンスターのスポーンが途絶えた。

つまりは、今ここにいるモンスターを倒しきれば終わりという事だ。

「ぐっ……シノンちゃん！大丈夫!？」

「私じゃなくて前見なさい!」

詩乃ちゃんはSRの弾をとくに切らし、ハンドガンとナイフで応戦している。僕のP-90も後ワンマガジンしかないが、敵も少ない。後少し踏ん張れば!

こんなに苦労したんだ……いいアイテムの一つでも寄越さなければ、クレーム入れてやるぞ!

「ギギイ……」

最後のモンスターの顎にナイフを突き刺し、その体をポリゴン片へと変える。体力消費とはまた違った疲労感が僕を襲い、地面に膝を付く。詩乃ちゃんも、肩で息をしながら

ら壁に寄りかかっていた。

ピロン。という音と共に、僕の目の前にウィンドウが現れる。そこには先の戦闘で手に入れたクレジットと経験値、ドロップアイテムが表示されていた。

「……………ん？」

その中の一つに、目が奪われた。ドロップアイテムの一つに記された名は、「P—90（プロトタイプ）」。

あまり知られていないが、「P—90」というものは2つある。現在の形のP—90と、そのP—90の元となったプロトタイプだ。銃を調べる過程で偶然知っていたプロトタイプが、まさかGGOに存在しているとは思わなかった。

ストレージに送られたP—90プロトタイプを呼び出す。現実にあつたプロトタイプよりも少し大きめで、アタッチメントは何もついていない。重量的にも問題はなし。

「何、それ」

僕の手にある、形状が銃というよりは松葉杖に近いプロトタイプを見て、頭を捻る。僕も初めてプロトタイプを見た時は、「松葉杖？」と思ったものだ。

「P—90のプロトタイプ……………GGOにあるとは思わなかったよ」

今後は、このP—90プロトタイプを使っていこうかな……………と心の中で決意し、いつの間にか空いていた部屋の扉をくぐって宿屋へ帰る。

僕がプロトタイプを手に入れ、暫くして……様々な事があつた。まず、家とジープを買つた。GGO以外にこれと言つて趣味のない僕と詩乃ちゃんは、毎日のように狩りを行つていたので、資金面は問題なかつた。前言つたように、クレジツトで払つてゐる訳では無いのでクレジツトは必要経費(弾や回復アイテム)以外使つておらず、余りに余つていた。

ジープは完全に僕の趣味だ。乗つてみたかつた、というだけだが……詩乃ちゃんには、「なんでも一つお願いを聞いてくれるならいいわよ」という許しを貰つた。少しでもろじやなく怖いのが、ジープに比べれば……うん……

次に、僕達に二つ名が付いた。

これはあまり嬉しくない。二つ名が付いたせいで、街を歩いたりするだけでひそひそされたり、プレイヤー狩りに狙われたりする事が多くなつた。

僕についた二つ名は【狂人】。非常に不愉快極まりない二つ名である。前衛で暴れまくる姿と、P-90プロトタイプなんて狂つた姿銃らしからぬをしているから、らしい。付けた奴をぬつころしたい。プロトタイプの何処が狂つた姿なのだ。

詩乃ちゃんことシノンちゃんは、原作通り「氷の狙撃手」。由来は原作と変わらず、氷のように冷徹な狙撃手だから、らしい。

そしてどうやら、僕と詩乃ちゃんのコンビにも二つ名があるらしく、それが「審判者」^{ジャッジメント}。これは許せない。ぬつころす所じやなく、リアルにぶち殺したい。何処の厨二病だ【審判者】って。僕と詩乃ちゃんはいったい何をどう審判すればいいのだ？

この名を知ったのは、GGO関連のあるサイト。プレイヤーランク的なものも付けているらしく、僕と詩乃ちゃんのコンビこと【審判者】はどうやら他者から見てトッププレイヤーの一角らしい。平穩には言わないが、積極的にPKしていた訳では無いのに、どうしてこうなった？

後詩乃ちゃんが「ウルティマラティオハカートII」という、恐らく原作で詩乃ちゃんが使っていたSRを手に入れていた。いつの間にか？と聞くと、いつの間にか。と返された。

GGOを始めてから、8ヶ月程度でそこまでするとは思わなかった。

そして今日、12月7日。

「やつほーダイソくん」

「遅かったな」

僕が辛うじて覚えていた、原作の日である。

朝田詩乃とベヒモス

「それで、相手さんはまだ来てないの？」

今日ここに集まったのは、原作の通り、スコードロン狩りである。名前は忘れたが、情報外のミニガンを持つ奴がいるというのは覚えていた。

今、僕達はそれを知り得る方法がないので、ダイン達にそれを伝える事は出来ないんだが……

「来てないが……おっと、話をすればって奴だな。来たぞ」

索敵していたパーティメンバーの見ていた方向を、双眼鏡を取り出して見てみる。

「7人……？ねえ、先週は6人だったんだよね」

「ああ、先週は確かに6人だった。1人増えてるな。顔も装備も見えないが……ん？《ミニミ》持ちがいる。実弾に持ち替えてきたか。なら、第一目標はこいつにしよう」

ダインの言葉を聞いて、詩乃ちゃんが伏射姿勢になり、スコープを覗いて目標を確認する。詩乃ちゃんはここから狙撃、僕達は下に降りて地上で戦闘になる。

僕達地上部隊が下に降りようとすると、詩乃ちゃんが声をかけてくる。

「……あの男、嫌な感じがする。最初に狙撃したい」

「何故だ？大した武装もないのに」

「根拠は、無い」

「……………いや、ミニミがやはり厄介だ。第一目標は変えない。第二目標をマントの男にしてくれ。可能なら、でいい」

納得はしているが、ダイン他に言われて頷くのが嫌なようで、渋い顔をしている。僕の方を見てきたので、ニコツと笑ってあげたら、一瞬歯ぎしりして溜息をつき、目標に目を向ける。

「ほら、ダイン行くよ」

「あ、ああ……………」

引いたような顔のパーティメンバーを連れ、地上に降りる。ああいう顔しちやうから、あまりパーティやスコードロンに誘われないんだよ……………

そのお陰か、大半のプレイヤーに声をかけられないのは嬉しいが……………

下へ降り、シノンちゃんの合図を待つ。

僕達は既に配置に付いており、目標を視認している。

「……勝てるかな」

「なんだ？ 《審判者》ともあろう方が、弱音とはらしくないな」

「次その名前で呼んだらその首はね飛ばすからな」

ミニガン持ちがいると分かっているのに、不安なのは当たり前だが、勝てる勝てないは別問題だ。

原作では確か詩乃ちゃんがアイツを倒していたが、今回もそうだとは限らない。

「ざつきシノンちゃんも言ってたけど、嫌な感じがするんだよ……僕も根拠はないけどね」

「お前もか？……確かにそこまで言うなら気になるが、不確定要素だからってだけで、優先する事は出来ないな」

ダインの判断は、リーダーとしては正しい。アイツがミニガン持ちだと分かっていたなら、ダインの選択も変わったのだろうが、それはifの話であってどうする事も出来ない。

『撃つわよ』

シノンちゃんからの合図を聞き、僕達も気を引き締める。

聞きなれた轟音が通信で聞こえ、敵の実弾銃持ちの上半身が吹き飛ぶ。同時に僕達が

飛び出し、敵と交戦する。

敵が持っているのはブラスタードで、圧倒的に実弾を持つ僕達の方が有利だ。

戦闘において、実弾は対人、ブラスタードは対モンスターというように定められており、ブラスタードが撃つ弾は防護フィールドによってほぼ無力化する事が出来る。

普段ならば、こちらの勝利は確実である……一つの不確定要素によって、その確実な勝利は揺らぐ事になるが。

敵の横に出て、P-90で撃ちまくって殺し、リロードした後ミニガン持ちに銃口を向けたら、既にミニガンを構えていた。

あ、しくった。

「っー！」

慌てて横に飛び、ミニガンの射程外に逃げる。ミニガンはその重量故、即座に方向転換する事が出来ない。先程いた場所が穴だらけになるのを見てヒヤツとしながら、逃げる。

「シノンちゃん！」

『何？』

「僕がアイツを引きつける。10秒くらいしか持たないと思うけど、大丈夫？」

『……………3秒で大丈夫』

頼もしいな……

アイツが僕達を探してキョロキョロしている時、丁度目が合うように飛び出し、銃口が向いたらまた物陰に隠れる。を繰り返し、シノンちゃんに背を向けるようにして、柱に隠れる。

ミニガンの弾で削れていく柱を振動で感じる。もう周りに物陰がないので、動けない。

『……』

シノンちゃんの息を呑む声が聞こえ、発砲音。ミニガンの音が消える。柱から顔を覗かせると、アイツが爆散する瞬間が見れた。

「ナイス」

『ん』

その後、ダイン達と軽く話した後、ログアウトする。ちなみに、名言(?)である「せめてゲー（ry）」は聴き逃した模様。僕が頑張ってた時に話してたんかワレえ。

さて、原作よりシャキッと（ピネガキ並感）倒してしまった。まあ、問題は無いだろうが……

朝田詩乃と999本の薔薇

解散後、各々の宿屋やホームに戻り、ログアウトする。お互い長時間くっ付いていた上、ベヒモスとの戦闘で汗をかき色々どろどろしよどろしよである。

「お風呂、入ろっか」

「う、うん」

詩乃ちゃんがベットのうえでいきなり脱ぎ始めるから、少しビクつとする。汗で髪が肌にくっつき、下着のみとなって色々隠せていない今の詩乃ちゃんの姿を見ると、無意識に顔が赤くなってしまう。

「あら？私で興奮してくれたの？」

くすりと笑って、服を持ち脱衣所に歩いていく詩乃ちゃんの後ろ姿を見ながら、一線を超えてしまうのもそう遠くない出来事だろうという事を直感で感じる。

「早く来なさいよ」

あっ…（察し）

この後無茶苦茶綺麗にした。

風呂上がり。シャツとパンツという実にラフな格好になり、今はリビングで詩乃ちゃんの髪をドライヤーで乾かしてあげている所である。詩乃ちゃんはカーペットの上に座りながらテレビを見て、僕は一心に髪を乾かしている。サラサラで、シャンプーのふわっとしたいい香りが漂い、顔を付けて思いつきり鼻から息を吸い込みたい欲望に駆られる。毎度の事だがいつかしてしまおうだろうなあと思う。今日も耐えられそう。

「ありがたい。もういいわよ」

気付けば髪はしっかり乾いていたようだ。ドライヤーの電源を切り、いつもの場所に仕舞おう……としたら、腕を掴まれる。

「たまには私にも乾かさせて……ね?」

僕の髪を乾かしてくれるらしい……こんな事は今まで一度も無かったので、ちよつと嬉しくなる。僕は普段髪を乾かすような事はせず、自然乾燥を待つタイプだし、ドライヤーも詩乃ちゃんの為だけに購入した物だ。

「本当? 助かるよ。ありがとう」

僕が先程詩乃ちゃんの座っていた所に座り、詩乃ちゃんが僕の座っていたベットの

に座る。

……が、中々ドライヤーの風の音がしない。

「詩乃ちや（ry）」

詩乃ちゃんの名を呼んだ瞬間、ハンカチのような湿った布が口に当てられる。僕の体がだらんと力無く垂れ、意識も遠のいて行く。デジヤブを感じながら、眠るように目を瞑った。

目を覚ます。眠る前と、何も変わっていない部屋。手足は縛られていない。すこし体全体が痺れている感じはするが……本当に、ただ眠らされた……だけ、では、ないよな。

「あ、起きたのね。じゃあ、始めましょうか」

「待って」

「何よ」

あつ、おい待てい（江戸っ子）生まれのままの姿じゃないか。たまげたなあ。

……えっ？下着も着てないの？というか僕も着てないじゃん。つうかガン勃ちじゃん。あの言葉はフラグだったのか……

「何したの」

「何って？」

「何吸わせたの？」

「簡単に言えば、軽い筋弛緩剤と強めの媚薬よ」

「やっ、やめ、ヤメロー！」

「犯す気だな！ヤンデレ甘く見てた！なんで!?なんでこのタイミングなのさ!？」

「え、えーと、なんで今日？」

「それを言うと、ニコニコしていた詩乃ちゃんの顔がスツ……と真顔になり、久々に詩乃ちゃんに恐怖心を感じる。」

「私はもう限界なの。私以外の人と話すのも、見るのも、考えるのも、全部許してきたわ……けど、もう無理……出雲。私は貴方を愛してる。誰よりも、何よりも……貴方の命令なら何だって聞かし、貴方になら何をされようとも構わない。めちやくちやに犯されてもいいし、体を売って金を稼げと言われたら、どんな人が相手でも体売る。」

「……愛を囁いたり、誘ったり、キスしたり、添い寝したり、一緒に風呂に入ったり……いつも最初は、私からだった。貴方からそういう事をしてくれた事はある？ないわよね？今こうやって、貴方とsexをしようとしているけれど、それはわたしが薬を盛ったから……もし私が薬を盛らなかつたり、一切誘ったりしなかつたら、貴方はいつ

葉を実感する日はないだろう。

「貴方が起きるまでに、もう準備はしておいたの……挿^い入れるわよ……？」

耳元で囁かれる詩乃ちゃんの良い言葉と、耳に侵入してくる舌。脳が溶けるような感覚がして、何も考えられなくなり、そして………

翌日、お互い学校を休んだ。

第3回 B・o・B編

朝田詩乃と原作主人公

やあ。なんだか久しぶりな気がするね。

いつも通り、詩乃ちゃんと共にGGOを起動する。

「今日はどこ行く?」

「そうねえ……あつ、そうだ(唐突)前からしてみたかったのだけれど、この街を探検してみない?」

随分と子供っぽい事を言うものだなあ……と心の中で苦笑すると同時に、確かにそれはいい案かもしれないと思った。

GGOは一般的に言われるオープンワールドゲームであり、オフラインプレイというものがない。つまり、遠い場所や裏路地なんかは「行こう」と思わなければ、行く機会もなければ意味もないのだ。

その癖作り込まれているので、マップを歩き回るだけでも面白い。

そして、探索を進めているうち……

「はぐれた」

はてさて。はぐれたのは僕なのか、シノンちゃんなのか……結婚している故の機能である、パートナー位置表示を見てその方角に歩いていっているが、いかせん先程言ったように作り込まれているので、グダグダグダグダ、グダグダグダグダして一向に会える心配がない。上下もあるので、目視で見つけても降りる階段がわからなかつたりする。もどかしい！でも飛び降りるのは怖い！

「あの一……すみません。ちよつと道を……」

うん？なんだ？こんな裏路地に女の子なんて居（ry

……スウー……ハア……

お初にお目にかかりますな。原作主人公キリコちゃん。

マジカー！そっかー！はぐれた辺りで「もしかして原作なのでは？」とは思ってたけど、まさか僕の方に来るとはなー！

今詩乃ちゃんが1人だから、そっちの方に行ってるかと思ってたー！

「……あー。うん、いいけど……（原作的に）大丈夫？」

「へ？（あ、もしかして俺の事女性だと勘違いして心配してるのかな……）あ、ああ。大丈夫ですよ」

（詩乃ちゃんの反応）怖いなー。怖いなー。

まあ、僕はキリコちゃん realism が実はキリトくんなのは知っているから、大丈夫でしょ。樂觀視と言われても否定出来ないけど、ぶっちゃけ原作主人公に会えて少し興奮してる。

「このゲームは初めてかい？ さっき始めたの？」

「はい。つい先程、他のゲームからコンバートしてきて始めました」

「そっかあ……それじゃあ、このゲームの通貨や武器もないんだよね？ いつも僕達が行ってる武器屋行こうか。」

「ありがとうございます（僕達……？）」

「……」

原作で詩乃ちゃんが行った武器屋に行き、まずどの項目の武器を持つか考えるが……「最初のうちは、1000クレジットしかないから中古の武器でレベルの低いモンスター狩りとかかなあ。そうだなあ……1ヶ月くらいそれ続けてれば、アサルトライフルくらいなら運用出来ると思うよメインウエポンともなると、武器の維持費や弾代もかかってくるから、時間はかかるけど楽しいよ。そこからはプレイヤースキル次第だしね」

「い、1ヶ月ですか!?!……あ、あの、もつと簡単に、早く、クレジット? を稼げる方法とか……ない……ですかね?」

あ……なんだっけなあ……カジノ? だっけ? 原作でもあそこに向かった気がする

る……前世は「シノンちゃんまじかわええ」としか思ってたから、言っちゃなんだがキリトくんの事よく覚えてないんだよな……

「カジノならあるけど……」

「そこ行きましょう!」

と、言うわけで、やって来ました裏（大嘘）カジノ……!

「キリトくんって、前は何のゲームを?」

「ALLOをやりました。」

ALLO……ネコミミシノンちゃん可愛かったなあ。ALLOやりたいな……いつやろうか。とりあえず次のB.O. BまではGGOに専念したいなあ。

あ、自己紹介ぐらいは終えましたよ。

「あーALLOかあ。あれも楽しそうだよねえ。GGOが落ち着いたらシノンちゃんと始めてみようかな……それじゃあさ、運で一発逆転を狙うか、自信があるなら実力で大金をもぎ取るか!どうする?」

「そうですね……実力で大金をもぎ取ります!」

「お、おとお……やるねえ。そんじゃ……」

辺りを見渡し、いい感じに参加料が安い実力機を探すと、「Y o u！ガンマンから逃げチャイナY o！」（仮）を見つけた。ちょうど挑戦者が現れた直後だったので、「あれ見てやるか決めなよ」と指さす。

結果から言うと、失敗である。キリトくんは弾道予測線の事を教えたり、クリアすると30万クレジット全額バックな事を言つて驚かれたり。

「つまりは、弾をかわしてガンマンに触ればいいわけですね？」

「そうだけど、氣い付けなよ。近くなるとインチキ早撃ち3点BURSTしてくるから」「はい！」

うむ！元氣な返事でよろしい！流石は食べ盛りの男子高校生なだけはあるな！僕もだけど！

「あ、いた。いきなり離れるんですもの。心配したわよ」

「あやや。見つかった」

お互い場所わかるんだし、見つかるのは当たり前前つちや当たり前前だけどき。

「こんな所で何をしているの？カジノなんて、滅多にやらないじゃない」

「さつき迷子の初心者の子に会つてね。案内を頼まれたから、こうやってレクチャーしていたわけさ」

事実である。嘘はついてない。

「……それで?なんでここに来るのよ」

ジト目になる。まだキリトくんことキリコちゃんの事はバレてないか……よし、帰ってくんな原作主人公オ!今考えたらやべえ!あ、でも、男だよーって、僕気付いてたよーって言ったら大丈夫……だよ、な?

「いやー。ほら。初期金額じゃん?そんで、なんか早めに強くなりたくらしくって、手っ取り早く金稼ぎたいって言ってたからここに」

「貴方も鬼畜ね。カジノなんて、クレジツト溶かすもんじゃない」

「まあー自信あつたし大丈夫じゃない?」

僕のクレジツトじゃないし(外道)

そんな事をシノンちゃんと話していると、大音量のアラームと共にガンマンが発狂し、家が金をドバーツ!と出してきた!

「お?お?」

「シューウさー……ん!!私!!やりました!」

おお!やったな!来んな!

「ありがとうございます!30万クレジツトGETです!」

「マジか……凄いな君……全く見てなかったけど……」

ごめんよごめんよ。最後のインチキ3点BURSTとか、どうやってかわしたのか凄

い気になるけど、まっつったく見てなかったよ。シノンちゃんがかawaiiのが悪いんやで。わっつい悪くないで。

「ねえ、シユウ。それ、女よね？浮気かしら？」

「え……あつ（察し）え、えつと、その。違うんです！」

「なんだなんだ何を言う気だキリトくんや。面白そうだから黙つとこ。1回は会いたいシチュエーションだね。」

「何が違うのかしら？シユウから誘うなんて思えないし、貴女が彼を誘ったのでしょうか？初心者で迷子なんて、彼の良心を揺るような汚い誘い方をするものよね。あの実力機をクリアする時点で、初心者じゃないじゃない。まあ貴女みたいなクソビッチはそうでもしないと彼に振り向いてもらえないものね」

「クソビッチ……!?だ、だから違うんですつてば！クリアしたのは、コンバートだからです！えーつと、その……私は……いや、俺は！」

「もういいわ。2度と私の「夫」に近付かないで頂戴」

「ちよおつ！だからあ！俺はア！男だ！」

「……はア？」

「なんだい？そんな「こいつどうしようもないクサレビッチ女郎よ。帰りましょう」みたいな顔しないで貰えるかな？」

でもそろそろ可哀想になってきたなあ。ネタバラシしよっか。

「シノンちゃんや。彼が男なのはマジな話やでー」

「……………何言ってるの?」

「まあまあ、そんな目しないのー。あれは公式の男の娘アバターだよ。よくネットで高額のGGOアカウントが売られているだろう?アレなんかが売られてるんだよ」

「信じるわ」

「マジか」

「なんとか…………いやなんとかじゃないか。普通にネタバラシ成功。キリトくんもホツとした模様。」

「っていうか、シユウさん!俺が男だつて気付いてたんですか!?!」

「まーねー。ガチのネカマさんか、そういうプレイが好きな変態さんなのかなって」

あーうあーと唸つて頭を抱えてしまった。シノンちゃんもキリトくんが男の娘だと知り安心した模様。

しかし相手が男とは言え自分より優先された事で、嫉妬しているらしい。

「モチツケツ!」

「つかないわよ…………それより、30万クレジット手に入ったのでしよう?さっさと武器買ってあげないと、B・o・Bエントリー出来なくなるわよ」

ああ〜！忘れてたアア！

ってマジじゃん！そうじゃん！あ、いや、間に合う……でも武器選んでたらギリかな……うぬぬ。ここまで来たら最後までキリトくんにつき合っただけが……

確か原作では……覚えてないな……でもシノンちゃんが、キリトくんの運転するバイクの後ろに乗って、クツソカーわいい！！！！（デビルマン並感）笑顔を浮かべているシーンは覚えているぞ……！

ちよつとキリトそこ変われ（当時の心境）

「B. o. B……御二方も参加するんですか？」

「まあね」

「……参加して欲しくない、って言ったら、参加をやめてもらえたり……」

「いやー……理由がなければ、なんとも」

「理由は話せません」て……僕は知ってるけどさ。キリトくんや、それで「じゃあ参加やめるかー！」なんていう人いないと思うんや。

「それじゃあ……そのB. o. B、俺も参加したいです！エントリー方法教えて頂けます？」

「……貴方ねえ。コンバートとは言え、まだこのゲーム始めたばかりかでしょう？そんなのでB. o. Bは難しいんじゃない？」

せやで。

原作の都合上仕方ないとは思うがね……シノンちゃんには全面同意だよ。

さて、B・o・Bの話はとりあえず後回しにして、まずは武器を選ぼうか！

朝田詩乃とB. o. Bに出たい

「……ねえ、^{マジ}本当に買うの？それ。」

キリトくんのチキチキ武器選びレース（ポロリが欲しいよ！）ももうそろそろ終盤。見所がないからね。FN・ファイブセブン買ったくらいだし。

「えーでも、売ってるってことはそれなりに戦えるはずですよ。これでも」

どうせ某星戦争ファンのスタツフが、面白半分で入れただけだと思うけどなあ。

……待てよ。それならシユコーシユコーマスクも、何処かにあるのか……？

「とは言っても……フルオート相手にそれだけじゃ……もうお金もないわけだし。そりゃ、あなたの回避技術は凄いいけど」

「もう無駄だぜシノン。買っちゃまいやがった」

「はあ!？」

フルオート相手にそれだけじゃ辺りで購入ボタンを押ししていたゾ。付いてきてやってるのになんて奴だ……指導を受けたかつたんじやないのか？

「買っちゃまったもんはしょうがない。急いで総督府に向かおう」

しっかりと弾丸その他諸々も揃え、外に出たら割とヤバい時間。しかし！これは予想

の範囲内である！ふふふふふふ……出来る……あれが出来るぞお！……え？今までやったこと無かったのかつて？あるよ。あるけど、なんか違うやん。原作の再現的な興奮よこれは。

僕は意気揚々と言い出す。

「おつともうこんな時間だ。これは歩いても間に合わないんじゃないかア〜!?」

「何よその口調は……私達のジープで向かえばいいじゃない」

おおつとそれは言っちゃあいけねえぜ〜！あのジープは四輪だから背中に当たるナイスな美乳を感じられねえじゃあねえかア〜！

ジョジョ喋り疲れるなあ……あ、5部1話面白かったです。

「ノンノンノン。いいかい？あそこに何がある？」

「……レンタバギーね」

「つまりそういう事だ」

「は〜」

そう。そういう事だ（自己完結）

いつも乗ってるジープなんて、デカいし広いし改造してるから防弾窓装甲武器搭載エンジンジブーストなんでもござれのゴツゴツ車だけ！味気ないだろオ!?

「でもあのバギー、頑張って二人乗りじゃない。キリトはどうするのよ」

チラッとキリトの方を見てシノンが言う。傷付けてしまう事を恐れて、僕にだけ聞こえるように、小声で喋る。こんな気遣いも出来る僕の嫁は最高だって、はつきりわかんだね（再確認）

「運転、出来る？」

「で………きます」

何故少し溜めた!?ま、まあいい。乗れるって事の証明にはなるだろう。シノンの方を振り返ると、コクつと頷きOKサインがでた。

「よっしゃー！行こうぜ！ 時間もねえー！」

「わかったわよ………」

シノンちゃんの美乳を背中ではうは感じながら、「さっきはああ言ったけど、GGOの車の操作感になれてなくて事故ったりしたらどうするん？」ってシノンちゃんに聞いてみたら、「自己責任だから知らない」って言ってた。

僕は原作で事故らないって知ってたから言えたけど、割りとこのシノンちゃんは他者に対して淡泊だなあやっぱ。もう少し……所じやなくめつちや僕以外にも目を向けて欲しい。

総督府に僕達が着くと、ほぼ同タイミングでキリトくんも総督府に到着する。一応大まかな場所（あっち！程度）は伝えたけど、僕達の後ろを着いてきたみたいだ。

3人のエントリーを済ませ、近くのテーブルで一息つく。

この時、僕はまた一つミスを犯した。僕も、シノンちゃんも、個人情報を入力してしまった。

これが何を意味するのか、このとき入力していなければあの未来は回避出来たのか、そんなIFは分からないが……

少しでも可能性を落とすために、書かなければ良かった。その事に気付いたのは、すべてが終わったあとだった。

「シノンちゃんはGブロックかい？」

シノンちゃんはGブロック、僕はFブロック、そしてキリトくんもFブロック……はえ!?あれ、シノンちゃんとキリトくんの対一つて予選じやなかったつけ……あれ、本戦?本戦の最後?……あー。一発勝負して、引き分けて、お土産道連れグレネードでB。O。Bは大団円END……だっけ。思い出せねええー!

「ええ。貴方とキリトはFブロックか……」

「あ、あの。これだと、どちらか片方は本戦に出られないんじゃない？」

「んー？そんな事ないよ。この予選は、決勝まで勝ち上がれば本戦出場なのさ。だから、僕とキリトが決勝まで上がればいい。幸いトーナメント表を見る限り、当たるとしたら決勝戦だし」

それに、それぞれの予選優勝者だけだと、本戦が寂しくなっちゃうからね。

ドームにいた、シノンちゃん曰く「お調子者」達の間を抜けて、僕は男子更衣室へ、キリトくんも男子更衣室へ、そしてシノンちゃんも男子更衣し（ry

「いやおかしいよね。こっちじゃないよね。明らかにシノンちゃんはFemaleだよ
ね?! Maleじゃないよね?!」

「はっー！ついついいつもの癖で……」

「やめてー!」

GGO内の家でお風呂に入る時や、現実世界で服を脱ぐ時とか、いつも同じ部屋だからそれと同じ感覚なのかな!?

この時シノンちゃんは、男だとわかっていながらも、女に見えるキリトが「出雲と一緒の部屋で着替える」という事に僅かながら、嫉妬と憎悪が込み上げてきた事は本人しか知らない。

「やあ。こんにちは」

「お、よおシュピーゲル。あれ、お前出ないんじゃないか……」

更衣室から出て、予選開始まで暇を潰していると、新川改めシュピーゲルくんが応援に来てくれたとの事。

「全く来ないから心配したよ。遅刻するんじゃないか……」

そんな話をしてたら、いつの間にかキリトくんが淡い光に包まれ、消えていった。

そんな……！消えた……！あのお喋りなキリトくんが……！一言も喋らず……！消えていった……！なんて！人カイズを脳内でやってたら、僕とシノンちゃんも包まれ始めた。

「じゃあなシュピーゲル。応援よろしく」

「bye」

「うん、頑張つて、シノン、シュウ」

シュピーゲルのその声と笑顔を最後に、僕達の視界は光で埋め尽くされ、やがて消えた。

「ああ。もう。最悪だ。なんで僕は彼女を傷付け無ければいけないんだ。嗚呼、嗚呼、嫌

だなあ。
嫌だなあ」

朝田詩乃とB・o・B予選第1回戦「森」

眼を開くと、そこは森だった。

直径30cmはあるであろう太い幹をした木々が多く並び、まず考えたのは（詩乃ちゃんがこのステージだったらちよつと不利だったよなあ。）だった。いつでも最初に思い浮かぶのは詩乃ちゃんである。

「さて……と」

グレーの質素（に見える）なアーマープレートと太もも周りに着けた黒のマガジンポーチだとこの森ではよく目立つ。腰に装着したウエストポーチから緑のポンチョを取り出し、被る。これでカモフラは良しとしよう。

B・o・B予選は1体1で1×1kmフィールドで行われる。

俺の場合は森だったが、廃墟ビル立ち並ぶ高低差のあるフィールドだったり、アメリカの住宅街のような平屋が立ち並ぶ市街地フィールドだったりする。らしい。

まあ森はいい。足場は悪いが、P-90（P）（プロトタイプの略）使い接近戦AGI極振り構成の身としてはやりやすい事この上ない。

「……」

まずは索敵。その場に伏せ、周りをぐるりと見渡す。敵は見えない。当たり前だが、すぐ接敵する距離にお互いスポンンさせる程運営も馬鹿じやないだろう。なれば、まずすべきことは……

中腰になり、歩き出す。出来るだけ枯葉や木の枝を踏まないよう、しつとりとした土だけを踏み足音を立てないようにゆつくりと動く。1体1のガンバトルという性質上、そしてGGOのシステム上先に発見した方が先ず有利だ。先手必勝という訳では無いが、有利なことに違いはない。

B. o. B予選ではH P ヒットポイント回復アイテムは持ち込めない事になっている。戦いの長期化を避ける為だ。

そうしてしばらく歩いていると、

「……は？」

思わず声に出して疑問符が浮かんでしまう。何故なら、ガシャガシャベキベキグシャグシャと派手な足音が左前方から聞こえてきたからだ。

確信した。これは初心者ニュービーだなど。

1回戦目は楽勝かと思つて、極振りしたAGIをフルに使つて足音の方に向かう。もちろん出来る限りスニークして。

居た。

すぐに発見することが出来た。何故なら、俺のようにポンチョで偽装もしていなければ、掲げるとデカイマシンガンを隠そうともせず片手で銃口を上にしてキョロキョロと周りを見回していたからだ。

まだバレてないな。と思い、銃口を素早く敵の頭部に当てる。敵がこちらを視認していれば、弾道予測線は相手に見えない筈だ。

「(bye. Newbie)」

等とカツコつけ思いながら、トリガーに指を触れると同時に、バチンと視線が合った。不味い! と思い、すぐに射撃。毎分900発以上の弾丸が敵を襲うが、頭に2発当たっただけで避けられてしまった。

しかし、いくら5.7×28mm弾とはいえ、頭に2発も喰らえば相当なダメージだ。それに相手はポンチョすら持たないニュービー。無傷な僕がまだ慌てるような時間じゃない。

「見つけたぜえええ!!」

その声が聞こえた瞬間、弾道予測線が僕の居た場所を貫く。AGIをフル活用してバックステップで樹の陰に隠れた瞬間、ドガガガガガガ!! という激しい連射音と共に、俺がさつきまで居た場所を蜂の巣にした。

「ヒヤッハー!!! マシンガンを撃つのはやっぱりたまらねえぜえええ!!!」

という声と共に、未だマシンガンは炎を吐き続ける。

「おいおい！いつまで撃ち続けるつもりだア!?」

「弾が無くなるまでだよオオオオ!!」

ドガガガガガガガガガガ!!!

ドガガガガガガガガガガ!!!

ドガガガガガガガガガガ!!!

ドガガガガガ……ガチン

「やつと弾切れかこのハッピー野郎!」

「おおつとりロードタアイム!ちよいタンマな!」

「待つかバツキャロー!」

仕返しとばかりに、バツと樹から飛び出して弾丸でぐしゃぐしゃになった通り道を駆け抜ける。

幸い、さつきまでの爆射撃で枝や木の葉が飛び散り獣道のようなものが出来ている。その道を全速力で駆け抜け、直線上にあつた樹に回り込む。

「リロード完りよ……オ!?!」

のんきに銃を「く」の字にして新しい弾倉を込め終わって構え直そうとしていた所に、俺の飛び膝蹴りが顔面に炸裂する。

しかし、ことGGOに関しては「体術」によるダメージは殆ど期待出来ない。飛び膝蹴りによるダメージエフェクトは発生したが、それでヒットポイント全損までは行かなかったようだ。

「お前には俺のP-90（P）を使うまでもないねー」

「おオ!？」

GGOは数あるVRMMOの中でも、「痛み」。つまり、「ペイン・アブソーバー」というものが重く設定されている。つまりは、痛みを感じやすいという事だ。

もちろんナイフで切られたら本当に裂傷のような痛みが襲う訳ではなく、じーん……とした、強めの指圧ぐらいの痛みが襲う。これは銃でもナイフでも体術でも同じだ。ダメージ量に関係なく、同じくらいの痛みが襲う。

頭にそれを食らった相手はよろめき、銃と共に後ろに倒れる。P-90（P）をスリングで背中に回し、太もものマガジンポーチの後ろに隠されたカラビットナイフを取り出し、相手の首にすかさず切り込む。

「ぐえ」

そんな潰れたカエルのような声を出し、パタンと相手は倒れる。

「ふう……マシンガンのリロード速度だけは褒めてやる。ニュービーは撤回だな」

そう言った瞬間、転送が始まった。

次に明かりから目を覚ますと、元いた待機エリアに居た。まあ、勝ったから当たり前なんだが。

当然と言えば当然だが、シノンちゃんとキリトくんも居ない。シュピーゲルは少し離れた所でモニターを見ている。

「あんたはえーなー！」

「えっ？ ああ、まあ、相手が相手だったもので……」

待機エリアにいたやつに話しかけられたが、軽く受け流す。これは本当に相手が相手だった。倒しやすいやつと言っちゃ失礼だが、流石に1体1でマシンガン撃ちまくってロードタアイム！とか言つてその場でリロードし始める奴に負ける気はしないし、長期戦もありえない。それぐらいのトッププレイヤーに僕は居るのだ。

ボーツとモニターを見ていると、キリトくんが《餓丸》なる相手に光剣（ライトセーバーみたいなもの）でギャンギャン斬りかかり最後は胴体に一撃決めて終わる様を見

る。

やっぱ原作主人公T U E E E Eな。弾道予測線があるとはいえ弾を切るとかどんな反射神経だよ。

キリトくんが戻ってきて、キョロキョロしてるのを遠巻きに見つめていると、灰色ローブの男がキリトくんに近づく。

「(死銃か……さて、《事件》の時は上手く立ち回れなかった分、死銃に関しては……利用させてもらうぞ。キリトくん)」

暫く話し合い、灰色ローブの男が待機エリアの出口に向かう。

そして、顔面蒼白といった様子のキリトくんに話しかける。

「よっキリトくん。1回戦凄かったねえ〜」

「あつ?……あつ、ああ……」

「……どした?なんかあつた?」

あえて自然体に振る舞う。《事件》を上手く出来なかった事がちよつとした僕のトラウマとなり、第2の関門の死銃に関しては色々対策を考えてある。それを悟られないように。

「……どうかした?」

「おかえり。シノンちゃん。いやあ。なんかキリトくんの様子がおかしくて。さつき

ローブ被ったやつに話しかけられてたけど、なんかあつたん？」

「いや。本当に、なんでもないんだ……気にしないでくれ」

「まあ……そこまで言うなら。でも、アミユスフィアの限界ギリギリ！ つてくらい動揺してるぞ。とりあえずもちつけ」

だからもちつかないわよ。なんてシノンちゃんの言葉を聞き流しながら、ちらりと待機エリア入り口に目を向けると、件の「死銃」の赤い双眼がこちらを見据えていた。

その眼が語ることは一つ。

お前を————殺す

朝田詩乃とB. O. B 予選第2回戦 「刑務所」

「果てさて2回戦はいつ始まるかなあ〜」

なんて呑気に待っていると、動悸が収まってきたキリトくんがまず転送されて行つた。

B. O. B 予選は勝てば即2回戦に駒を進め、2回戦目の相手が決まり次第いきなり飛ばされるシステムだ。キリトくんや僕、シノンちゃんは比較的早く終わったから待ち時間が発生したが、長期戦闘になつた奴は勝つたら即2回戦なんてことになる。心労的にも早めに勝つておいた方がいいのだ。

「ふう。邪魔者は消えたみたいだね」

「うわつ。邪魔者は酷いんじゃない?」

そんな軽口を叩きながら、シノンちゃんと二人でカウンターに腰かける。シユピーゲルは未だに離れたところでモニターを見ているようだ。ぼっちかな?

「ねえ貴方。あのキリトつてやつ。決勝まで来ると思う?」

そんなシノンちゃんの問いに、俺は即答する。

「来るだろうね。間違いない」

迷わない即答に、結構驚いた顔をするシノンちゃん。

「随分とまあ……「買ってる」のね。男とは言え妬けるわ」

「ハハッ。実は1回戦を見てね。彼、弾丸を切って相手を倒してたぜ？」

「ハア!? 弾丸を切って!?!……そりゃ規格外ね……相手が可哀想だわ」

そんな風にイチヤイチヤしていると、次はシノンちゃんが転送され始めた。

「あら。じゃあね。んっ」

最後にほっぺにキスをされ、シノンの姿が消えた。

あゝ……僕の嫁可愛すぎ……

なんてことを思っていると、僕も転送が開始される。次は骨のある奴がいいな。なんて思いながら。

パチリ

「おお……?」

そこは、暗闇だった。

室内のようだ。あかりも窓もなく、うつすらとしか確認出来ないが、正方形の独房のような場所だった。これならポンチョも必要ないだろう。

さて……困ったな。

基本、AGI極振り構成は室内戦に弱い。その俊敏さを上手く活用出来ないからだ。加えて僕が使っているのはP—90……ではなく、P—90(P)。取り回しやすさがP—90よりも劣り、その松葉杖のような姿、長さはアサルトライフルにも引けを取らない。

「くわばらくわばら……」

どうか相手がサブマシンガン使いじゃありませんように。出来ればスナイパーだといいな。なんて樂觀視しながら、部屋を出て廊下に出る。

先程「独房のような」と言ったが、どうやら本当に独房らしい。

扉に「007」と掘ってあり、小さな窓が備え付けられている。今度のフィールドは刑務所だ。

GGOはアメリカ発祥のゲームだ。それ故、細かいディテールはもちろん、基本構成がアメリカ式だ。

日本の刑務所にもアメリカの刑務所にも入ったことはもちろんないので分からない

が、どうやらこの刑務所は1×1km正方形のフィールドに加え階数があるらしい。

これは長期戦になるか？接敵までに時間がかかりそうだ。

散策しながら見つけた階段の踊り場で、ある程度の地図が壁に貼っつけてあった。大
体を頭に叩きき込む。地理把握は戦術の基本の「キ」だ。

スタ……スタ……という、自身のソックススニーカーの足音だけが木霊する。これだ
け静かだとソックススニーカーでも足音が響くんだなあ。相手がブーツだったりした
ら即わかるなあ。なんて思つて歩きながら、1階まで降りる。

同じような牢屋を隈無く見て回り、敵を探す。

敵が見つからないまま、1分、3分、5分、10分、20分……

「いや全然敵見つかんねえな!？」

驚く程無音。静寂。全くもつて敵の気配を感じない。

1×1×0.3kmはある複雑怪奇な刑務所とはいえ、ここまですれ違ふとは。既に
場所は1階から3階に移っている。

3階のとあるドアを開けると、外廊下のようなところに出た。そこは中庭（バスケツ
トコートのようなものがある）を見下ろせる場所で、どうやら監視塔に繋がっているよ
うだ。

監視塔からなら見渡せるかもしれない。なんて歩を進めようとすると、ザツ……ザツ

……と言った足音が耳に聞こえてくる。

急いで歩くのやめ、その場に伏せる。中庭を見下ろすと、全身プロテクターの男（女かもしれない）が中庭の土を踏んでいた。

「見つけた……が」

見つけたはいいが、この場所からだとは攻撃しても弾丸は金網に吸われ、尚且つプロテクターを貫通することは出来ないだろう。7.62mmならまだしも、こちらは5.7×28mm弾。相手までの距離300m程だ。例え命中してもプロテクターに弾かれノーダメか良くて1割2割だろう。

「相手はどう動く……？」

中庭を突きぬけ、角まで来て、ぐるりと見回し始めた。窓の1個1個を確認し、俺のいる廊下をなぞり、監視塔を見て、再度銃を構え直し歩き出す。どうやらバレていないようだ。

フルプロテクターにSMGは勝てない。とGGOではよく言われる。何故なら、拳銃弾を多く使うサブマシンガンではプロテクターを貫通する距離まで近付けずにやられることが大半だからだ。フルプロテクターのデメリットはまずまず高い事や、視野が狭まること、重い事などが挙げられるが、こと防御力という点では優秀である。近距離でのハンドガン程度なら弾ける程に。

相手は1階の北側扉にゆっくりと姿を消す。

頭の中の地図を開きながら、相手の居る場所まで出来る限りバレないスピードで走る。階段はゆっくりと降り……

足音が階段下から聞こえてきた。

フルプロテクター特有のガシャガシャした音が響き渡る。

5階建てのこの刑務所の階段をゆっくり上がって来る相手は、もちろん、敵しかいない。

ソックススニーカーのお陰か、まだバレていないようだ。歩調に乱れがない。一定の速度でガシャガシャと階段を昇ってくる。それを、4階にあがる階段の所で待ち伏せる。

このまま上がってくるなら、奇襲ができる。

「(来い……来い………来たっ!)」

フルプロテクターの鈍色の光沢が現れる。どうやら3階に用があるようで、4階へ続く階段へは目もくれていない。これは予想だが、先程見回した時に俺がいた通路を見て、監視塔から相手を探そうと考えたのだろう。相手のメインアームは見た所64式7.62mm小銃 H&K(ヘッケラー&コッホ) HK33……アサルトライフルだ。まともにもやりあつてたらやばかつたな。

「よう」

と声をかけると同時に、背中に全力射撃。反動を何とか抑え、肩甲骨から首、頭にかけて弾丸をお見舞していく。

「ガッ!? アッ……」

気が緩んでいた所のあまりの衝撃に、相手は俺の声に反応するより前に倒れ込む。流石フルプロテクター。STR-VIT^{体カ}型のように、弾を50発撃ち込んでもプロテクターによる威力減衰によってHP全損には至らなかった。殆どは弾かれたと考えていいだろう。

「クッソ……この野郎!」

相手が起き上がり、こちらに銃口を向けると同時に4階へ続く階段をショートカットして上がる。ガガガッ!という銃弾を背に聞きながら、手早く2秒とかからずリロードし、4階の扉を蹴り開け走る。音からして、着いてきているようだ。

お互い膠着状態が長く続いたこともあり、痺れを切らしここで仕留めたがっている。すぐに顔を出すようなら今度こそ。

しかし予想に反して、相手は冷静なようで、扉から飛び出すようなことはなく、ゆっくりと僕を視認し、撃つ。

弾道予測線をなんとか避け、雑居房に飛び込む。

「やべえな……ベテランだ」

B. o. Bに出場を決めている時点でまあベテランだろうが、2回戦であそこまでの相手と当たるとは色々運が悪い。フルマガジンを撃ち込んでやったので、いくらST R—VIT型のフルプロテクターとはいえヒットポイントも7割か8割は削っているだろう。それなら、正面切つての戦いならこちらに分がある。と、信じていたい。

ガガガツ！ガガガツ！という子気味いいBURST射撃をしながら、ゆつくりとこちらに近付いてくる気配がする。ふむ。強いな。顔出しもさせず、このまま押し切るつもりか。特に守っていない頭部なら、7.62mm弾1.2発で僕は死ぬ。

このまま雑居房に入れば、やがてたどり着いた相手が牢屋の外から僕の体を余す事無く撃ち抜くだろう。

打開策は……いくつかある。その中でも最も勝ち筋に近いものを選ぶべきだろう。

左胸に付けた細長い筒を手に取り、壁に擦り付け点火。

そう。発煙筒だ。

BURST射撃が止んだ一瞬の隙間をダメージ覚悟で飛び出て、相手の顔面向けて発煙筒を投げつける。

フルプロテクターの弱点に、視野の問題があるとは先程語った。

それは何も、狭まるだけではない。サングラスのように、夜目が効かない、そしてそ

の逆……急激な明るさに弱い、という点がある。

「うだつー！」

赤く発色し煙を炊く発煙筒は見事に相手の顔面に当たり、射撃が止む。BURST射撃の何発かを腕と胸に喰らい、ヒットポイントが2割程減る。どうやら肺へのダメージ判定が生まれたった2発でこれだけ削られたようだ。

しかし、こうなったらもうこちらの勝ちだ。

油断も隙もなく、P-90(P)を構え、撃つ。こちらも煙でシルエツトしか見えないので、全弾発射。狙いは付けず、バレットサークルも気にしない。心臓はバクバクしていないので、体のどこかしらには当たるだろう。そして、相手のヒットポイントはもう多くて3割……如何な相手とは言え、計100発の弾丸を体中に受け無事ではすまなからう。

最後にガガガツと指に引っかかったままの64式7.62mm小銃 H&K HK
33が吠えたが、それは僕ではない空間に吸い込まれ、バタンと相手は倒れた。

「……………あぶねー！！！！」

そう叫び、勝利の余韻に浸る間もなく次のステージに転送される。

今度は待機エリアではなく、即座に第3回戦が行われることだろう。時間をかけすぎた。25分はかかっただろうか。充分長期戦と言える。

眩い光が体を包む

朝田詩乃とB. O. B 予選第3回戦「墓地」

パチリ

「……………は……墓地、か」

降り立った地は、まず硬質な石畳。そして英語で名前らしきものが書かれた十字の石が点在している場所。

考えるまでもなく、墓地であった。

所々にはこれから棺を入れます。というような穴ぼこ、何も入っていない棺などが転がっていた。もしかしたら墓荒らしなのかもしれない。

巨大な協会が中央らしき場所にそびえ立ち、その周りをぐるりと囲うように墓石が並べられている。

「こりやまたどーしたもんかね」

ステージ的には悪くない。所狭しと並んでいる訳ではなく、等間隔に、走って通れるくらいの間はある。優れたAGIを生かし走り回りながら弾道予測線をかかわすことも出来そうだ。

しかし、これでもしも相手が中距離のアサルトライフルか遠距離のスナイパーだっ

た場合、接近することが困難になる。

赤く濁った空の下で不気味に照らされる墓石のひとつに腰掛けながら、作戦を立てる。

「……中央の教会に陣取るだろうなあ。相手が僕みたいなサブマシンガン使いじゃない限り……」

とりあえず中央の教会を取られたら厄介だと判断を下し、教会目掛けて走る。

約100mを3秒で走り切り、教会の前まで来る。

シユウこと柊出雲は、GGOの中でも2つ名を得る程のトッププレイヤーである。そのやり込み度・経験値は凄まじい物がある。一重にシノンと一緒に何かを積極的に行う事が楽しかったのと、殆ど覚えていない前世でのガンマニア癖が加重して、所謂「プロプレイヤー」になっていた。

その中でも「超AGI特化型」のスキル構成をしているシユウは、振れるステータスは殆どAGIに振り、最早その速度はGGOトップと言える。比較的軽いサブマシンガンと、予備マガジン、グレネード、小型ナイフ、後は殆ど重量を持たないポンチョ等の布製品ぐらいいしかストレージに入れておらず、大事なものは《結婚》で得た容量無制限の共有ストレージに入れている。1度家^{ホーム}に帰らなければ共有ストレージは開けないのだが、基本使うことは無い（レアドロ品やコレクション品ばかり）ので意味は無い。

防御力という点ではプレートアーマーぐらいしか付けておらず、その他はもう殆どか布。まるで暗殺者^{アサシン}かのような出で立ちだ。GGOでは珍しい。これも一重に、筋力にくステータスを振っていないからだ。

「銃弾より早く走れば当たらないんじゃないかね？」なんてバカげた思想を現実にするレベルの速さだ。

「さてと敵は……居ないな」

巨大な教会の中には実にアメリカ式で、巨大な一部屋になっていた。ガワは立派だが中は椅子と十字架、神父台くらいしかない。

素早く神父台まで上り、その後ろに隠れる。

すると、外よりカツカツカツという石畳を蹴る音が聞こえてくる。どうやら同じ考えに至ったようだ。GGO随一のAGIを持つシユウには適わなかったようで、1歩出遅れて教会へ到着。

豪快に扉を開ける。そこにシユウが居るとも知らずに。

「(このまま来るか……?)」

絨毯が足音を吸収し、相手のブーツの音は殆ど聞こえない。今どこまで近づいているのか。獲物はなんなのか。敵は誰なのか……

そんなことを考えていたら、神父台が破壊され、襟首を拳で捕まれ引きずり出された。

「ヴェっ！なんだア!？」

兎に角敵を倒そうと銃を構えるも、蹴り上げられスリングごと吹き飛ばされる。そこで初めて相手の顔を見る。

「お前……サトライザーか！」

GGOにして異質の徒手格闘最強の男。第1回B. o. B優勝者。プロ中のプロ。彼の呼び名は多い。

その中でもやはり異質なのが徒手格闘による超近接戦闘スタイル。第1回B. o. Bをナイフとハンドガンだけで優勝した実績から見ても、油断も隙もない相手。

そんなサトライザーは筋力中心のバランス型。AGIにも多少振っているが、それよりも筋力や体力に多く振っている。

「シユウか……予選で相見えるとはな。」

「こちらこそだ。戦いたくない相手NO. 1だぞお前は」

先程「弾丸より早ければ」と語ったが、弾丸を（基本）使用しない相手となれば話は別だ。もちろんシユウにも徒手格闘スキルはプレイヤースキルとして持っているが、サトライザーのそれはまさに規格外。正面切つての戦いは殆ど勝てないと思つた方がいい。

「お前とは本戦で戦いたかったが……残念だ。ここで散れ。シユウ」

「やなことだ。僕には勝たなきゃ行けない理由があるもんでね」

「理由？」

「ああ」

精一杯の作り笑いで、相手を挑発するように、

「僕が勝たなきゃ、僕の女神に怒られる」

「フツ……シノンか。懐かしいな」

先程から知り合いのように話しているが、実の所……結構ズブズブの友達である。めっちゃ仲良しである。サトラライザーのフレンド枠は寂しいが、シユウとシノンだけは入っている。

何を隠そうシユウとシノンに徒手格闘術を教えたのはサトラライザーなのである。プレイヤースキルと言えるまで教え込み、サトラライザーの全てを叩き込んだ、シユウから言わせれば師匠的ポジションに当たる。

そんな相手とこれから拳を交えなければ行けない。サブアームに拳銃なんて付けてないし、メインアームのP-90(P)は吹き飛ばされ椅子と椅子の間に落ちている。拾いに行こうものなら腹を蹴り挙げられそこからの連撃であつという間にヒットポイント全損だろう。体力にステ振りをしていないシユウなら尚更早く倒される。

GGOにおいて体術はあまり期待できるものではない、という前提を真正面から文字

通り力と実績でねじ伏せたのがこのサトラライザーである。彼を慕い、GGOで徒手格闘に目覚める輩も少なくない。

「さあ来い。お前の實力を見せてみる」

黒のスーツに緑のグリーンジャケットという……はつきり言って異質な格好をしたサトラライザーが言う。

「俺の實力ね……確かにあれから結構経つもんなあ……見たけりや……お前から来い！」

バツ！と身を翻し、扉に向けて残像が見えるほどの速さで走り抜けるシユウ。

「おまつ………！逃げるのか！卑怯者オ！」

「なんとも言いやがれ！お前と正面切つて戦うなんざごめんなんだよオ！」

1秒足らずで教会をとび出したシユウを追うように、グリーンジャケットをはぎ取ったサトラライザーが追う。

サトラライザーが外に出た時、そこにはびゅうびゅうという強めの風が頬を撫でるだけで、シユウの姿は見当たらない。

「クソツ。何処へ行きやがったあの速度、バカは……」

大きめのサバイバルナイフだけ足から引き抜き、構えながら墓地を見渡しながら教会回りを歩く。サトラライザーのコツコツという足音だけが響く。このステージは教会を

中心に円を書くように墓石が設置されており、隠れる場所も多くない。見つけるまでそう時間はかからないだろう……そう思っていると、唐突に感じる右頬へのダメージ。しかもそのまま教会の樹壁にぶつかり、双方でダメージを食らう。が、1割も削れていない。

「がっ……なんっ」

一瞬視界が途切れ、殴られた右の方向に振り向いた時には、もう居ない。

「奴め……塵も積もれば山となる。か」

今回シユウが取った作戦は簡単。神速で近付き、殴り、神速で逃げる。至極単純なヒットエンドラン戦法である。速度にものを言わせ、サトラライザーの射程内に入ってから出るまでを0.5秒以内にこなす。

「待たせてくれたなと思ったらこれか……随分と舐め腐った真似をしてくれる……!」

サトラライザーはその端正な顔を歪ませ、ナイフを握りしめる。相手がヒットエンドランをするならこちらもするまで。視認したら即ナイフを振るい、ダメージを与える。筋力もろくに鍛えていない男のパンチと筋力バランス型のナイフではダメージに明確な差が出る。10発に一刺しでもお釣りが来るくらいだ。

「ぐっ」

墓地の方に歩き始めたサトラライザーを再度パンチが襲う。いくら弱いとはいえ拳1

つ分の質量をぶつけられるのだから、それなりに体が引きはする。この隙に視界の外へと走って逃げる。

「がっ」

再度、今度は右の腹へ蹴りが叩き込まれる。少しくの字になったサトラライザーは今度こそと思つたが、もう居ない。まさに神速。目には目を。歯には歯を。規格外には規格外をとやわんばかりにその神速っぷりを遺憾無く発揮するシユウ。

しかし、未だヒットポイントは1割も削れていない。精々が4%程度だ。

「いつまで遊ぶツツツツツツツつもりだー」

そんなやり取りを何度か繰り返して、10分以上総勢60発以上（分に直せば10秒に1発）食らったところで、サトラライザーの眼がシユウを捉える。

「ぬおっ!？」

等々サトラライザーのナイフがシユウの脇腹を挟り、ヒットポイントを2割削る。サトラライザーの残りヒットポイントは7割ほど。いくら軟弱な拳や蹴りとは言え、60発以上も喰らえばそれだけ削れる。いや、それしか削れていないと言える。

腹にナイフを食らったシユウは少しよろめき、体制を崩した。そこを見逃すサトラライザーではない。即座に得意な徒手格闘に持ち込む為、腕を掴む。

「クソツッ！離せやー！」

「いい加減うんざりだ！予選でここまで時間を使っている暇はない！」

心底イラついているという様子のサトラライザー。もちろんだ。前も言ったが与えるダメージ量に関係なく痛みは等しく訪れる。じーんとした強めの指圧程度の痛みだが、それを60回以上も繰り返されればイラつかない方がおかしい。

「捕まえたぞシユウ！もう離さん！」

グイツと掴んだ手首を引き寄せ、体に密着するんじゃないかという程の距離で渾身の膝蹴りを腹に叩き込む。

「ぐえっ」

シユウのヒットポイントが8%ほど削れる。

「もうっ！逃がさんぞ！この手離してなるものか！」

左手に握ったナイフで心臓を突刺す。しかしそれは寸でのところで躲され、左肩に突き刺さる。シユウのヒットポイントが1割削れる。しかし、肩の力を抜かないようにグツとこらえる。

「いつてえなあもう！」

悪態をつきながらも、身動き出来ないシユウは精々がナイフで急所を刺されないようにするのが精一杯だ。

反撃とばかりに握り拳で腹を殴るが、1mmたりとも動じない。さすがの体幹であ

る。

「もう逃がさないと云っているだろう！」

まだ反抗するか！と激高するサトラライザー。

「いやー！逃げるね！じやなきや死ぬから！心中はシノンちゃんとしやなきややーだ！」

は？と思ったサトラライザーだが、もう遅い。シユウはマガジンポーチの後ろに隠すように付けられていたカラランビットナイフですかさず自分の肘から先を切り落とし、虫か!?と思う程のカサカサ後ろ走りでその場を去る。

「貴様ナイフを持っていたのか!?なんのつも（ry）」

瞬間、サトラライザーを中心に半径2mの爆発の奔流が襲う。見えない程バラバラのポリゴン片になったサトラライザーは、状況を呑み込めぬまま、B. o. B予選から弾き出された。

トリツクは簡単だ。右手首を捕まえられた瞬間に、シユウは既に行動に出ていた。見えない左手で背中にあるウエストポーチからプラズマ・グレネードを取り出し、握り続けていたのだ。左肩を刺された時に痛みで落としそうになったがグツと堪え、反撃と見せかけた腹へのパンチでスーツの中にスイッチを作動させたプラズマ・グレネードを入れた。

そして、今まで殴る蹴るしかせず、「コイツは近接戦闘の手段が生身しかない」と相手に無意識下のうちに思わせ、隠し持っていたカランビットナイフで手ごと脱出。

見事プラズマ・グレネードを忍ばせながら戦線離脱に成功したシユウは、そこで勝ちを確信していた。

サトライザーは油断ならない男だ。だからこそ、10分もの時間をかけ無意識下に体術しかないで刷り込ませる必要があつたし、とっておきのグレネードも最後まで隠し持っていた。P-90(P)を弾き飛ばされた段階でここまで考え、あえて「腰抜け」を演じ切ったシユウの勝ちと言える。

「はあ……短いけど……疲れる戦いだつたな……」

10分間走り続けた精神的疲労がドツと押し寄せ、その場に座り込む。ヒットポイントに残り5割を指していた。

転送の光がシユウを飲み込む。

「遅かったわね。連戦お疲れ様……んっ」

帰るなり女神のキスで精神的疲労がぶっ飛んだシユウであった。

「んっ……ただいま。」

スルリとシユウの腕に絡み付き、恋人繋ぎをしてから話し始める。

「にしても、あのサトラライザー相手に近接戦で勝つとはね。Fブロックに入ってたのは知ってたけど、まさかP-90（P）なしで勝つとは思わなかったわ」

「まっ、俺の器用さ（プレイヤースキル）がなし得た技だな」

「ふふ。そうね」

大人な対応でシユウをあしらひ、アイスコーヒーを飲む。

「そういうシノンちゃんはどうなのさ」

「んっ？なんか……ごっつい、両足に拳銃付けて、シヨットガン背負って、ドラムマガジンのアサルトライフル？を持ったポニーテールの人が相手だったけど、狙撃で1発。おわり」

「うひー。本戦が怖いな」

「楽しみにしてなさい」

そんな他愛ない会話とイチャイチャをし、周りの本戦出場候補が血涙を流しながらその光景を見つめる。

この時、待機エリアにいる全ての本戦出場候補（キリトと死銃は居ない）はこう思っ

た。

リア充、滅べ……と

朝田詩乃とB. o. B予選第4回戦「砂漠」

パチリ

砂！砂！砂！見渡す限りの砂の海！

砂漠。或いは規模的に言えば砂丘だろうか。兎に角、見晴らしのいいステージだつた。

《遠視》スキルを持っていないシユウでは……いや、あるいは持っていたとしても、地平線の彼方まで見えなかった。暑い熱帯夜のような薄茶の明かりが照らす砂漠は、それだけで幻想的に見えた。

B. o. B予選では500m離れてお互いスポンする。ということを先程シノンに教えて貰った。今までB. o. Bに興味はあれど出場経験のなかったシユウはルールブックを流し読みするタイプだったので、そこを見逃していた。

ぐるりと見回すが、砂しか見えない。所々丘になってたり岩があつたりして、平坦とは言えないステージである。

目の前の丘を昇り、周囲を見渡せる位置に行く。

「……………ん？」

第2回戦の刑務所とは打って変わり、今度はすぐに敵を発見した。500m間隔とはいえ、見晴らしのいい砂漠だ。ちらりとだが、砂漠によく似合う茶色のポンチョを被った人影が岩陰に隠れる所を発見した。本当に差異ないカモフラージュだったが、運悪く素早く動いているのを見られてしまったらしい。

その岩陰から、ちらりと銃の銃口と頭らしき物が除く。最も、ポンチョのせいで頭は殆どカモフラージュされ見えないも同然だったが。

「お互い見つけたな」

相手の銃口からマズルフラッシュが光る。ほぼ反射的に身体を全傾にし、敵に向かって走り出す。いくら100m3秒で走るシウウでも、砂漠に足を取られては全速力を出せない。砂漠に足を取られながらも、頭の上を弾道予測線なしに掠める弾丸のチュインとした音を聞き、悟る。

「(シノンちゃんと同じスナイパー……しかも、弾道予測線なし射撃が出来る凄腕)」
GGOは、良くも悪くもシステムアシストが強い。こと発砲においてはそれが顕著に現れる。

まず基本的なスナイパーは、敵を見つけ、引き金に指をかけ弾道予測円バレット・サークルを発生させ、その心臓に合わせた収縮が1番小さくなった時に放つ。そうすれば、弾丸は弾道予測円の中に着弾する。例えばどれだけ銃がぶれる撃ち方をしていようが、だ。そのバレット・

サークルをどう上手く使いこなすかがGGOスナイパーの強さに繋がると言える。

しかし、何事にも例外は居る。

例えば、現実でもスナイパーを生業にしている者。猟師、軍隊、自衛隊などのスナイパーは、システムアシストなしに、つまり、敵に弾道予測線を見せずに射撃する事が可能だ。

仕組みは簡単。ただ狙い、撃てばいい。引き金に指をかけてからバレット・サークルが発生するまで0.5秒程猶予がある。その0.5秒の間に……つまり、撃つ直前まで引き金に指をかけず、撃つ直前で0.5秒以内に引き金を引けば、こちらのシステムアシストが発生しないというデメリットの代わりに、相手に弾道予測線を見せないというメリットを生ませる事が出来る。

もちろんコリオリ力や風力も計算しなくては行けないし、並大抵の努力ではこの技は使えない。日本ならば一流の猟師、自衛隊の空挺部隊。海外ではスナイパーを本業とし戦争に身を投じている真の「戦士」のみしか出来ない技だ。

だが。この相手スナイパーはそれをやってのけた。シユウが先に発見できておらず、AGI特化型ではなく、発砲音が届くより前に目でマズルフラツシユを見て身体が動き出すプロプレイヤーでなくては、今頃先程の丘の上で頭を撃ち抜かれ、運が悪ければ脳漿ダメージ判定で1発即死も有り得た。全ての要素が上手く絡み合ったからこそ出来

た芸当であり、流石B・o・B第4回戦に進んでくるスナイパーなだけはある。とシユウは感じた。

しかし、このスナイパー。運が悪い。先に発見されたのはまだいい。スナイパー最大の利点、発見されていない初弾は弾道予測線が発生しないというメリツトを常に持っているような腕前だからだ。運が悪いというのは、この広大な砂漠と、そのプレイスタイル（スナイパー）、そして相手がシユウという、環境が敵にとって劣悪極まりないからだ。シユウは砂の上をかける。普通の地面なら100m3秒の所を5秒程で駆け抜ける。右に、左に、また左に、次は真っ直ぐ、そして右にと、規則性のないジグザグ走行で、相手をスナイパーに的を絞らせない。現に、何発か弾道予測線なしの射撃が襲ってきているが、未だに1発も当たっていない。

5秒経過

500m間隔でスポンする関係上、スナイパーまでは約500mあると考えている。ジグザグ走行に加え、足場の悪い砂場で、まだ100mも詰められていないだろう。後430mと言った所か。砂粒のようなマズルフラツシユを見ながら、走る。

10秒経過

敵もシユウの意図を察したのか、もう体を隠そうともせず、岩場にバイポッドを立て正確に狙おうとしている。

シユウの意図は簡単だ。近付いて、殺す。P-90(P)の射程は凡そ500m程。しかもこれは、「システム上ダメージ判定が生まれる距離」であり、500mの地点から撃った弾は相手のヒットポイントの1%も削れないだろう。

ところで、P-90とP-90(P)の性能には大分違いがある。リフレッシュレートや弾薬などは改造しない限り同じだが、長さや射程距離、耐久力が違う。本来ならプロトタイプであるP-90(P)の方が劣っている筈だが、ことGGOに関しては違う。

P-90は主街区裏路地のプレイヤーショップや穴場ショップなどを何件かハシゴすれば見つけられる少しレアな銃程度だが、P-90(P)は凶悪なモンスターラップ(しかも雑魚延々湧きという弾薬問題のあるGGOにしては中々鬼畜なトラップ)からのドロップ品であり、日本サーバーはおろか海外本家のサーバーでも発見例のない、まさに「GGO唯一のサブマシンガン」と言える。

そんなP-90(P)のP-90にない利点は、「弾倉の違い」「重さ」「制御のしやすさ」「射程距離がアサルトライフル並」「カスタム性が高い」そして、「耐久力値が桁違い」の6つがある。特に耐久力については、運営の「レアドロ品だから耐久力めっちゃ高く設定してあげよかな」という思惑があるんじゃないかってくらい高い。例えるなら、7.62mm弾を当てられようがその全てを跳ね返す。ぐらい強い。もちろんシステム上壊れはするが、プラズマ・グレネードの中心にあっても壊れないし、7.62m

m弾100発ぶち込まれようが「全損」はしない。精々少しひしゃげる程度で、修理屋に持ち込めばすぐ直る。

普通の銃の銃口は、細く、長くなっていて、銃身はプラスチックになっただけで、このP-90(P)は違う。全身鋼鉄・そして、実際のP-90(P)よりも大きめに作られた銃身により、盾にもなる。普通のP-90は弾倉に透けるスケアリング加工されたプラスチック弾倉を用いるが、P-90(P)の弾倉は透けない鋼鉄仕様。P-90(P)所有者のみが買える専用の鋼鉄弾倉を使用しているのだ。もちろん、スケアリング加工された普通のP-90用弾倉を使おうとすれば使えなくはない。逆も然り。

ので、いざと言う時盾に使える。まあ、いくら実銃よりシステマ的な面で(後ザスカ(GGOの運営会社)の意向で)大きめに作られたとはいえ、サブマシンガンの域を出ない程に小さいので、胴体全体を守れたりはいらないが。

20秒経過

段々とスナイパーの焦りが見えてくるようで、射撃のスピードが早くなる。もう残すところ200m程。敵の使ってる銃が見えるくらいには近付いた。

「(R93タクティカル2……しつぱい銃使ってるなあ。リアル猟師か?)」

R93タクティカル2。ボルトアクション式単発銃。ドイツ製の高性能狙撃ライフ

ルだ。

そんなことを考えていると、意識が逸れたのか頬にダメージエフェクトと鈍痛が発生する。ラッキーショットか、狙ったか。恐らく両方だろうが、ヒットポイントが4割削れる。流石に残り200mの距離で掠めたとはいえ頭部への、308Win弾の発生ダメージは並では無いこれ以上近付いて所謂「凸砂」のような事をされれば、ヒットポイント全損も有りうる。いよいよ油断ならなくなってきた。

30秒経過

もう残すところ50m程であり、こちららも牽制射撃を始める。相手の隠れる岩場を5.56×28mm弾が挟り、敵の体にも数発当たるが、気にせず射撃を続けている。

R93タクティカル2の弾倉は5発。そろそろリロードタイムかと思いい、こちらも20発近く残っていた弾倉を惜しまず交換し、一直線に駆け抜ける。とうとう岩場まで達し、岩場を足蹴にして大ジャンプ。

AGI極振り特化型の走りジャンプの飛距離は凄まじく、優に8mは飛んだ。そのまま真下に眼と銃口を向けて、発砲。

敵もR93タクティカル2を真上に構え必殺を狙っているが、あえなく外れ。コツキングなぞ許さず、全身を真上からの銃弾が襲い、ダメージエフェクトが散る。

思わずぼとりとR93タクティカル2を落とす敵プレイヤー。ここで初めて気付い

だが、どうやら緑髪の女性のようだ。GGOのトッププレイヤーにしては珍しい。

「(運が悪かったな。こちとら世界一のスナイパーが身近に居るもんでね)」

敵の体が倒れ、勝利のファンファーレが鳴る。

着地と同時に、転送が始まる。

今回は1分とかわからずバトルを終わらせることが出来た。ゆつくり出来そうだなー
……なんて考えながら、待機エリアへと戻る。

「やあシュウ。凄かったね。狂人の名はダテじゃない」

「やめてくれシュピーゲル……その名前は好きじゃないんだ」

どうせならAGI極振り特化型なのだから、「神速」とか、もつと速さに注目した2つ名にして欲しかった。等と零しながら、アイステイーを注文する。

「シノンちゃんは？」

「あそっ」

シュピーゲルが指を指したモニターには、水色の髪の毛をしたスナイパーがアサルトライフル(見た所フェドロフM1916)に押されている場面が見える。

「どー勝つんだろーなー」

「アハハ。勝つこと前提？」

「そりや彼女だし。応援するっしょ」

「……そうだね」

少し間を置いて答えたのが気になるが、それより試合だ。いよいよ隠れていたバスの上に取り掛かれるか。といった所で、シノンがヘカートIIはそのまま身を翻す。

「おっ？」

未だヘカートIIの銃身が見えるからそこにいると勘違いしている敵プレイヤーはバスの正面からバツと登り、先程までシノンが居た場所を蜂の巣にする。しかし、ヘカートIIに弾薬がバチバチと当たるだけで、ダメージエフェクトは発生しない。

そこで、バス後部にスナイパーの時と同じように腹ばいになって「MP7」を構えるシノンを見つける。が、遅い。シノンのMP7が火を吹き、敵プレイヤーの顔面を躊躇なく抉る。

「彼、シノンを見つけたまでは良かったんだけど、詰めが甘かったみたいだね」

「まーシノンちゃんを見つけたられた時点で妥協点は上げたいな。」

「そうだね」

「危なかったわ……」

「おつかえりく見てたよバス上の攻防」

そう言うのと、少し口をへの字にしながら、シノンが答える。

「見られてたのね……早く終わった方だと思ったのに。スナイパーとして見つかるなんて失態だわ。恥ずかしい」

「まあまあ。相手が強かったってことで」

シノンが戦っていたのは大きな、とても大きな十字路である。ほとんど直線で1kmの十字路で、シノンはその南側にスポーンした。

即目の前のバスの上に登り、バイポッドを立て敵を待つ。

十字路ならば必ず前を通り過ぎなければいけないし、第1回戦でも同じようなステーションだった。有利とも不利とも言えない地形である。

そうして待っていると、十字路の奥に人影を見つける。どうやら直線上にスポーンしたようだ。これは楽勝だなどと思い初弾弾道予測線なしの利点を生かし、ゆっくり狙って射撃。しかし、弾丸は躲された。

どうやら《遠視》スキル持ちらしい。スコープや双眼鏡、単眼鏡なしでもシノンの姿

を先にとらえ、走ってきていた。

シノンは即座に弾道予測線なしの射撃に切り替え、狙い、撃つ。しかし、土囊や転がった車、鉄板などに身を隠しながら進んでくる。どうやらAGI—STR型のよう^{敏捷力}で、俊敏に動き狙いを絞らせない作戦のようだ。

無駄弾を使用しないようゆっくり狙うが、どうにも掴めない。流星はB. o. B第4回戦と言った所か。

そうしてやがて1kmもの距離を詰められたシノンは、最後ヘカートIIを身代わりにするようMP7で仕留めたのである。無駄弾を使わないよう最低限の射撃しかし無かったことで、最後詰められた時射撃しなくても不思議に思われなかったのだろう。強いが、どうにも最後の詰め^の甘さが招いた敗北だった。

「ん〜課題点は多いわね……こんなんじや、本戦でシユウを捉えきれないわ。あの程度の速さには慣れなきゃ……」

「闇風くんを凌ぐGGO一の僕のランガン（ラン&ガン。走りながら撃つプレイスタイルのこと）に補足されちゃーおしまいよ。さっきの僕の勇士を見せてあげたかったなあ」

「スナイパーだったの？……どうせ、AGI任せの突撃でやったんでしょ」

「いやそれがさあ。弾道予測線なしで撃ってくるの。キリトくんの出場といい、死銃？

とやらといい、今回のB。O。B、中々レベル高くない？何故かアメリカのサトライザーまで来たんだよ？」

「それはまあ、確かにそうね……というか、貴方の運が悪いのね」

「2人とも強いよ。僕なんか足元にも及ばないくらいね」

「まあねー」

「謙遜するところよ、貴方。」

そんなこんなしていると、キリトも第4回戦を終えて現れる。どうやら動悸は完全に納まったらしい。

「よっキリトくん。どうだった？」

「普通かな……今までと同じ、切って、切って、斬った。」

「うひょーこわー」

どうやら今回は3人ともまだ余裕があるらしい。そんなことを考えながらシユピーゲルは3人を見つめる。

「(……………兄さん……………どうか、早く……………早く、やらせてくれ)」

そんなシユピーゲルの思いは、口にも出さず、誰にも届かなかった。その双眼が貫くのは、シユウ。

そして……………死銃と同じ眼をしていた。

朝田詩乃とB. o. B予選第5回戦「原子力発電所」

パチリ

いつも通りシノンちゃんといチャイチャしてたら、僕が先にフィールドに飛ばされてしまった。

まあいい。イチヤイチヤなんぞいつでも出来る！と早々に切り替え、辺りを見回す。瓦礫や、横転した車。湿っぽいアスファルト。そして正方形の上に、更に小さい正方形の塊が乗った建物が3つある。そのすべてが内部から爆発した跡が残っている。所々に煙突も見える。

兎に角、これだけじゃ何も分からない。

とりあえず近くの遮蔽物に隠れ、P-90 (P) のセーフティが外れてるのを指で確認しながら、どういったステージなのかを考える。幸いと言うべきか、ステージの端っこにスポンしたようで、金網の入口らしきものがすぐ近くに見える。それを背にしなから、敵に見つからないよう隠れる。

………よくよく耳を済ませてみると、チリチリ……チリチリ……という音が、どこからかする。どこからするのかは分からない。だがかすかに、電子音のような音がす

る。

どのようなステージなのか全く見当もつかない。ので、とりあえず移動する。建物の入口らしき扉（ひしゃげているが）をみつけ、強引にこじ開け中に入る。

中はまっくらで、仕方なく右手だけでP-90（P）を構えながら、左手でウエストポーチから小さなペンライトを取り出し、中を照らす。

左手でペンライトを持ち、前を照らしながら、左手の上にP-90（P）を乗せてできるだけ負担を軽減する。

中を進んでいくと、なにやら巨大な電池のような物や、重厚なハンドル操作（D a n g e r z o n e と書かれている）の扉や、精密機器らしきもの等、様々な物が設置されていた。そのいずれも稼働しているようには見えない。

異変に気付いたのは、探索して5分程経った時だ。

「……ん？え？ああ!？」

最初はバグだと思った。しかし、よくよく凝らして見ると、なんと自身のヒットポイントがじわりじわりと削れているではないか。既にヒットポイントは残す所8割と言った所で、このまま悠長に探索なんて続けてたら、25分程でこの謎のダメージで死んでしまう。最も、どこかに居る敵さんも同じだろうが。

厄介なステージギミックを持ってきたなどサスカーに心の中で舌打ちをし、もしここ

が「刑務所」レベルに広がったら、運悪くこの謎ダメージで双方相打ち……なんてことも有り得るな。と少し焦る。

ぐねぐねとした廊下を走る。《忍び足》^{スニーク}スキルなんてものは無いGGOでは、履いている靴の種類と、蹴る地面によって足音が変わる。今シユウの履いてるソックススニーカーと呼ばれる靴と靴下が一体化したような靴は、軽く、足音もあまりしない忍者のような靴だ。そして地面は鉄のあみあみのような場所。いくらソックススニーカーといえど、ガシヤンガシヤンと派手な足音が鳴る。それに加えペンライトの光で、双方相打ちなんて真つ平御免被るとばかりに、同じく勝負を急いでいるだろう未知なる敵にバレるように、わざと派手な音を立てて移動するシユウ。

すると、遠くから同じような……いや、自身よりも重いガシヤンガシヤンという音が聞こえた。反響していて上手く分からないが、とりあえずペンライトを消して直し、P—90（P）を両手で構える。

やがてその音は近くなり、目の前に出る！という所まで来た！

……が、居ない。

「……う？」

クエスチョンマークが浮かぶ。いくら反響するとはいえ、目の前に出るくらい近い足音だったと思うんだが……と、ふとひとつの可能性を思い浮かべ、バツ！と上を向く。

瞬間、伸びる弾道予測線。

慌ててバックステップで躲す。そう、1つ階層違いの場所に居たのだ。

こんなにも早く接敵出来たと喜ぶべきか、先手を取られたと悔しがるべきか。そんなことを考える暇なく、撃ち返す。しかし角度の問題で、鉄柵のような足場に弾は吸われる。そのうちにまた敵は真上に移動しようとするが、急いで牽制射撃をしながら曲がり角まで逃げだし、走る。後ろでブーツが2階から1階に飛び降りた時のゴツンつという音が鳴るのを聞きながら。

「銃声からしてサブマシンガン……MP5かな」

そう冷静な分析をしながら、部屋をみつけ転がり込む。

同じような建物が3棟並び、10分以内に会えたのは僥倖だった。既にステージギミックで7割まで減ったヒットポイントを眺めながら、手頃な机の陰に隠れる。

そこは制御室のような場所で、大小様々なスイッチやボタン、0を指し示すメーター等がある。その真ん中に鎮座する円卓上の机の中に隠れるように入り込み、扉に銃口を向け凝視する。所謂「ガン待ち」である。この男、とうとうガン待ちをし始めた。いや、ルー尔的には問題ない。問題ないのだが、ちよつと昔のゲームではやられたら台パン不可避の「シューティングゲームでやられたらめっちゃイラつくよね」ランキング堂々の3位には入るガン待ちである。

やがて敵プレイヤーが開けっぱの扉の前を通過する瞬間、合わせるように連射。黒のブーツにダメージジーンズ、そしてなんと上は上裸で、髪型はモヒカンという実にファンキーでパンクな格好した男の腕に、1. 2発のダメージエフェクトが発生する。

「痛てえ！」

着弾確認して、思わずグツ！とガッツポーズしたくなるシユウ。これでとりあえず双方謎ダメージでの相打ちの可能性はなくなった。

「ガン待ちかよ！卑怯なヤローだぜ！」

「なんとも言いやがれ！」

「バッドマナーだぜ!?!」

「何処のマナーだ！これはB. o. Bだぞ。パンク野郎！」

そんな軽口を叩きながら、お互い決定打がないまま少しづつダメージを食らっている。

後はもうこの謎のダメージで相手がヒットポイント全損するのを待つのもよし、突貫してくるなら蜂の巣にすればよし。第4回戦で多大な精神的疲労を負ったシユウは、もう勝ち以外見てなかった。

「こちとら疲れとんじやー！この後めちゃんこ強いプレイヤーと戦わなくちゃいけねーんだよ！」

「知るかボケー！俺が勝って決勝戦進んでやるぜ！戦わなくて済むなあ良かったなあ
!？」

そんな声と共に、部屋の中に何かが投げ込まれる。

すわプラズマグレネードか!?!と身を縮こませたら、強烈なフラッシュと耳鳴りが襲う。

どうやら閃光音爆弾だったようで、シユウはその場に倒れ込む。

その隙に部屋に突入したパンク野郎は机を飛び越え、シユウに馬乗りになる。

方や上裸、方やアーマープレートの異質な組み合わせ。

シユウは視界が回復するよりも先に、馬乗りになられた感覚で右手を何とか抜き出し、前方にあるであろうMP5の銃身を掴み、思いつきり左肩の方に引く。

「うおっ!？」

スリングをかけていたもんで、思わず前に倒れ込むパンク野郎。それに合わせて、シユウは、思いつきり頭突きをかました。

「がっ……!？」

お互いの額にダメージエフェクトがキラキラと光る。少しづつ視界が回復してきたシユウは、今度は左手でパンク野郎のモヒカンを掴み、再度頭突き。

「いでえっ!？」

ずーんとした強めの指圧程の痛みが、2度、3度と頭を襲う。ダメージはお互い均等。銃撃分パンク野郎のヒットポイントは削れているので、このまま行けばシユウの勝ちになるが……

「んの野郎！」

見た目はアレだが、流石はB. o. B予選第5回戦まで進むだけはある。頭突きに合わせて馬乗り状態を解除し、前転する。しかしシユウはMP5を握る手を離さない。敵が前転し、スリングが上手く外れたのを感じて、視界がぼやくつとだが回復したシユウは、掴んだMP5の銃身から手を離さず、即座にごろりと反転し、仰向けからうつ伏せになる。バツチりお互いの目が合う。

パンク野郎のMP5を強奪し、やたらめつたら撃ちまくろうとする。兎に角この距離ならば、謎ダメージとさっきの銃ダメージで数発当てればヒットポイント全損まで行けるだろうとの思惑だ。

だがパンク野郎も甘くない。お互いの目が合い、シユウがMP5のトリガーに手をかけるのと、パンク野郎が肩からベレッタ1915を抜き、シユウの額に合わせトリガーに手をかけるのは、ほぼ同時だった。

うつ伏せのシユウ。仰向けのパンク野郎。

「くたばりし腐れこのやろオオオ!!!」

ほぼ同時に叫び、発射。

軍配が上がったのは……シウウだった。

単発式のハンドガンベレッタ1915に比べ、フルオートに設定されていたMP5は1秒で何発もの銃弾を吐きだす。パンク野郎は痛みに2発目を発射できず、あえなく撃沈。シウウも額に1発食らったが、残りヒットポイント2割残った。

これがG18等のフルオートハンドガンだったら、パンク野郎の勝ちもあつたのかも
しれない。

「はあ……はあ……」

あつけない終わりだった。

まだサトラライザーの方が手応えがあつたというもの。しかしまあ、それは運。仕方ない事だ。

「……あつ。このチリチリつて音……どつかで聞いたと思つたら……昔テレビで聞いた放射線物質の音……か」

B. o. B 予選第5回戦を制した男の初セリフがこれである。まあ事実なのだが。今更というものである。やつとこさ記憶の掘り出しに成功したようだ。

ステージは「原子力発電所」。しかも、そのうち全ての原子炉が壊れ、放射能ダダ漏れの廃発電所であつた。もちろん現実こんな場所はない。もしも原子力発電所が完全

に爆発し壊れるような事があつたら、周囲数十kmはおろか、日本の国土の半分は放射能に汚染されるだろう。

そんなことをボーッと考えていたら、転送が始まる。

パチリ

B. o. B予選Fブロック決勝戦。スタート。

朝田詩乃とB. O. B予選決勝戦 「大陸間高速道」

「高架線……」

深い谷を見下ろしながら、そう呟く。

ステージは大陸間高速道。東から西にかけて大きな橋がかけられており、ほぼ一直線のマップだ。1km四方のマップに違いないが、実質一本道のマップ。もし第5回戦がこのステージだったら、あの緑髪の女性スナイパーに脳漿を貫かれやられていたかもしれない。あるいは、第4回戦のシノンちゃんのように、転がる車両や壊れたヘリコプターを盾に一本道を突き進み、楽に勝てたかもしれない。500m離れた所にスポーンするのはルールだから、自信のいる東側より西側に500m以上離れた位置にキリトくんは居ると考えていいだろう。

もちろん、キリトくんが第5回戦で負け、キリトくん以外が勝ち上がってきた可能性も考えるべきなのだろうが、ことキリトくんに至ってはその心配はない。なぜなら原作主人公^{チト}なのだから。

優れたAGIを活かし、車等の障害物をアクロバティックに乗り越えながら西の夕日に向かって駆け出す。

キリトくんは完全近距離型だが、僕は近・中距離型だ。サブマシンガンだが、射程はアサルトライフルに引けを取らないP-90（P）が獲物なのだから。

10秒ほど全速力で走って、遠くにキリトくんらしき人影を見つける。まだはつきりとは見えないが、あの黒髪に華奢な女らしいが男なアバターはキリトくんだ。しかし、その手には何も握られていないように見える。光剣の光が見えないのはまだわかる。光剣やフォトンソードにはエネルギー残量があり、長時間出し続けているとエネルギーパックの交換が必要になるからだ。極力節約する為に、見敵したら出すつもりなのだろう。と、僕は思っていた。

300mの地点から、片膝立ちになって射撃。P-90（P）なら完全に射程圏内だ。キリトくんの体を弾丸が襲う。それに伴う鈍痛も発生しているはずだが、僅かに身動きするだけで、光剣を出す素振りもない。というか、こちらを見ようともしていなかった。頭を伏せ、機械的に歩いていったのだ。

「……舐めてんのか……いや。確かこれは……」

もう殆ど覚えていない原作を思い出し、悟る。

キリトくんに戦う意思がない事を。

その事を思い出すと同時に、立って全速力で駆ける。10秒も立たず直線距離を移動し終え、距離は5m。お互い動きだそう思えば1秒で敵を屠れる距離だ。

「どうした。キリトくん」

知っていても、怒りを収めるような声でキリトくんに問いかける。原作を思い出した僕ならばどうした等と声はかけないが、生憎僕はまだキリトくんが《SAO生還者》サブバイパーな事を確信できる要素はない。原作を知っているから、キリトくんが「斬りたくない」と思い予選決勝を實質「試合放棄」している事も納得出来るが、そんな事柊出雲は知っていてもシユウは知る由もない。

「……俺の目的は、明日の本戦に出ることだけだ。もうこれ以上戦う理由はない」
予想通りの返答が帰ってくる。

「怖気付いたか？」

「好きに思ってくれて構わない」

「ならば何故自殺しなかった？ファイブセブンで頭を撃ち抜くなり、谷底に落ちるなり、試合放棄する方法はいくらでもあった。リザインするだけでも良かったはずだ。それとも、わざと撃たれてキルカウントを1つ献上しようとも思ったの？」

「……」

黙り込むキリトくん。知っているからこそ、その葛藤も分かる。もう人を斬りたくない。そう思うのは勝手だし、キリトくんの事情を知っている柊出雲は同情すら感じていた。間違った感傷で、キリトくんは望んじやないだろうが。

原作を思い出したがら、ゆっくりと言葉を選び慎重に話しかける。

「たかがVRゲームの、たかが1マッチ。目的は達したから戦わないと思うのは勝手だけど、その事情に僕まで巻き込まないで欲しいな。僕は今まで5人の強者と戦い、勝つてここにいます。君もそれは同じ筈だよ。キリトくん。」

「……」

「良いかい？キリトくん。君が行っている事は、そんな強者達への侮辱だよ。どんな気持ちで今まで相對してきたプレイヤーがこの映像を見ているだろうね。」

「戦いたくない事情を僕は知らない。だけどね。勝負から逃げるような臆病者だとは思わなかったよ！君は僕みたいな泥臭い「兵士」じゃなく、立派に戦う「戦士」だと思っていた!!誰の誇りも傷付けない立派な戦士だつてね!!」

キリトくんの事情を知っている身からすると、少し心が痛くなるな。

今行っているのは、双方の価値観のぶつかり合いだ。今まで戦ってきた強者達への侮辱だと思う僕と、SAO生還者^{サバイバー}としてもう人を斬りたくないと思うキリトくん。どちらも間違つちやいないのだろう。

そう勝手に責め続けると、弱々しい、だがしかし先程とは違つて仄かな感情の籠つた声が出る。

「……………俺も…………。俺もずっと昔、誰かをそうやって責めた気がする……………」

「……………なら、僕の気持ちは分かるはずだよ」

「……………済まない。俺が間違っていた。たかがゲーム、たかが1勝負、でもだからこそ全力を尽くさなきゃならない……………そうでなければ、この世界に生きる意味も資格もない。俺は、それを知っていたはずなのにな……………」

そういつたキリトくんは、頭を上げ、しっかりと感情の籠った黒い瞳で僕を射抜く。そして、歴戦の戦士であり剣士であるキリトくんは綴った。

「シユウ。俺に償う機会をくれないか。今から、俺と勝負してくれ」

「今から……………ね」

ここで原作では、シノンちゃんと10mの距離を置き、弾を弾いて地面に落ちた音を合図に射撃、その弾を見事切り伏せ、シノンちゃんに勝つ……………そういう展開だった気がするが、果てさてどうしたものか。

そこで、妙案が浮かぶ。

「それじゃあ、キリトくん。今ヒットポイントはいくつつ残ってる?」
「6割くらいだ」

適正距離からの銃弾を数十浴びて4割しか削れてないとは、中々体力の高いこつて。そう思いながら、自身のP-90(P)で自身の足を撃つ。丁度6割くらいまで削り、キリトくんに向き直る。少し驚いた顔をしているな。

「これでイーブン。勝負は簡単だよ。100m離れて、僕は全力で君が近付いて来るのを阻止する。君は、全速力で僕を斬りに弾を避けるなり切るなりして来る。どうだい？悪くないだろうか？」

「ああ、分かった。それでいい」

まあ即席の案としては良い落とし所だな。そう考えながら、東側に歩いていく。

「合図は僕の投げる手榴弾だ。丁度僕とキリトくんの間に着ちるように投げるから、爆発したら勝負開始。」

返答は聞かず、早足に翔る。目測だが100mは離れただろうという位置で、振り返る。夕日をバックにシルエットしか見えないキリトくんは、既に光剣を握り戦闘態勢に入っている。

「投げるよ〜！」

そう叫びながら、ウエストポーチから破片手榴弾を取り出す。ピンを抜き、投げる。狙った通り中間地点に落ち、コロン転がる。投げたすぐあとに僕は片膝立ちに切り替えP-90(P)を構える。同時に、キリトくんの持つ光剣から光が伸び、1m程の光る刃が登場する。

はつきり言って、勝てるか分からない。キリトくんの戦う姿は1度しか見てないし、相手はアサルトライフルだった。僕のP-90(P)とは初速も弾速も弾数も違う。全

てを斬り捨てる事は不可能だろうが、それでも100mの距離を詰め切るまでに6割のヒットポイントを削りきれぬだろうか。

冷や汗を背中にかくのを感じながら、銃身を握る左手に力が籠もる。そうして数秒後、ドカン！という音と共に、破片手榴弾が爆発。ほぼ同時に射撃を開始する。

予想通り、猪突猛進するキリトくん。引き金に指をかけ50発もの弾丸をばら撒くが、頭や胴体に当たる弾は光剣により切り伏せられてしまう。しかし、腕や足には命中弾があり、確実にヒットポイントを削っているはずだ。

クンツと横にズレるキリトくん。合わせて銃口もそちらに向ける。100mの間に遮蔽物は無いので隠れること出来ないが、少しは弾を回避することが出来るだろう。2年のSAOで培ったステータスには圧巻される。しかし、8ヶ月とVR歴は圧倒的に負けている僕だが、「戦い」における経験値は負けてないつもりだ。

感覚で弾が残り10発を下回っただろうと言うタイミングでリロード。もうキリトくんと距離は10mもない。僕は外した鋼鉄使用のマガジンをキリトくんに向かつて投擲する。キリトくんはそれを切ろうとするが、伊達にP-90(P)のマガジンやっでない。いかな光剣といえど真つ二つにすることは出来ず、キリトくんの顔面にマガジンが直撃する。目を瞑り、少し仰け反るキリトくん。その間に新しいマガジンを取り出し収め、初弾を薬室に送り込みリロードを完了させるが、その間にキリトくんは回復し

光剣を突きのように刺しこんできた。

僕はそれをP-90 (P) の腹で受けながら、回避する。流石はP-90 (P) の耐久力だ。鉄さえ両断する光剣を受けながらもダメージエフェクトすら出ていない。

「セアアツ！」

横薙ぎの一閃。それを前傾姿勢で大の字になりながらジャンプで回避する。地面に着くなり、P-90 (P) をキリトくんの足に向かって発砲するが、バックステップでかわされる。

体制を建て直したキリトくんは、今度は右上からの斜め上段切りで攻撃するが、これを紙一重で右半身を後ろに下げること回避。P-90 (P) を繋ぐスリングのみ切られた。超近距離戦なら自由度が増して更にいいだろう。そして、左足でキリトくんの腹を横薙ぎに蹴る。

振り下ろした光剣からそのまま攻撃に転じようとしていたキリトくんはその衝撃で攻撃中止を余儀なくされ、ふらりと傾く。

ダメージレースではまだ勝っている。まだ一撃もキリトくんから攻撃を受けてない僕（勝負前に6割まで削っているが）と、重要器官への弾はかわしたものの腕や足に数発弾を食らっているキリトくん。予想残りヒットポイントは2割と言った所か。

ここで僕は賭けに出た。

キリトくんが僕から見て右にふらつき、左足で何とか倒れるのは耐え、光剣で左下から右上へかけての切り付けをすると予想して、それに合わせるようにP—90（P）の銃身を這わせる。

そして……僕は、賭けに勝った。予想通りP—90（P）は光剣の1mもの刃を受け止め、僕自身へのダメージを代わりに受けてくれた。その間に右手で持っていたP—90（P）はもう左上に投げ捨て、そのまま右手でキリトくんの右手を光剣の筒ごと掴む。

「ぐっー！」

攻撃の手段を封じられたキリトくんは、僕の体重を前傾にかけて右手に負けるように体を反転させ、背中を晒す。そこを、僕の右膝がキリトくんの背中を穿つ。

「ぐはっ！」

そのまま押し倒し、僕の右手でキリトくんの右手を光剣ごと地面に縫いつける。体も右膝で抑える。うつ伏せのまま動けないキリトくん。

「捕まえたよー！」

勝ち誇ったように言い、次の一手を打つ。

「ぐ………おおおお!!！」

しかしこのままやられてくれるキリトくんじゃない。覚悟ガンギマリな原作主人公

は強いのだ。その優れた筋力値で左手を起点に起き上がろうとする。そんなことをされたら、貧弱な僕の体は徐々に浮いていく。

「……ッ！そうくるよな！キリトくんッ！」

ガッ！と自身の右手ごとキリトくんの右手を踏み付ける。それだけして、あえてキリトくんを解放し、キリトくんの正面に立つ。バネ仕掛けの機械のように起き上がったキリトくんは、今度こそと光剣を握ろうとするが、力が入らない様子。その筈だ。その為に、自身の右手を犠牲にキリトくんの右手を思いつき踏み付けたのだから。今頃じーんとした痛みで光剣をとりこぼしそうな所だろうが、流石はキリトくん。強い意志で握り続ける。

しかし、

「ごめんな」

そう言って、僕はキリトくんの強い意志を宿す右目を、左手で握ったハンドガンで撃つ。眼孔を突き抜け脳漿にまで到達した弾丸は大ダメージを与え、ただでさえ少なかつたキリトくんの残りヒットポイント2割を削りきり、ボタンと倒れる。

ふう。とため息をこぼし、痺れる右手を擦りながら、なんとか勝てたことに安心する。近接戦に持ち込まれた時点で負けは濃厚だったが、あのサトラライザー譲りの格闘術が役に立った。まあ、最後は拳銃だったが。

B. o. B 予選決勝戦を終え、待機エリアに戻ってきた。相も変わらずザワザワザワザワと騒がしくモニターを眺める観客たちを見ながら、キリトくんを探す。と、少し離れたテーブル席にシノンちゃんとキリトくんの姿を見つける。

「やつほー。勝負は僕の勝ちだねキリトくん」

明るく努めて笑顔でキリトくんに話しかけ、シノンちゃんの隣に座る。へにやりと破顔したキリトくんは、

「ああ……まさか、近接戦で負けるとはな。自信あつたんだがなあ……サブアームにハンドガンを持つてるとは考えてなかった」

と零す。

「ん？持っていないわよね？」

キリトくんの話を聞き、疑問を口にするシノンちゃん。

持つてないよ。と肯定の言葉を伝えると、驚いたように目を丸くするキリトくん。

「じゃあ、最後のハンドガンはなんだ？」

「アレは、キリトくんのファイブセブンだよ」

そう。右膝でキリトくんを地面に縫い付け、僕が勝ち誇ったような言葉を吐いた時、僕はキリトくんの左腰からFN・ファイブセブンを抜き取っていた。「次の一手」とはこれである。

勝ち誇った「ような」言葉は吐いたが、だからといって油断してはいけない。相手が原作主人公ならば尚更だ。常に先手を打つ者が勝つのは、SAOでもALOでもGGOでも、はたまたリアルワールドでも同じなのだ。

「そういう事か……」

落ち込むように項垂れるキリトくんを笑いながら、注文したアイステイーを飲む。勝利のアイステイーは美味しい美味い。

「ま、これで一件落着だね。僕もキリトくんもシノンちゃんも明日の本戦出場だ。負けないよ。2人とも」

「ええ。もちろん」

「……………」

一人、暗い顔をするキリトくに気付きながらも、気付いてないフリをする。

明日が本番だ。立ち回り次第によっては、僕とシノンちゃんは原作通りに行けばシュピーゲルこと新川恭二に殺されそうになる。

もちろん戸締りはしつかりするが、そんなものは簡単に破られる。

そして、優勝すれば祝勝会として、負けたらお疲れ様会として、新川くんが毒を片手に僕達の家に入り込むだろう。そして、それを断る理由を僕達は持ち合わせていない。なぜなら新川くんは「友達」だから。

完全に死銃の脅威を取り除くのなら、アパートではなく電子キーのマンションに住めばよかったし、新川くんとも関係を持たなければよかった。しかし家はシノンちゃんに先に決めていて、僕が知つたのは当日だったからどうしようもなかったし、「もつと防犯セキュリティのある家に引っ越そう」とわざわざ提案する理由も思い浮かばない。

新川くんとは、まるで神の悪戯のようにあれからも何度か落し物だったりクラスメイ卜の行事だったり、外向的になったシノンちゃん……この場合は詩乃ちゃんの方が正しいか。詩乃ちゃんと仲良くなっていたりして、もう僕は止められなかった。

「新川恭二と仲良くするな」等と女々しい事をはつきり言えば、素直な詩乃ちゃんは僕の言葉を聞き入れ仲良くしなかつただろう。しかし、それでも新川くんは接触を続けてく

るはずだ。逃げ場のない学校で。既に学校には詩乃ちゃんの起こした《事件》の事は周知されているから。遠藤とやらは直接的ないじめはしないにしろ遠回しに詩乃ちゃんを孤立させたがっているようだ。何故かは知らないが（遠藤が元々いじめっ子気質な事もあるが、事ある事にイケメン（柊出雲）とベタベタイチャイチャする姿が気に入らなかつたという理由な事を永遠に知る事は無い）

「明日が本番だ。頑張ろう！エイエイオー！」

そんな緊張を解すように、自分に喝を入れ直し、明るく振る舞う。

「オー」

一応ノつてくれたシノンちゃん。

「……………オー」

相変わらず仏頂面なキリトくん。

「元氣ないねえ。明日が本番だよ？B. o. Bだよ！バレット・オブ・バレッツだよ！今から気が抜けててどうするんだい！」

「貴方が元氣ありあまり過ぎなのよ。もう疲れたわ……先にログアウトしてるわね」

そう言つて、さっさとログアウトしてしまふシノンちゃん。

「俺も……もう落ちるよ。お疲れ様、いい戦いだつた。シユウ」

そう言つて、返事も聞かずログアウトするキリトくん。

1人になるシユウ。

「……………明日が、本番だ」

誰も居なくなつたテーブル席で、笑顔を消して呟くシユウ。

波乱のB・O。B本戦になる事は間違いないだろう。死銃……………デスガン。その他強豪プレイヤー達……………課題は山積みだ。そう思いながら、ログアウトボタンを押し、リアルワールドへ帰還する。

「さっ、ストレス発散しましよ」

そんなリアルワールドで待ち構えていたのは、全裸の詩乃ちゃん。

「えっ?」

思わず困惑の聲が口から零れる。これから起こる事柄を想像し、下半身が熱くなる。「本番前のストレス発散くく♪」

そう言つて、猫のように僕の首筋を甘噛みする詩乃ちゃん。

いつそう守らなければ。と気を引き締め直……し、たい、が、詩乃ちゃんの僕の熱い下半身を弄る快樂が徐々に脳を支配する。

……むしろ守られるかもしれない。

そんな情けない事を考えながら、僕は諦めてアミューズファイアを外し枕元に置き、服を脱ぎ初める。

夜はまだこれからだ。

柊出雲とレン

明日からB・o・B本戦が始まる。

詩乃ちゃんとお発おっばじまって少し体力が落ちていますが、すやすや寝てる誌乃ちゃんを尻目に僕は再度アミクスファイアを被る。

詩乃ちゃんにも秘密の「ひみつ道具」を手に入れる為だ。本当は前々から手に入れておきたかったが、詩乃ちゃんにバレるとマズイ。原作的に。だから、こんなギリギリで手に入れる必要があったんですね（メガトン構文）

「リンクスタート」

お馴染みの挨拶を小声で唱えながら、僕はGGOへとログインした。

さて早速ひみつ道具の回収だ。と息巻いて砂漠フィールドへ向かう。ふんふんふん♪と鼻歌歌いながら歩いていると、物陰から小さな影が飛び出す。咄嗟の事で反応が遅れたが、避けるのは無理と判断し、相手の両手を掴む。

相手の両手にはVz61スコープピオンが握られており、まさにその銃口が僕の頭に向くところだったと思うと冷や汗をかく。

「はなせー!」

両手を掴んだまま宙ずりにするように持ち上げると、小さな影はジタバタと暴れ始める。声からして女の子だろうか。

「嫌だよ。離れたら殺すでしょ」

「殺さない！から！」

「うそつけ」

今でも少しでもスコープピオンの銃口を僕に向けようと手首をギチギチに動かしている奴がよく言うわ。

「はーなーせー！」

「ん〜……このまま圏内まで連れてくのもなあ……（初心者の方PKってとこかな……）本当に殺さない？」

「殺さない！」

「じゃあ離す」

パツと手を離れたら、ぶべつと顔面から着地する女の子。むくりと起き上がり、鼻をこする。

「どうやら本当に殺す気はなさそうだ。」

「君、凄いな。全然気が付かなかったよ」

「止められた方に言われましても……」

「あつ。最近噂の砂漠のPKプレイヤーって君？討伐隊組むとかって話もあったけど」
「えっ！」

「どうやら知らなかったようだな。本気で驚いてやがる。」

「しっかしウワサの「砂漠の悪質PK野郎」とまで言われてたのがこのちびっ子だとは到底思えんな。」

「そろそろ潮時かな……」

肩を落としてスコープピオンを背中に仕舞うちびっ子。

「でも戦法は悪くなかったよ。相手が悪かっただけで」

「それ自分で言います……?」

「トッププレイヤーだもの。速さにかまけた初心者プレイヤーに悪質戦法とはいえ負ける気はしないね（自分を柵に上げる）」

その後その子のPKを辞めるように言ったり、使ってる武器に関して説明した。

詳しくは同じ同性プレイヤーのシノンちゃんから聞く方が相手も緊張が解れるだろうと、早めに話を切り上げる。

「今度僕の彼女と一緒に武器見に行かない？数日はB。o。Bで忙しいけど、その後なら」

「……いいですけど……なんでそこまで?」

「ん〜……女の子には優しくってばっちゃんやが言つてたから？」
「適当!？」

そしてフレンド設定をして、この場を離れる。

まだやる事やってないしな。

そうして、単独で砂漠フィールドを抜け、荒々しい荒野フィールドに降り立つ。その中心とも言える場所に聳え立つ禍々しいタワーを見つめる。

ここは既に発見済みのダンジョンだが、まだ未攻略のダンジョンだ。まあ、攻略する気は無いが。

タワー1階、入口から数十メートル先の小さな小部屋に入ると、一斉にモンスターがPOPする。所存トラップ部屋である。

僕がP90（P）を入手した時みたいに、延々モンスターがPOPし続けるド鬼畜仕様ではないが、最近発見された極一部のルートでしか回ってないルートがある。今日はそこ目当てで来た。

軽く数十体をナイフとP90（P）で捌き切れば、部屋の扉が開き開放される。が、まだだ。

10分程待っていると、前触れもなく地面が消失し、ダストシユートの如く地面を転がる。落ちた場所はひつつつつつつるい部屋。所々朽ちた柱や何かの機械の残骸が

転がっている。

ピ。ピ。ピ。

そんな音がして、部屋の至る所で青い光が灯る。

又ひとつ、又ひとつとついでに行くその光が、レーザーサイトの如く僕を貫き、標準を合わせてくる。

遠くでは、何本も足のある機械型モンスターが立ち上がり、同じように目を光らせる。「ここをソロでクリアする……何処の勇者だよ……嫌になるな」

そう零し、固定型機械モンスターの目から飛んできたレーザーを避けるため、走り出す。

長いダンジョン攻略の始まりだ。

朝田詩乃と本戦の始まり

「おはよう」

「……おは」

少し身体をひねり、昨日のひみつ道具回収の疲れを取るように伸びをする。少し寝不足だ。あれから大変だったが……目的のものは手に入れた。後はどう使うかだ。

「元氣ないわね。今日、B・o・Bよ？あんなに楽しみにしてたじゃない」
「まあ……ちよつとね」

朝ご飯の支度に移る詩乃ちゃんを尻目に、もそもそと着替えを始める。流石に本戦直前に取りに行くのはやりすぎたか。強者達との5連戦の後だったしな……集中力も切れかかった。あの小さな女の子にやられてた可能性もある。もっと余裕を持つべきだな……色々と。

朝ご飯を食べ、ベットで詩乃ちゃんを抱き枕に疲れを取っていると、あつという間にB・o・B本戦の時間になる。

時間だね。なんてお互い吹き合い、アミユスファイアを被る。

ふう。と一呼吸置き、いつもの言葉で世界へ入る。ダイブする。

「リンクスタート」

既に会場は熱狂。B・o・B本戦に出場を決めた猛者や、それを観戦するギャラリイ達で埋め尽くされていた。

キリトくんの姿は見えない。

B・o・B本戦開始ギリギリまで姿を見せなかったもんだから、俺と詩乃ちゃんが入ってきた瞬間ドツ！と会場が湧く。

「期待してるぜー！」

「俺は狂人に賭けたんだから負けんなよー！」

「シノンちゃん愛してるー!!!」

最後のやつだけちよつと表出ろや。

とまあまあ、茶番もそこそこに、と思っていると、後ろからトントンと肩を叩かれる。振り向くと、顔面にリアルだったら取り返しのつかないタイプのタトウーを入れた粋な女性が立っていた。

「やつほー。久しぶりーシユウくん、シノンちゃん。」

「……は？私、貴方みたいな知り合い居ないけど」

「グサツ！心にくるわー。私よ私、ピトフィー！予選でも会ったじゃない！昔なじみを忘れないでよねー」

ああ……と少し納得したような顔をするシノンちゃん。

………えーつと………始めてみるなあ？………久しぶり？俺の知り合いにこんなタトウー………

「あえ………もしかして………スコードロン荒らしの………ピト………ピトフィーか？」

「ピンポーン！せいかーい！！スコードロン荒らしって言われるのはちよち心外だけどー」

ピトフィーはGGO初期の頃少しだけ遊んだ事のある女性プレイヤーだ。フレンド登録もしていないからすっかり忘れてた。こんなド派手なタトウー入れてなかったし。

スコードロン荒らしとは、このピトフィーの通称といふかなんといふか………プレイス

タイトルが壊滅的なのだ。チームで動けないとも言う。味方を盾に使うのは当たり前、自爆覚悟の特攻なんて日常茶飯事。そんな死にたがりGGOPレイヤーを好き好んでスコードロンに入れたくはない。最初は積極的にピトフリーがスコードロンに入っては追放されを繰り返していたが、いつしか話を聞かなくなつたな。辞めたのか、単純に受け入れてくれるスコードロンが無くなつたのか……

ちなみにスコードロンとは、ファンタジー世界で言うギルドやファミリー、クランミたいなものだ。同じタグを身に付けたり、名前にスコードロン名を入れるなんて本格的な奴もいる。僕の知り合いのスコードロンで言うと、《メモメント・モリ》というチームが居る。結構仲のいいスコードロンで、何度か勧誘も受けたが、シノンちゃんやとタッグチームでやっていくスタイルを崩す気は無いよと断っている。しかしこれまたチームリーダーが良い奴なのだ。気さくで陽キャで大人でイケメンアバターと来た。数少ないフレンドリストの仲間である。

話が脱線した
閑話休題

さて、なんで予選敗退のピトフリーがこの場にいるのだろうか。シノンちゃんにやられたようだし、恨み言のひとつでも吐きに来たのか？と伝えると

「まさかそんな！B. O. B本戦に出場出来なかつたのは悔しいし、そのストレスもあるけど、もう発散したから何も言うことないよー。まあ、今のGGOの強豪プレイヤー

のレベルを知りたくて？かな？ちようど昨日今日暇だったのもあるけど」

「そりや良かった。シノンちゃんに恨み言を言うようならそのド派手なタトウが血で染る所だったよ。それにしても久しぶりだねえ。ピトフィー。辞めたと思ってたよ」

そんな軽口を叩くと、

「私がGGO辞めるわけがないジャン！こんな楽しい世界他にないよ！」

手をひらひらしてケラケラ笑いそういうピトフィー。

シノンちゃんが呆れたような顔で僕の手を掴み、会場内へ引つ張る。

「そ。そろそろ本戦だから私達行くわね。じゃあね。ピトフィーさん」

「冷たっ！氷の狙撃手の名は伊達じゃないわー。ま、頑張つてね！私も2人に賭けるからー！」

投げキッスをして、僕達の横を足早に通り返り抜け会場内へ入っていくピトフィーを見届けながら、シノンちゃんのジト目を横から感じる。

「……私に話してない女の子の知り合い、まだ居たんだ？」

今朝、ちよつと前に会った（事にした）小さな女の子プレイヤー（最も、中身は女の「子」かは別だが野暮だ）の話をしたからか、少し嫉妬してくれているようだ。

「い、いやいや。ピトフィーとはそんな仲良く無かったし。シノンちゃんに紹介する前に縁切れちゃうくらい短い縁だったし！」

そんな言い訳をしながら、会場の所々に居る知り合いを尋ねる。
あつ話をすれば、じゃん。

「よオデヴィット！久しぶりだな！本戦出場おめでとう！」

「おめでとう。デヴィット」

「ああ。ありがとうシユウ。シノン。」

先程話に出てきたメメント・モリのリーダー、ドクロのエンブレムを仲良く揃えた6人組みの纏め役に話し掛ける。彼の名はデヴィット。ダビドと呼ぶと怒るので言わないが、たまに揶揄いで呼ぶ事もある。どうやら本戦出場したらしいことはメッセージで受け取っていたので、出場を喜ぶ。本戦が始まればライバルだが。

「俺達は今回も予選敗退ツスよー」

そう言うのはメメント・モリのチームメンバーのケンタ。某フライドチキン店の名前から取つたらしいが良くチキンチキンと揶揄われるらしい。先陣を切るアタッカーなんだがなあ。

「まあまあ。ケンタもジエイクもどんまいどんまい。また機会があるって」

他メンバーにも多少声を掛け、席を離れる。

すると

「俺に勝ったからには優勝しろよ」

唐突に目の前に現れたのはサトラライザー。怖いよお前……。

「あ、ああ。サトラライザーには世話にもなってるしな……優勝して弟子として不甲斐ない姿は見せねーよ」

「それでいい」

それだけ言つて人混みに去っていく。何が言いたかつたんだサトラライザーは……

予選で相対した緑髪のスナイパーちゃんも見掛けたが、声はかけないでおいた。シノンちゃんも居るし、勝者から敗者に言うことも無いしな……

そうこうしているうちに、本戦開始のブザーが鳴り響き、本戦出場者は順々に待機エリアに飛ばされる。

「じゃ、お互い頑張ろう」

「ええ。負けないから」

それだけ言つて、待機エリアに飛ぶ。

待機エリアで装備を整えていき、背中にナイフとP90（P）を実体化し、腰周りに8本のマガジンを実体化する。今回持つてきたマガジンはこの8本と本体に装着した計450発しか持つて来て居ない。それもこれも、僕の筋力値が低いせいなのだ。

準備を終え、フィールドに飛ばされるのを待つ。

大きく表示されたタイマーが残り10秒を指した時に、すうつと深呼吸をし、後は自

分を信じるのみ。

このGGOで、死者は誰一人出さない。

誰一人……

フィールドに飛ばされ、目を開くと見渡す限りの砂漠だった。これは……GGO編最終回でキリトくとデスガンが戦った場所だな。最初つからクライマックスとまでは行けないので、最初のサテライト・スキャンまでにもっと入り組んだ場所に移動しなければ。自分が得意なフィールドに入り込まなければ……

私が飛ばされたのは森の中だった。

スナイパーとしてはこの上ない不利な地形だ。高い所に乗ってまずは視界を確保しよう。そう思い、周囲を見渡すと、いい感じの塔を見つけた。B・o・Bではまずlkm四方に敵はスポーンしない筈だから、その塔に素早く登り、視界を確保する。

どうやら森は中々の広さらしい。このまま森の中の塔の上で、視界が悪い中周囲を索敵するか、素早く好立地な場所に……ここからなら、南の方向の廃墟ビルが立ち上るフィールドに移動するか悩む。さて、どうするべきか……

デスガンを止められるか。そんなプレッシャーの中、始まったB・o・B……優勝な

んでどうでもいい。いや、本気で狙いはするが、まずはデスガンだ。菊岡さんの依頼を達成しなければ。

周りは神殿のような教会廃墟のと真ん中だった。祀られている女神像には苔が生えており所々欠損も見える。

サテライト・スキャン端末を取りだし、現在地を確認する。どうやら中心最北端のまあまあデカイ神殿跡スタートのようだ。

まずはデスガンの特定から始めなければ。先日知り合ったシユウかシノン。どちらか……または両方に手を借りたい所だが……残念ながら、本戦開始前に聞きたいことも聞けなかったし、情報は無いに等しい。

1km四方に敵はいない。とルールブックには書いてあったが、もしかしたら1km先にデスガンが居るかもしれない。デスガンはあのぼろマントから姿を変え、俺にはデスガンだと認識出来ない姿で現れるかもしれない。

「クソツタレ……」

悪態を吐き、サテライト端末とにらめっこしながら次の手を考える。

「どうする。考えろ。考えるんだキリト……デスガンは……死銃は何処に居る……!?!」
そんな焦りの言葉は、キリト以外誰もいない協会の虚空に吸い込まれた。

朝田詩乃とB. o. B本戦Part 1

「ハア……ハア……」

走り続けて、なんとか砂漠フィールドを抜け、アメリカンなデパートやらビルやらが立ち上る街に辿り着く。左手に着けた腕時計を見れば、開始から12分も経っていた。後サテライト・スキャンまで3分しかない。

急いでデパートの階段を駆け上がり、屋上に出る。そこは小さな遊園地のようになっており、寂れたメリーゴーランドや小さい汽車の玩具なんかが散乱している。ここならサテライト・スキャンも受信出来るだろう。入口も1つなので、そこさえ見張ってればいい。

3分経過し、最初のサテライト・スキャンが開始される。端末を表示すると、北側から南側にかけてスキャンの光が走る。

「キリトくんは最北端か……」

巨大建造物のような物の中に《Kirito》のプレイヤーネームを見つける。次に、マップ南側の廃墟郡に《Sinon》のネームを。どうやら開始15分では大きなドンパチは起こっていないらしく、髑髏のデスマークも1つ2つ程しか見つからない。1つ

だけシノンの程近い場所で殺られているデスマークがあるが……

自分の位置する中央東部の廃墟郡周りに敵は……

「居る!?!」

マップで見るととても近いが、四方15kmのマップ換算としてエリア1つ分は離れてるから距離にして1km程か。俺や他のプレイヤーと同じく移動する様子は（少なくともサテライト・スキャン中は）なく、1箇所にとどまっている。

プレイヤーネームの確認をすると

「夏候惇^{かこうとん}……?」

聞いたことがあるような……少なくとも俺と同じB・o・B本戦出場組のGGOToppプレイヤーに変わりは無いが、上澄み程度しか覚えてない俺からしたら取るに足らないプレイヤーだ。この妙に聞き覚えのある名前は過去戦った事のある名も無きToppプレイヤーかあるいは……

「原作組……」

そう、今の俺の一番の懸念、「原作組」である。もう何十年も前の事であり、一々プレイヤーネームなんて覚えちゃいないが、死銃の事もあるし、被害者は0で行く。もしかしたらこの夏候惇とやらは死銃に殺された原作組の1人かもしれない。

……そうじゃないかもしれないけど!!

「とりあえず交戦は不可避だな。相手も俺に気付いただろうし、俺のプレイヤーネームを見て逃げ出す様子もない……」

アレコレ考えていると、サテライト・スキヤンによるスキヤンが終わり、プレイヤーネームが消えていく。俺も端末を脇腹にしまい、先程夏侯惇の居た方角を屋上から見下ろす。もちろん動く影ひとつ見えない。当たり前だが。

俺の戦法的に、守るより攻める方が得意だ。シノンちゃんが一撃必殺なら俺は見敵必殺である。夏侯惇とやらがどんなプレイヤーでどんなプレイスタイルかは知らないが、安全にご退場願おうか……（ニチャア）

屋上の金網を飛び越し、崖際に腰から取り出したワイヤーを引っかけ、ラペリング降下する。以前サトラライザーに教えてもらった軍法の一つである。ホントアイツなんでも知ってんな……（それを覚えるシユウとシノンも大概である）

ラペリング降下を終え、地に足をつけてワイヤーを巻きとる。夏侯惇がスナイパー型なもの予想して、素早く降りたつもりだが、撃たれなかった。少なくとも見つかつてはいないらしい。通りを100m3秒フラットの速度で駆け抜けて、夏侯惇のいた方角へ走る。

すると、前方二時の方向、崩落したビルの2階からマズルフラッシュが光る。しかし、俺は足を止めない。初弾数発が俺の近くの地面に着弾し、遅れて弾道予測線が俺の周り

を赤く染める。

足は止めない。弾道予測線は俺の常に背後を捕らえる。

「速すぎんだろッ！」

そんな声が無駄からか聞こえてきそうだが、知ったことでは無い。車輪のない車の上に1歩で飛び乗り、2歩目でバスの上に飛び乗り、3歩目は……問題ない。その時既にビル2階相当の高さに到達しており、敵プレイヤー……夏侯惇は俺の射程範囲内だった。

既にリロードを終えた夏侯惇の持つアサルトライフルの銃口が、逃げ場のない空中に居る俺に向けられようとしているが、それよりも前に俺の剣のように突き出したP―90（P）の射撃の方が速い。

この距離では外す方が難しい。

「見敵必殺」

夏侯惇の体は凡そ20発と少し。秒数に直せば1秒足らずで、体を赤いダメージフェクトで覆われ、赤い髑髏マークと《Dead》の文字が浮かぶ。

「リロードは……弾は有限。しなくていいかな」

それは、第1回サテライト・スキャン開始より、5分足らずの出来後であった。

「うーん……」

B. o. B本戦開始から15分。キリトは神殿から出ることなくサテライト・スキヤンの端末とにらめっこしていた。

「VRMMOゲーム大会の定石なら、近くの敵の場所に向かうべきなんだろうが……」

如何せん見知ったプレイヤーはシノンとシュウしか居ない。他のプレイヤー全てを「死銃かもしれない」と仮定して動くとしても、危険過ぎる。なぜなら方法は不明だが、敵は当たれば1発で敵を……本当の意味で「殺す」事が出来る銃を持つ《死銃》だ。

《Dead》を示す赤いプレイヤーアイコンも2つ程しかない。キリトに出来るのはそれがプレイヤー間による当たり前の戦いによる終結であることを、死銃の毒牙にかかっ

ていない事を願うことだけである。

キリトは《SAOサバイバー》と呼ばれる、生粋の（望んでないが）廃VRゲーマーである。それよりも前からゲームにはどっぷりであったが、所謂FPS（ファーストパーソン・シューティング）ゲームは得意分野ではない。しかも完全フルダイブ型の。今まで剣か魔法の世界で生きてきて、灰と銃の世界に舞い降りた今でさえ剣は捨てられず、お守りのような（予選でシユウにまんまと利用されたが）ファイブセブンしか銃要素はない。

要するに、どう動けばいいのか分からないのだ。

SAOやALOのような仮想世界ファンタジーの戦いの定石は知っていても、GGOのような銃世界ガンゲームの戦いの定石はてんで素人であるキリトには、サテライト・スキヤンにより（世界の《端》である北側を除けば）四方1km以内に敵は居らず、自分の……《Kirito》の方に向かうマーカーも居ないという事しか分からない。

「あっ」

そうこうしているうちにポツポツと敵アイコンが消えていく。

「……………うー……………」

廃ゲーマーも、畑が違えば素人である。

「まずは一人……」

ジャキン、とコツキングして12.7mm NATO弾を排莖する。

首を中心に頭部に当たる部分を全て範囲威力ダメージで吹き飛ばされた首無しアバターが、髑髏マークを浮かべながら倒れるのをスコープ越しに見つめる。

B. o. B本戦開始から7分。シノンの行動と戦いは速かった。

周囲を森に囲まれたフィールドという、スナイパー殺しな場所でスタートした自分の運を最初は呪ったが、ツキが回ってくるのは速かった。近くの高台に登り、四方を警戒していた所、森を抜けた所、ちょうど草原と森の境目に、森の中に向かって走り込む黒スーツの影を見つけた。

知り合いに黒スーツの超近接戦闘特化の凡ゆる軍法の師匠にあたる人物が居るが、彼は予選で私の夫に殺され敗退している。彼に憧れ触発されたプレイヤーだろうか……

彼ならば……サトラライザーならば、ギリースーツを纏い森に紛れるだろうが、彼は持ち合わせがないのか余裕が無いのか、黒スーツのまま森に向けて走っている。

簡潔に言えばヒジョーに目立つ。

「馬鹿なのかしら……」

敵のいる方向を覚えたまま、高台から1階まで降りる。

塔の1階の窓を開け、バイポッドを立てて敵のいた方角を探す。木々に隠れきれていない黒い影が、スコープ越しに見える。スコープに搭載された測量機が表す距離は2084m。ギリギリではあるが、有効射程距離内だ。しかもほとんどと距離は縮まっている。

「何をそんなに逃げているの……?」

ポツリと独り言を零しながら、スコープのつまみを弄り狙いやすい倍率を調整する。

敵の全体が映る倍率まで調整してから、引き金に指をかける。敵はこちらに気付いた様子はない。弾道予測線も見えていないだろう。態々リスクを負って弾道予測線なしの舐めプ（舐めプレイ）射撃をする意味は無い。

スウツと一息を吸い、バレットサークルが収縮し、引き金を引く。

静かだった森に激しい銃撃音が鳴り響き、黒スーツの敵はそれに驚く間もなまま、

第3回B・o・B本戦を退場した。

第3回B. o. B本戦最初の殺戮賞は、シノンの物になった。

……その8分後、サテライト・スキャンで確認した黒スーツの男の名は《キャノン》となっていた。
知らない名だ。

朝田詩乃と観客

「……………」

《死銃》は困り果てていた。

第1回サテライト・スキャン、死銃はマップ北東、廃駅校舎にスポーンしていた。近くには《Kirito》の文字。距離にして3〜4km程か。

「……………ハア」

赤い目を光らせながら、マスクの中でため息を吐く。

死銃の第1目標はキリト……ではない。なにせ、死銃はキリトを本当の意味で「殺す」手段を持ち合わせていないからだ。

自分の怨敵。宿敵とも言つていい存在だが、今彼をB・o・Bから退場させるべきか悩んでいた。

今後の事を考えるなら、彼の装備でちゃっやとキリトを「殺す」のではなく「退場させる」事が最善なのだろうが、如何せん相手はキリトだ。《黒の剣士》《二刀流》《チー

ト殺し》。彼を呼称する名は多いが、GGOに来てからは弾を斬ったりしているらしい。なんなんだアイツは。頭痛の種でしかない。

しかし、もし、もし名前が同じだけの偽物なら……いや、B。o。B本戦に残っている時点で、「弾を斬る」なんてGGO離れた芸当をする人間と《黒の剣士》が同じ名前である時点で、その可能性は捨て去っていいだろう。

「(……当初、の、目的……を、遂行、するか)」

彼はとりあえずキリトは放置し、サテライト・スキャン端末から最も近い「殺せる」相手の名前を探し出し、其奴の場所へ歩を進める。

「ファースト・キルは氷の狙撃手様かあ。さっすがあ！」

ワイワイ、ガヤガヤとB。o。Bを観戦する人々の集まるグロツケンの某酒場。予選敗退プレイヤーや、物見遊山で来た中堅プレイヤー、勉強の為に来た初心者プレイヤーでこった返していた。

ピトフーイは、そんな酒場のとある個室で、モニターを前にアイステイのような何

かを飲みながら観戦していた。

「何故俺を連れてきた。ピトファイ」

「イーじゃないーじゃん。友達でしょー?」

「お前なんかと友達になつた覚えは無い」

隣に座るは黒スーツの男、サトラライザー。同じ個室でピトファイから出来るだけ距離をとつて座つて、反対側のモニターを見ている。

「まあまあ。お二方落ち着いて……」

間に挟まるはケンタ。強豪スコードロン《メメント・モリ》の攻撃手である。この個室の中では比較的まともな部類の人間だ。

「放つておけケンタ。どちらも話の通じる相手ではない……ああ、サトラライザー氏。別に貶した訳では無いから気を悪くしないでくれ」

そしてデヴィット。先程紹介した《メメント・モリ》のスコードロンリーダーであり司令官である。他にも《メメント・モリ》のメンバーがこぞつて集まっている。

「あの……なんで私はここに……」

ちっこいローブを被つた女の子がピトファイの隣で常時冷たいアイスティーを小さな手で弄りながらピトファイに話しかける。

「見学だよ見学。レンちゃんはまだGGO初心者でしょー?上澄みの戦いは見て損は無

「いって。ホントは参加して欲しかったけど……まあそこはしようがないか」

「ピトフリーがレンと呼ばれた少女の肩を組みモニターに近付ける。」

「それじゃーレンちゃんのために、今回第3回Bバレット・オブ・バレット。o。B本戦出場者の目玉出場者達を

紹介しよー！

「五月蠅い……」

サトラライザーが独り言るが、そんな事はお構い無しに参加プレイヤー一覧画面に切り替える。

「まずはこの子ね。第3回B。o。Bファーストキル賞受賞者の水色の髪の毛の女の子、シノンちゃん。通称《氷の狙撃手》。《審判者》なんて2つ名もあるけど、まあこれはコンビ名みたいなものかな。スナイパーの腕は超一流。私の知り合いにも上手い人居るけど、その人とイーブンかそれ以上。使ってる主武器は《メインウェポンウルティマラティオ》シリーズの《ヘカートII》っていうユニーク武器の対物ライフル。ちなみに予選で私が殺られちゃった相手。」

「ピトさんが!?!」

「そーよもーズバンとね。気付いた時にはくって奴?」

ヘラヘラ笑いながらびつくりしているレンを横目に見ながらアイスティーを飲む。

「次にその相方、平々凡々な姿からは予想出来ない超AGI敏捷値特化型スタイルのシユウク

ん。スピードで言えばラン&ガンの鬼《闇風》以上、多分単純な走るスピードならPS
 込みでGGO最速だね。どつかの誰かさんが言った「AGI特化型最強論」を嘘じやな
 く現実にした最強の一角。主武器はP-90 (P)。P-90っていうレア武器のプロ
 トタイプだよ。ちなみにこれもユニーク武器」

「プロト……タイプ?」

「開発初期段階みたいな意味かな。今の所市場にも出回っていないし発見報告もなし、
 まああんな松葉杖みたいな銃まともに使うのシユウくんくらいしか有り得ないと思っ
 けどー!」

「それでも無いぞ」

ピトフーイの解説に横槍を入れたサトラライザー。

「奴の予選で見たが、あのP-90 (P)は《光剣》を受けてダメージエフェクトも出さ
 ない並外れた耐久値を持つ。それにあのデカさだ。いざと言う時には予選でやったよ
 うに盾にもなる。重量の問題でサブアームに重い物を持ってないのは難点だが、シユウに
 はそれを補ってあまりある素早さがある。P-90 (P)もP-90も同じ
 パーソナルディフェンスウェポン
 P D Wだ。DPSも高い。俺も予選で体感したが、シユウの素早さは恐ろしい
 武器だ。そこにあのPDWが加わったせいで手が付けられなくなっている。シユウと
 同じAGI特化型ならシユウのように見付け、走り、^敵近距離から^{必殺}蜂の巣にする戦法が

出来るし、お前のようなSTR特化型なら盾と弾幕で草原だろうが平野だろうが戦える。P-90はその脆弱さ故に使い手を選ぶ武器だが、P-90(P)にはそれが無い。多少重い程度苦にもならん強武器だ。まあその大ききゆえに室内戦の取り回しの悪さ、アサルトライフルの直径でサブマシンガンの戦いを求められる難しさ、拡張性のなさは弱点だが」

「(い、いきなり饒舌に話し出したぞこの人……)」

「ハイハイ厄介オタクくんは黙ってようね」

少し引き気味のケンタと、それをサラツと流すピトフィー。プレイヤー一覽をスクロールしながら、次なる強敵を探す。

「そーそー私あんま知らないんだけど、このキリト? って子も強いらしいね。なんと弾を斬ったとか」

「弾を?」

「デヴィットが驚いたように聞き返す。

「私も見た訳じゃないんだけどねー。シノンちゃんに頭ぶち抜かれて自棄アイステイヤーしてる時に酒場からそんな声が……」

「フン。お前のような奴の言葉信用出来んな。」

若干所じやなく険悪ムードのデヴィットとピトフィー。昔なんやかんやあって仲の

悪い2人だが、実はこの個室の主はデヴィットだったりする。ピトフィーがレンとサトライザーを引きずるように乱入し、嫌な顔をしつつも「初心者育成の為」とレンを引き合いに出され紳士で押しに弱いデヴィットは流されてしまった。

「他にはそだなー……この子かな」

そう言つてピトフィーが参加者メンバー一覧の1人の名前をポチりと押す。

「エンフォーサー。通称《ルールブック》」

「押し付けがましいクソの間違いだろ」

「実力は本物だつて」

苦虫を噛み潰したような顔をするケンタ。過去苦渋を飲まされた事がある。

「まあコイツは強さで言えば中堅の上澄み。ギリギリトッププレイヤーみたいな奴かな。主武器はC o r a i l 4 8。まさかまさかの光線銃使い！防護フィールドはみんな付けてるだろうし、減衰も考えて使つてる変態プレイヤーだよ。でも対人による光線銃使いとしては、トップレベル。通称も光線銃使いにとつての《ルールブック》だから。つて意味ね。本当なら対モンスター用の光線銃をあまつさえ対人大会のB・o・Bで使う生粋の変態……2回言っちゃったけどまあそんなヤツ。組むヤツ組むヤツに「近未来武器とは素晴らしい！」つて事を布教して回るつて事で、ある意味煙たがられるよ」

「光線銃つてそんなに対人で弱いんですか？」

初心者プレイヤーのレンがピトフーイに質問するように声を出す。

「弱いも弱い。超弱い。実弾タイプと戦ったらまず勝てないね。防護フィールドでダメージ減衰激しいし、リロード……まあ光線銃の場合エネルギーパックの交換も手間がかかるし。いい所なんて弾速とエネルギーパックのコスパの良さかなー」

「でもこの人はその光線銃で予選通過して本戦に出てるんですよ？」

「そう！だから変態なのよこいつは」

そんな会話をする横で、ケンタがレンの隣まで来て、耳打ちするように話す。

「まずこのエンフォーサーとかいう奴は参考にしない方がいい。光線銃には光線銃なりの良さがあるのは分かるけど、神みたいに崇める奴が一定数いるから、君も気をつけな」
「は、はい」

ケンタはそれだけ言って、メモント・モリの仲間達の元へ戻っていく。

「どしたレン。口説かれた？」

「そ、そんなんじゃないですよ！」

慌てて弁明するレンに、？マークをうかべるピトフーイ。

「まいつか！他には、そうだなあ。この夏侯惇っていうプレイヤー……」

ピトフーイが夏侯惇のプレイヤーネームを指差した瞬間、ピコン。という音と共に赤く染まる。

「……………」
無言のピトフリー。

「……………」
オロオロするレン。

「……………」
無関心なデヴィット。

「……………」
で？」

そしてサトライザーが嘲笑を浮かべながら固まるピトフリーの方を見る。

「……………」
は、ザコ!!!」

快活な笑顔でプレイヤー一覧を閉じるピトフリーを見て、レンは静かに苦笑した。

朝田詩乃とB. o. B本戦Part 2

開始から20分経過。

夏侯惇なるプレイヤーを屠ったシユウは、次なる獲物を求めて廃墟郡を抜けて行った。

「5分前キリトくんは最北端に居た。まだ動いていないと楽観視の仮定をして、俺の場所から最短距離で妨害無しで走ったとしても10分はかかる。そしたら次のサテライト・スキャンが始まる。キリトくんが俺と同じ「死銃排除」を目的に動いてるなら協力出来る……かもしれない。どう説得するか、何故俺が死銃を信じているかを説明するかは……どうするか」

廃墟郡を抜け、高架線に出る。コンクリートジャングルの次はマジのジャングルなのか、向かう先には木々が見える。予選でキリトと戦ったような橋の上を残像が見えそうなスピードで走るシユウは、直線上にマズルフラツシユを見て、前傾姿勢で走ってた体制から前に転がるように倒れ、その弾丸を交わす。遅れて銃声が鳴り響き、シユウの後ろの空間に吸われるように弾丸が通り抜ける。近くの塀に素早く身を隠し、敵の射線から逃れる。

「不味ったなあ。速く移動しすぎたか。」

脇腹からサテライト・スキャン端末を取りだし、現在位置を把握する。腕時計を見ると開始27分時点。現在地はマップ中央北部高架線。前回のサテライト・スキャン結果を表示すると、12分前に中央北部に居たプレイヤーは3人。

「銃士Xと……ルルドと……ペイルライダー?」

最後の名前には聞き覚えが良くあつた。知り合いでもある。

三次元戦闘を得意とするショットガン使い。上澄みの上澄み。正面切つての戦いは避けたい所である。特にこのような高架線では。

しかし、今しがたの攻撃からしてペイルライダーである線はないと見える。ペイルライダーならば、態々長距離攻撃をせず、真つ直ぐ走る俺に対し突然目の前に現れ奇襲するのが一番得策だからだ。今合間見えているのは恐らくスナイパーの遠距離型。スナイパーライフルセミオートライフル
S RかS A Rかは分からないが、少なくとも中々長距離を専門とする輩だろう。シノンのようにMP7のようなサブマシンガンを持つてる可能性もあるが、考えたらキリがない。

幸い対スナイパー戦はシノンちゃんと散々やり合つてる。

塀から飛び出し、一直線に敵に向かつて走り出す。1発、また1発と弾道予測線をキツチリ見ながらかわして行く。動きは最小限に。相手は弾道予測線なしの射撃をす

る「上澄み」ではない。弾道予測線を出してくれるお優しいスナイパー様なら、態々ジグザグ走行をする必要も無い。

間隔からしてポルトアクシオンライフルだろうか。何発か撃たれた後相手のローディングタイムが挟まり、その間にグンと距離を詰める。遠目に見ても分かる銀髪の長い髪。露出度の高い服。今気付いたが、彼女も同じ原作組、「銃士X」だ。「こつち」の世界で見るのは初めてだが、「あつち」の世界で初めて見た時の衝撃を覚えている。確かキリトくんに殺られたんだったか……

銃士Xとの距離が100mを切った辺りで、銃士XはSRを置いたまま腰からハンドガン抜き放ち、こちらに射撃する。流石にこの数の弾をこの距離で全弾かわすのは不可能なので、弾道予測線に添わせるようにP-90(P)を盾に使う。カンカンという子気味いい音を銃越しに聞きながら、相手の弾切れに合わせてスリングから外したP-90(P)を銃士Xに投げ付ける。

「ぶがつー！」

女の子とは思えない声を出しながら、P-90(P)の直撃を顔面に食らう銃士X。少しのけぞったのをいい事に、右手に持つハンドガン（恐らくコルトガバメント）を右足で蹴り、そのまま一回転。左手で抜き取ったカランビットナイフで銃士Xの首横を突き刺し、確実にダメージを与える。

「あんっ………… た………… ! 私には………… 銃すら使う必要ないって………… !?」
 「…………… まあ、そうなるな」

馬乗りになって確実にダメージを与える為左手に握ったカランビットナイフをグルグルと回転させていると、抵抗虚しく銃士Xの体から力が抜けていく。

「あT u c h i c o た私の名前を…………… マスケテイヤイクス銃士Xを…………… 忘れるなよ…………… !」

そう捨て台詞を吐いて、《Dead》の文字と共に完全に力が抜ける。カランビットナイフを抜き取り、鞘に収めながら少し離れた所にあるP—90 (P) を回収してスリングを巻き直す。

「…………… マスケテイヤイクスって読むんだ…………… 何故にフランス語?!」
 頭に大量のクエスチョンマークを浮かべながら、再度北部を目指して駆け抜ける。

「…………… 流石にそろそろ動くか」

腕時計を見ると、開始から既に20分経っている。未だにここに誰も来ていないのは幸運と言うべきか、行動を決めあぐねていたキリトには丁度良かった。

「(とりあえず確定白のシユウカシノンに会いたい…………… あわよくば協力して死銃を討ち取りたい。菊岡さんから方法についても依頼が出されているが、流石に大会内で暴くのは難しいだろう。まだ見ぬ死銃が今も誰かを殺しているかもしれないと思う…………… ゾツとするな。)」

そんなある意味達観した思考をしたまま、移動を開始しようとする、西側出口から足音がする。

神殿の構造上、中央奥に座する苔むした女神像の他には、西、東、そして南の3つの大きな出口しかない。他には教会にあるような椅子が転々と転がるばかり。キリトはすわ死銃かと身を眺め、敵を視認する。

左手には湾曲した刃のような刀身むき出しの武器を付け、不格好にも腕が2倍の大きさに見え、切っ先は地面につきそう。チューブのようなものが、背中に背負ったタンクに繋がっている。右手にはこれまた不格好な丸い銃を携え、両脇についてるエネルギー

ギーパックのような物が百足の足のようにわきわきと忙しく動いている。

「Kirito…… Kirito…… キリト！キリトさん！まだ居ますかな!？」

気持ちの悪い銃と刃を携えた男をよく見ると、その両手と背中中に担ぐものを除けば、神父のような格好をした男が自身の名を読んでいた。ハッキリ言つて気持ち悪い。

「居ないのか?…… はて。気配はするので居ると思ふのですが……」

所謂《第六感》はVRゲームではまことしやかに噂される《システム外スキル》の一つである（ちなみに他のシステム外スキルと言えば、シノンが使う「弾道予測線なし射撃」等がある）

一説によると、VRゲームのCPU負荷による微細な違和感を感じとる敏感さだとか。キリト視点からしてみれば、過去SAOで宿敵茅場晶彦を倒した時のように《心意スキル》かもしれない、というのがいちばん濃厚なのではないか。と思つている。

「…… まあ、この神殿内には居る様子。更地にすれば出てくるでしょう。」

その言葉を聞いて、不味いと思ひ相手の一挙手一投足を見逃さんと物陰から除くと、敵は左手の刃を横風に一閃した。

すると、明らかにその刃の長さからは有り得ない大きさの「斬撃」が飛び、椅子達を撫で斬りにする。東口を背にする様に女神像の裏に隠れていたキリトには幸いダメージは無かったが、文字通り女神像前の広場は更地となった。

「残るは……そこですか」

女神像の方を向かれ、バツチリと目が合う。ニヤリと厭らしく笑った敵は、右手の筒状の武器をこちらに向ける。

すると、チュインという音と共に銃口から細長いビームのようなものが伸びて女神像を攻撃し始める。これだけか？とキリトが頭を女神像の裏に隠すと、ドカン！という音がなり、キリトのすぐ横に穴が開く。

「(チャージタイプのエネルギーライフル!?それにエネルギーの斬撃を飛ばす刃……) どちらも厄介だ。しかし死銃ではないな……)」

「出てこないんですか?このまま少しづつ回って言ってもいいのですよ」

傲慢とも取れる敵の言葉に、あえてキリトは乗ることにした。

「…… わかった出る。出るよ」

キリトは両手を上げ、女神像から出る。敵は右手のライフル(?)を下ろし、左手も下ろす。

「やあやあ。私はエンフォーサー。初めましてキリトくん。」

「…… ご紹介どうも。キリトだ。よろしくエンフォーサー。で、なんで降伏勧告なんてしてきたんだ?」

両手をおろし、お互い構えを解いた状態になる。

「降伏勧告なんてとんでもない。貴方が素直に出てくれば、このチャージライフルも、Coral48も振るわなくて済んだんですよ」

肩を竦め、やれやれと言葉をこぼすエンフォーサー。キリトは少しムツとしながら、答える。

「ならば何故呼んだんだ。これはバトロワだろ。戦う以外に道は無い」

そう言うと、驚いたような顔で左手を口に当てる。

「それはとんでもない。確かにこれは最後のひとりになるまで終わらないバトル・ロワイアルです。しかし戦う以外に道は無いとは嘘でしょう？ 貴方も他の道があることがわかってはいるはずですよ。私は人の心を読むのが得意なのですよ」

その言葉にキリトは少し考え込む。確かに他に道はある。先程シユウやシノンに對し考えたようなもの……そう。「共闘」だ。手を組み、多対1の状況にし、有利に先頭終盤まで生き残る。

「なんのメリツトがある。最後は殺し合うんだろ？」

「そうですね。私はエネルギー武器とはいかに優れているかをこの世界に広める為、優勝しなくては行けません。ですが私1人で最後まで残れるかは心もとないのです」

困ったように左手を頬に当て考え込むエンフォーサー。それに対しキリトは嘲笑で返す。

「随分と弱気だな。こんな芸当出来るなら誇っていいんじゃないか？」

粉々になった椅子達やえぐれた女神像下部を見ながらそう言う。

「確かに素晴らしい威力だったでしょう？しかし、大いなる力には代償がつくもの。この《Corral48》はその威力はともかくエネルギー消費が激しくてですね。市場には出回らないユニーク武器なのですが、あんな大技は連発出来ないのです。かといってこのチャージライフルだけでB. o. Bを勝ち抜けると自惚れるつもりもございません。そこで、同盟を結びませんか？」

言いたいことは分かる。確かにあんな飛ぶ斬撃連発されたらいくらキリトとてひとたまりも無い。回数が限定されるなら、仲間を増やし、確実に屠れる時に確実に振り下ろしたい致命の刃だ。

「なるほどな……だがなぜ俺なんだ？俺はお前を知らないし、お前も俺を知らないはずだ。名前はサテライト・スキャンで確認したんだろうが……そのご自慢の目でもプレイスタイルやプレイスキルまでは見抜けないだろ？」

「確かにその通りです。私は貴方がどんな武器を使い、どんな戦い方をするのか分かりません。ですが仲間は多いに越したことはありません。そうは思いませんか？光剣を使う近距離タイプでも、レーザーショットガンを使う中距離タイプでも、チャージライフルを使う遠距離タイプでも、仲間に居れば心強い物です。プレイスキルに関しては問

題ありません。ここはB・O・B本戦。予選6回戦を少なくとも5連勝してきた方々しかおりませんから」

つらつらと自分の作戦をまくし立てるエンフォーサー。キリトは目を瞑り胸に手を当てるエンフォーサーを見ながら、思案する。

「そうか…… そうだな…… ぐ尤もだ」

事実、キリトはこの提案を受けるべきなのだろう。目の前の奴が死銃本人ではないだろうが、死銃の手先かもしれない可能性を考慮しても、メリットは大きい。キリトの場合死銃さえどうにか出来ればいいだけで、最悪エンフォーサーに裏切られても問題は無いのだ。

「そうでしょう？ ですから、貴方も私と一緒に……」

しかし

「だが断る。」

キリトは光剣を掴み刀身を出した。

頷かなかつた理由はいくつもある。

ひとつは、先程も言った「死銃の手先」である可能性。キリトとという名前に反応して、監視する為に送られてきたとしても不思議では無い。何より…… 死銃ライン・コライン、笑う棺桶のやりそうな事だ。

それにまだある。

もしエンフォーサーが死銃の手先ではなく、純粹に勝利を掴み取る「1プレイヤー」であつたとして、先程「最悪エンフォーサーに裏切られても問題は無い」と言つたが、それは「死銃との問題」が解決した後の事になる。死銃をどうこうする前に裏切られ殺された日には、遙々来た意味がなくなつてしまう。

理由はまだある。

死銃が誰かを害する時や、死銃本人と対峙する時、逆に同盟相手のエンフォーサーが邪魔になる可能性が高い。別にプレイスキルを疑つている訳では無いのだ。ただ、1人のプレイヤー相手に本気の共闘をするなら、アスナのような心の知れた相手ではないと本気を出しにくい。キリトはあくまで「ソロ」プレイヤーなのだ。

そう思い、光剣を構えエンフォーサーと対峙する。辛い戦いになるだろう。激しい戦いになるだろう。相手は遠距離ビームライフルに飛ぶ斬撃使い。対してこちらはメインウエポンは1m程の刃しかない光剣1つ。ファイブセブンは頼りにしていない。

そう思つてみると、わなわなと手をふるわせ、左手の刃でキリトの握る光剣を指差す。

「それは……………光剣……………ですか？」

まるで信じられない。と言つた顔でキリトを見つめるエンフォーサー。キリトは警戒しながらも問に答える。

「そうだが……」

「それだけで本戦に？」

「殆どは……」

「それだけで？」

「何度も聞くな。なんなんだ。」

「……」

黙り込むエンフォーサー。警戒は辞めないキリト。頓着状態が続く。先手必勝か、と思ひ腰のファイブセブンに手を伸ばしたキリトが……

「素晴らしいツツツツ!!!」

「……はあ？」

本気の「はあ？」である。エンフォーサーは膝から崩れ落ちて、四つん這いになる。今なら隙だらけだ。殺してくれと言っているようなもの。

「おお…… おお!!! 私以外にも！エネルギー武器をツツ!!その可能性を信じた者が居たのですねツツツ!!!」

「……」

いやーそんな事ないつすよ。たまたま、本当にたまたま、剣が光剣しか無かつただけで。

とはいえず。

「すみません……謝罪させてください。私は貴方に嘘をつきました。同盟など仮初……背中を見せれば直ぐにCorral48で体を真つ二つにする気でした……灰と銃に取り憑かれた者にはお似合いだ。と……」

つらつらと勝手に懺悔を始める始末。もうキリトには何が何だか分からない。チャージライフルも地面に置き、自分で壊した女神像に対し祈っている。

「神よ……エネルギーの神よ……GGOにおいて淘汰されしエネルギー武器使いはまだ居たのですね……救いはあつた……」

VRゲーム独特の過剰表現により、大粒の涙をドバドバと流しながら祈るエンフォーサー。なんだこれは。キリトはとりあえずエネルギー節約の為光剣をしまった。

「グスツ……おお同志よ。すまなかつた……お前も私と同じなのだな……しかし、同盟が出来ぬことも事実……誓いましょう！最後！このB. o. Bの頂点に立つのは、エネルギー使いの私か貴方だと！そして最後、ぶつかかる斬撃、有終の美……美しい……今から胸が踊ります。」

チャージライフルを持ち、すくつと立ち上がると、パンパンと無いはずの埃を払う仕草をする。もう既に涙は流していなかった。

「それでは、私はこれにてお暇させて頂きます。最終決戦で、また会いましょう。」

そう言って、エンフォーサーは笑顔で立ち去る。

キリトはただぼうつとし、

「(ファイブセブン…… 出さなくてよかった……)」

自分が普通に実弾も使うタイプだと知られなくて本当に良かったと思うのであった。

朝田詩乃とB. o. B本戦Part 3

「(見付けた……が……)」

左手が指し示す時間は開始29分時点。第2回サテライト・スキャンまで後1分。巨大建造物(神殿か?)から出てくるキリトくんを発見した俺は、何とか接触を試みる。

「(なんとやって話しかけるか……。「やあキリトくん!偶然だねえ。良かったら手を組まない?」なんて言っても、偶然なわけない事なんですすぐバレるだろうしなあ……14分で一直線にキリトくんの所来た訳だし)」

この時、辛くもキリトとシユウの思惑は一致していた。

キリトは「死銃を倒したい」

シユウも「死銃を倒したい」

実の所シユウの懸念は杞憂で、キリトはシユウかシノンを探して、とりあえず近いシユウの方向に歩を進めていた所なのだ。かといって手を組む「きっかけ」が両者にはない。シユウは(表面上は)死銃なんて噂でしか知らないレベルだし、キリトも死銃に關してリアルで巻き込むまいと詳細を説明する事は出来なかった。

「(何かきっかけを……いや、待てよ)」

その時、シユウに電流走る。

「(キリトくんは死銃を倒す為にB・O・Bに来了。俺も愛するGGOとシノンちゃんのためにみすみす死者を出すまいと首を突っ込んだ。原作を知っていながらこれ以上誰かを死の運命のまま放置することなんて出来ない……キリトくんから見たら俺は「怪しい」だろう。死銃の手先という意味ではなく、単純な信頼関係の不足だ。俺とキリトくんはまだ知り合って日が浅い。そんな俺がノコノコ出たってキリトくんに信用してもらえるか……なんて、俺らしくないし、キリトくんらしくないか)」

「キリトくん」
「ツ!？」

神殿外の外柱から身を出し、キリトくんの前に姿を現す俺。

「やあ、キリトくん」

「……よお、シユウ(どうする……確かにシユウは完全白側の人間だ。仲間にするにも申し分ない実力がある。それは俺自身が体験している……だがシユウはどうだ。俺の「本当の目的」を伝え協力を請うか? いやしかし、シユウは純粋なGGOプレイヤー。俺の事情に巻き込むのは忍びないし、なにより信じてもらえるか……いや待てよ。何故シユウは俺に声をかけた? 予選でシユウに俺のプレイスタイルや強さは理解されているはず……なら態々声をかけずに先手を取ればいい。何故だ……」

?まさか俺と同じで死銃を止めに? いや、死銃は噂程度しか知らないはず。死銃が「本物」なんて……)」

「色々考えてるね」

臨戦態勢で長考するキリトくんに対し、俺は降伏宣言をするように両手をあげる。

「手を組もうじゃないか」

「……何?」

「僕とシノンちゃんは「ガチ」で殺り合う約束をしたんだ……キリトくんには言っていないけどね。率直に言えば手を貸して欲しい。」

「そんな痴情のもつれに俺を巻き込むのか?」

「キリトくんにも有益な話だ。僕は対シノンちゃん用に決戦兵器キリトくんを手に入れる。キリトくんは優勝の為に僕を利用する……win-winだろう?」

俺はこう考えた。あくまでも「ゲーマー」目線で同盟を結ぼうとする。そして恐らく次のキリトくんの答えは……

「悪いが、優勝には……さほど興味は無い。俺の目的は別にある」

そら来た。

俺は少なくとも表向き「死銃」の情報はない。ならばキリトくんに自白させればいい。キリトくんは俺を「単純に優勝を狙うGGOPレイヤー」と見えるだろう。本来の目的

は同じだが、キリトくん目線から見れば俺は完全なる部外者。「死銃」の脅威を知らない
GGOのトッププレイヤーとしか見ていない。

「それは…… どういう事だ？」

「…………… 説明すれば信じてくれるか？」

「内容によるな。何にせよ、助力は願いたいが…… つと。その前に、第2回サテライ
ト・スキャンが始まる。お互いそれを見よう。話は後にしてくれ」

「ああ」

時間を忘れていた。時計を見れば開始30分丁度。サテライト・スキャン端末を取り
出せば、同じく北側からスキャンが始まる。

「俺、キリトくん…… エンフォーサー？ 近いな。なんであいつが……」

「なあ」

サテライト・スキャンを見ながら、キリトくんが俺に話しかける。スタスタと無防備
に端末を凝視しながら俺の腰掛ける柱まで来て、隣に座る。

「今、このプレイヤーの中で、お前の「知らない」プレイヤーは誰だ？ 生死は問わない」

恐らく死銃のあぶり出しの為なのだろう。それは俺も知りたい。「死銃」の名は覚え
ていても、ゲーム内でどのような名前だったかまでは覚えていないのだ。とはい

え……

「なぜそんな事を?」

「いいから教えてくれ。説明は後でする」

何処か焦ったように端末の画面を俺の顔面の前に押し付けるように見せるキリトくん。同じ端末持つてるつーのと思いながら、プレイヤー一覽を見る。

「まあ俺も顔が広い訳じゃない。流石に全員は知らないが……そうだな。「知らないし聞いたことも見たこともない」のは……《Sterben》……ステイブンか? ドイツ語ならステルベンだな。他には《rurunbo》……《deathl3》……くらいか。この《銃士X》って奴も知らなかったが、俺がもう殺した。マスケティアイクスって名前らしい」

「殺した!? どんなヤツだった!」

キリトくんの剣幕に少し驚く。

「お、おお……まあ落ち着け。銀髪ロングの女だったな。スナイパーだ。」

「女か……なら違うか……?」

死銃はどいつだったか……ステイブン(ステルベン?)か、ルルドか、デス13か……

「このルルドってやつは最初キリトくんの近くにいたな。まだ生きてる。今は離れているようだが……ん? 今も動いてるな。南側に少しづつ移動してる。俺もすれ違っ

たか？」

マップに生きてるプレイヤーはもう半数が死亡していた。この15分で死者がどつと加速したらしい。ちなみにステイブンとルルンドとデス13以外は知ってるか聞いた事のあるやつばかりだ。

「そうか…… わかった（ならルルンドは白か？ 何処か特定のプレイヤーに向かったり、特定の場所に向かつている訳でもない…… むしろ逃げている？ どんどん南側に進んでいるな…… 俺とシユウが同じ場所にいる事で恐らく同盟…… はまだ結んでないが、実質停戦状態なのは全プレイヤーに周知された事だろう。ルルンドは俺の名前は知らないはず。無意味にスキャン中に動き回る理由は……）」

「このルルンドって奴、何かから逃げてるな」

「恐らく、俺達だろう。単純に多対1を恐れているか、シユウの名を見て逃げたか…… ルルンドの向かう先には誰も居ない。死体だけだ。」

そう言つて、サテライト・スキャン端末を弄るキリトくん。俺も自分の端末を見ながら、シノンちゃんの位置を把握する。

「おい…… お前の女神様、俺達の方向に直行だぜ」

「ええ？」

そう聞かれ、こちらに少しづつ動いているマーカーをタップすると、《Sinon》の

文字が。どうやらご立腹らしい。俺とキリトくんが手を組んだのがそんなに許せんのか。そうかそうか。愛い奴め。

そんなことを考えていると、スキャンが終わり、マーカーが消えていく。

「あつ…… まだ見たかったのに」

そういうキリトくんに、

「知らねーの？ こっこ押しや前のスキャン結果見れるぜ。ちなみに第1回の方もな」

端末横のボタンを押すと、再度画面にスキャン結果が表示される。もう一度押すと、先程見た第2回サテライト・スキャン結果が表示された。当たり前だが既にルルドもシノンちゃんも動きは止めていた。いや、正確には動いているのだろうが、「最終結果」しか表示してくれない特性上、今移動しているのかはわからないだけだが……

「そ、そうか。ありがと…… う？」

端末を見ながら、違和感に気付いたようなキリトくん。どうした？

「どうした？」

「いや…… なんか、少くないか？」

「ああ、そういう事ね。サテライト・スキャンは水の中とか、洞窟の中とかのプレイヤーは表示されないよ。ビルとか家とかなら中にいても表示してくれるけどね。設定的には空の遙か彼方にある衛星が生体反応を空からスキャンしてる、だからな。電気を通

さない洞窟や分散する水の中なんかはスキャンしてくれないんだ。逆に、スキャン中にスキャン範囲内に居なきや、結果を受信できないんだけどな。恐らくそういった所に隠れてる奴らが一定数居るんだろ。プレイヤー一覧に名前は隠せんがな」

これは第1回、第2回B・o・Bでも同様だった。俺は出場してないが、第3回B・o・Bに出るにあたって、情報収集しているうちに知った事だ。ちなみに情報源のサトライザーは洞窟やらなんやらで徹底的に姿を終盤まで隠し、俺のように見敵必殺かつ売られた喧嘩は買うスタイルで全滅させたらしい。ある程度暴れてからスキャンに映り、最後の敵を殺した……と言っていた。

「そうなのか……」

「そ。んで、話って何さ。優勝以外の目的って？」

「ああ、それは……」

そしてキリトくんは、自分が「死銃」という存在についてとある人に調査依頼を出された事、今回のB・o・Bもその一環である事、俺にはその「死銃」についての調査を手伝って欲しい事を話された。

「死銃なら俺も知ってる。噂程度にはな。あの薄塩たらことゼクシードが撃たれて、それで降ログインしてないとか……」

「その2人なら、既に死亡が確認されている」

「何?」

薄塩たらことゼクシードに俺は接点はない。ゼクシードは嘘の提唱をした筈の俺のプレイスタイルを嫌って、俺からのコンタクトを尽く避けていた。薄塩たらこは探したが、薄塩たらこのフレンドを名乗る人物と会った時には既に「死銃とやらの撃たれてからログインしていない」と言われた。彼らの死を避ける事は出来なかつた。

「なら噂は本当なのか?あの……撃たれたら「死ぬ」……っていうのは」

「……… 本当だ。方法は分からないが、両者ともリアルで不審死を遂げてる」

「お前はなんでそんな事を知ってるんだ?」

「さつきとある人に依頼されて調べてるって言っただろ。その人の情報だ。信じていい……と、思う」

「おいおい…… 当のお前が「と、思う」なんて程度の信用度で俺に信じろってか?」

「バーチャルな関係じゃなくリアルでの関係だ。少なくとも、俺は信じてる。だから来た(昔の因縁もあるしな……)」

「そうか……」

キリトくんが話してくれた事は、概ね原作と同じ内容だった。死銃はSAO編で悪事を大盤振る舞いした笑う棺桶ラフィン・コフィンとやらの残党だ。それは覚えてる。SAO編でのプレイヤーネームも覚えてないが…… 確か《Poh》とかいう奴が頭領だった気がする。そ

の部下だろう。そこら辺はキリトくんは誤魔化したか……

ちなみに俺の言った「対シノンちゃん決戦兵器」は嘘だ。口から出た出まかせである。シノンちゃんに勝ちたいのは事実だし、俺はともかくシノンちゃんが死銃の……新川恭二の毒牙にかからない為、速やかにご退場願いたい。今は大半が電子ロックだが、原作死銃はそんな事お構い無しに家に侵入し、対象を葉で殺していた。今からどうこう出来ることじゃない。住所も既に新川恭二にバレているし……

「もし新川くんに何かしら心境の変化があつて、俺達を殺さない方向に進めていたとしても、死銃本人とラフコフ達はお構い無しに殺しにくるだろう……そうか。そうだな。確か手口は……透明マント的な物を被つて、総督府でGGO参加時に入力される個人情報で家を持つて……」

あつ、これ俺やつてるやん。もし新川恭二が改心してたとしても、ラフコフ残党に俺の家バレてるやん。終わった……

いやまあ、新川恭二が改心してない可能性の方が高いだろう。新川恭二本人は……やらされていたか率先してやっていたかは忘れたが、参加していた事は覚えている。今でもあの「アサダサンアサダサン」シーンは記憶に残ってる……

「まあとりあえず、お前の言い分は分かった。良いだろう。協力してやる」

「本当か？ 死銃に殺されるかもしれないんだぞ？」

「…………… それでもだ。愛するGGOで死者はこれ以上出したくない。それに……………」

「…………… それに？」

「事件」の事がフラツシユバックする。

当時の俺の無力さ。シノンちゃんの…………… 誌乃ちゃんの心の傷。想い。そして…………… 俺の頬に、未だに残る傷。

俺はともかく、これ以上誌乃ちゃんの心と身体を傷付けるのは御免だ。

俺は言葉通り、誌乃ちゃんの為に、誌乃ちゃんの為だけに、この世界リアルに来たのだ。救う為に。

「…………… いや、忘れてくれ。もし全部が終わって、誰も死ななかつたら、また話そう」

「…………… わかった。」

何かを察したのか、俺の目を見てそう呟くキリトくん。こういう時SAOサバイバーであるキリトくんの洞察力というか、観察力というか…………… そういう物に救われるな。

「それならまずこれからどうするか、それを話そう」

「乗り掛かった…………… いや、乗った船だ。俺の女神様の命が危ねーってんなら、救うのが道理だな」

対死銃用作戦ミーティング開始。